
魔女の夜

ロリコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の夜

【Nコード】

N2406N

【作者名】

ロリコン

【あらすじ】

魔女を殺したことにより、次代の魔女を継承することになった黒崎望と、その周囲の話。

魔女の夜 - 1

首が切断される。

頭と身体を隔離する赤い線が首に円を描き、線の内側からはスプリングラーのように細粒な血液が霧吹きに飛び出してくる。赤い線は幅を徐々に広げていく。首の下から駆け上る血液の圧力に負けた女の頭が、遂に空中へと跳ね上がった。頭を失った鋭利な切断面から、掘り出された噴泉の勢いに、血飛沫が吹き出した。

宙を飛ぶ魔女の頭は、闇から織り出したように黒く長い髪を振り散らしながら、夜空をくるくると飛んでいく。女の首はやがて、鈍い音を立てて着地し、地面をゴロゴロと転がった。首の切断面がアスファルトと触れたときに、横転が止む。土中から生首が生えてきたような光景が出来る。

魔女は閉じていた目をパチリと開いた。両目のまなじりから、魔女は血の涙を垂れる。

「あーあ、アタシもヤキが回ったもんだ。夜の闘いに敗北しちゃうなんてね。死んで当然だ」

唇に血を吐き飛ばしながら、魔女はつぶやいた。悲壮感も焦燥感もなく、それはただただ平坦で、本心をごまかすような棒読みの台詞だった。

魔女の首と触れる地面の間から、真っ赤な血がじわじわと染み出してくる。地面に広がる血液の色が、周囲の闇夜を溶け込ませながら、光を反射しない漆黒に変わり始める。悪い魔女は首を刎ねられてなお、現世に及ぶ魔力を用いて夜の闇を吸収し、己の存在を継続させるつもりと見えた。黒崎望は魔女の行為を禁止した。

「魔女。あなたの肉体と魂はわたしの復讐心の前に敗れた。これを

認めなさい。いくらあがいてもお前の運命は変わらない。静寧なる心で死を受け入れなさい。そうすれば、天界の裁定者に計らわせ、お前に輪廻を約束しましょう」

「へえ。あんた案外やさしいのねえ」

魔女は血まみれの目をゆつくりと閉じた。そこには意がなく、静寂を含んでいた。再び開くことはないだろうと、光景を目にしていた誰にも思わせた。魔女の首からアスファルト上に拡散していた血液が活動を止める。

「最後に会いたい男がいたんだ。元気にやっているのは夜闇の顫動で分かっていたけど、きつといい男になっているんだろっね。まあいいや。それじゃあね、ごきげんよう」

魔女は最後に、いかにもといった凄惨な笑みを口角の端に吊り上げ、それを置き土産にして果てた。黒崎望は魔女の首に歩み寄り、両手で拾い上げた。血液で衣服が汚れることにも気を留めず、しっかりと抱きかかえる。

頭部を失ってなお、地面に足を付け、仁王立ちに残っている魔女の身体。その身体の上に、黒崎希は魔女の頭をそつと乗せた。手を離し、生前と殆ど変わらなくそこに現れた魔女の姿に、黒崎望は拍手を2度叩く。頭を下げてお辞儀する。

魔女の亡骸は、自らが支配をしていた夜の闇に吞まれると、消えた。

同じ時をして、黒崎望の精神から、悪い魔女を標的とした復讐の宣誓が闇に吞まれて、消えた。

しかし、7歳に宣誓をした黒崎望が今日までの12年間、忘れることも風化させることもなく、心にずっと抱き続けて生命の駆動力

としてきた、魔女に対する復讐の悪意は、黒崎望の想像以上に彼女の精神深くへと侵食していた。黒崎望の心を苗床に発芽し、12年のうちに巨大な樹木にまで発育した悪意は、魔女を殺害した事実によつて役目を終え、腐つて倒木した。が、張り巡つた根までが完全になくなることはなかった。まだ幼かった黒崎望の精神がばらばらになるのを、森林の根が土や石をしつかりと掴むようにして、とどめ、守つてきたのは他でもなく、魔女への一途な憎悪の心である。もしそれが黒崎望から失われてしまったら、支えを失つた黒崎望の精神はたちまちのうちに破砕されてしまう。そうなれば黒崎望は自我を喪失して死ぬ。黒崎望と彼女の増悪は依存し合うのではなく、致命的な因縁を内包する共生の關係に変転していた。黒崎望は魔女を憎悪した修羅から完全に脱却することが出来なかった。

黒崎望は黒い魔女の継承技能の全容を理解してはいなかった。しかし今夜、黒い魔女と対峙し、魔女と自分の殺意が一瞬間交わつた時、黒崎望は結末を見た気がした。黒い魔女の名は、それを否定し抹殺したものの、魔女を忌み嫌い、憎み、恐れる感情自身に飛び火して、強制的に闇黒を継承させる方法で続いてきた。自分を殺した相手の心に生まれる、ほんの僅かな罪悪感の亀裂に、強引にねじ込んでくる魔女の図々しい継承技能は、誇れる勇氣と健全なる生活と潔白な精神を持つものならば、難なく抗うことができるだろう。が。黒崎望は勇氣も、健全な生活も、潔白な精神も持ち合わせていなかった。12年の歳月に渡り、彼女の内側に抱き温められ、役割を終えてなお払拭されずに残る悪意の根。それが魔女継承の闇黒と共鳴をして、黒崎望の中に魔女の素質を迎え入れた。黒崎望はそれに抗えなかった。黒崎望が生き続けるためには、魔女を受け入れるしかなかった。

黒崎望は絶望や落胆ではなく、これは初めから決まっていたことなんじゃないかな、運命なんじゃないかな。そう考えて、諦めた。お父さんを殺したのが魔女だと知り得、幼いながらに魔女に対する

復讐心に心を燃やしたあの夜に、もう、わたしは魔女になっていたんじゃないかな。

「ノンちゃん……」

「心のどこかで……あいつを、魔女を殺せば全てがリセットされる
と思ってた。普通の、その辺にありふれてるような人生を送れるよ
うになるって思ってた。でも……違う。今はただ胸が、苦しい。復
讐を終えたらもっと、心に新鮮な風が吹き込んで爽やかに感じて、
人生の次のステップに進むための、復讐心に変わる希望の力が身体
の奥底から湧き出てくるものだと思って……。それって違ったんだ
ね。全然違う。憎しみと長く交わり過ぎちゃったのかな。あいつを
殺した今も感じる……自分の心が、拭いきれない闇黒に汚れている
こと。その闇黒が、あの魔女だけを憎しみの対象にしていたわたしの
誓いが、あいつだけにぶつけるつもりで芽生えさせたこの殺意が、
魔女を失って行き場をなくしている。いつの間にか巨大になって、
魔女の命だけじゃ足りなくて、暴走を始めてる。わたしの意思とは
無関係に、わたしには何の関係もない人たちを駆逐しようと手を伸
ばし始めている。わたしはそれを収められない。自分の非力さを痛
いほど感じる。心がひどく後ろめたくて息苦しくて、申しわけがな
いと思う。でも、その懺悔の念と一緒に、強い安心感と充足感も沸
き上がってきてる。これまであいつを憎しむことでしか自分を築き
上げこれなかったわたしの精神が、支柱を失って壊れてしまわない
ように、新しく憎悪の対象を選択しているんだ。わたしの自我が失
われないように、守ってくれているんだ。わたしの心の闇は、宿主
のわたしを救おうと努力している。はつきりと分かる。それは病氣
で寝込んだ家人を看病しようって思う子供みたいな純粋な気持ちだ
よ。悪意はないけれど、でも最後にはきつと悪を生み出すんだろ
うけれど。ああ。でも、これから魔女になるわたしにとって、この闇

黒は都合がいいのかも。だって無理して関係のない人を恨んだり憎んだりする必要なくて、呼吸をするみたいに自然とそうなってくれるんだもん。ね？ えへ」

「望ッ、ふざけたこと言ってんじゃねえよ！ お前、夜の魔女を殺したら、自分が次の魔女になっちまうことを知ってたのか？ 初めから全部知ってたんだな！？ それなのにどうしてッ、なんで自分の一番憎むものに、自分自身が変わっちまう方法を……」

「ミーちゃんと深田君には、どれだけ感謝しても足りない。今まで私の我がままに付き合ってくれて本当にありがとう」

「なっ、なんで最後のお別れみたいなこと言うん？ あたしこれからもノンちゃんと一緒に居るつもりだよ。ノンちゃんが魔女になったって、そんなのあたしとノンちゃんの仲の、なんの障害にもならんよ。なんも変わらんよ、あたしたち。ノンちゃんが魔女の悪い気持ちに負けへんように、一緒に戦うよ。初めから諦めとってどうすんねや。ノンちゃんらしくないよ、1人で抱えんとしてよ、あたしにも手伝わしてよ！ これまでとおんなじじゃんか、3人で乗り越えていったらええじゃんか！」

「望、お前。クソッ、望！ 縁起でもねーこと言うんじゃねえよ！ 1人で背負い込もうとすんなよ！ 今までと同じように、俺達の側にいてくれよ。魔女になんてならないでくれ。魔女を殺せたんだから、魔女になる運命だって、そんなもん覆せる力がお前にはあるんだろ？ お前だけの力じゃ足りないなら、俺とみどりが手伝ってやるから！ だからお願いだ、ここに居てくれよ、どこにも行かないでくれ」

「……ありがとう。本当に、ありがとう。それしか言葉が見つから

ない」

<<【デリンジャー】黒崎望の魂が形を変える。

<<黒崎望は黒魔女を継承し、【魔女】黒崎望に変化した。

「ありがとう、二人とも」

俯いた黒崎望の目元に、涙が浮かぶ。

街頭に照らされた黒崎望の足元に伸びる影から、黒いもやが立ち昇ってくる。

自分という存在を他人の記憶から抹消するのは、簡単である。魔女ならば、なおのことだ。他人の記憶にある自分の姿や言葉や行動を、自分以外の誰かのものと挿げ替えてしまえばよいのだ。人間の記憶は曖昧で、殆どが思い込みの領域を脱しない。魔女が人々の記憶を操作するときも、その思い込みを利用する。

ただし、魔女といえども、容易に改竄出来ない記憶がある。その人が何よりも慈しむ記憶。或いは何よりも憎しむ記憶。心に強く感じる記憶。それらは、魔女や姫のような強い力を持つ者であっても、操作するのは困難だ。

そのときは、操作しなければ良い。下手に手を加えたりせずに、相手の記憶そのものを破壊、抹消してしまえばいい。そして相手の持つ既存の記憶を寄り集めて、選別、加工し、代換の効く嘘をつくりだす。

魔女は相手の記憶を破壊した後、相手の欠落した記憶の部分に嘘で作ったパテを流しこみ、埋めてしまう。

<<【魔女】黒崎望の影から時間と精神の管理者クロノが召還された。

<<クロノは前田みどりが持つ黒崎望に関する全ての記憶を対象に、破碎及び改竄の処理を行った。処理は間違いのない精密さで行われた。これ以降、前田みどりは黒崎望に関する既存の記憶を全て失い、記憶を呼び戻すことが出来なくなった。

<<クロノは深田裕が持つ黒崎望に関する全ての記憶を対象に、破碎及び改竄の処理を行った。処理は間違いのない精密さで行われた。これ以降、深田裕は黒崎望に関する既存の記憶を全て失い、記憶を呼び戻すことが出来なくなった。

長い黒髪が夜風に揺れる。

風に揺れる木々、擦れ合う葉々が、甦った魔女の恐怖に悲鳴を上げる。

猫は急いで逃げ出し、町中で戸惑う。

犬は威嚇に遠吠える。

救急車の赤いサイレンが闇夜を突き刺す。

この街に新しい魔女が誕生した。

魔女の名前は黒崎望という。

「さようなら。ありがとう」

魔女に関わると碌なことが無い、と、かつて1人の姫が口にした。そしてそれは、きっと本当だ。

黒崎望はその言葉を信じていた。

だから、2人から自分の記憶を奪った。

新しい魔女となった黒崎望という女の記憶を、2人から抹消した。だけど、それは何よりも悲しかった。

取り壊された大型デパートの更地に立ち尽くし、黒崎望は瞳から溢れる悲しみに抗い、上を向いた。

彼女の傍らに立っていた2人の人影はもう、ない。

夜風を身に浴びている。

1人で。

「1人だ」

1人は、怖い。

黒崎望はあの夜に、父親を失って以来、1人になることを何より恐れた。

現実的なものではなく、精神的な面で。

いつも誰かに支えられていたい、また、その逆でありたい。

常に願っていた。

前田みどりと深田裕はそれを叶えてくれた。

黒崎望の側にいつもいてくれた。

黒崎望は、2人のことを誰よりも好きだった。

愛していた。

なによりも大切だった。

その2人を、黒崎望は自ら切り捨てた。

「魔女と関わった人は不幸になる、から」

魔女と関わったものの末路はいつも哀れだ。

それは事実だ。

魔女の強すぎる魔力が、周囲のものの精神や運命を病ませるのだ。故に、古来から魔女は町外れの辺鄙な場所にたった独りで暮らすことが多い。

他人をむやみに不幸へと貶めないための、魔女の良心だ。

賢明な魔女は、誰とも関係を持たない。

黒崎望が親友らの記憶から自分を抹消した本心も、そこにある。

そこにあるはずである。

あるはずである。

はずである。

そのはずである。
が。

そうであるのか。

果たしてそうなのだろうか。

本当に、そうなのだろうか。

黒崎望の決断には、彼女の親友を思いやる意図が、本当にあったのか？

彼らの未来を慮る優しい心を、黒崎望が持っていたというのだろうか。

本当に？

本当だろうか？

本当は違うのではないか？

黒崎望は、魔女となった自分が、2人に苦痛と悲痛を与えることのないように、自ら2人を遠ざけたのか？

本当は違うのではないのか？

自分の本意をごまかす為の、隠れ蓑ではないのか？

「え？」

魔女の粗悪な運命に巻き込まないように、泣く泣く2人を突き放したって？

2人の幸せを祈りながら？

2人が何も知らずに、平穏な生活を続けていけるようにって？

「そう、だよ？」

本当？

のぞみちゃん、本当に、そう思ってんの？

それ、違うでしょ。

「どこが違うっていつの？」

おい。

おいおいおいおい。

やめてよね。

とぼけるんじゃないよ。

それとも、

本気で言ってるのかな？

「本気って……わたしは嘘なんてついていない」

嘘はついてないって？

「そうよ。嘘なんて言っていない」

分かってないね。

嘘を言っていないっていう、それがもう嘘なんだよ。

のぞみちゃんは、うそつき、だね。

「は？ わたしのどこが嘘つきなの？」

ふっふっふっふっふ。

「何がおかしいの」

いやー、ごめんごめん。

ふふふはは。のぞみちゃんは嘘つきの上に、自分が嘘をついてい
るっていう自覚をまるで持っていないんだ。

根っからの魔女気質じゃん。

「はっ？」

のぞみちゃんは、魔女の命を絶った代償として魔女の名を継いだ
んじゃないかって、元々そうだったんじゃない？

「バカじゃないの？ そんなことあるわけ」

のぞみちゃんはきつと生まれながら魔女として生きていくことを
決定付けられた娘なんだよ。

あはははは。

「違う。ありえない」

いやあ違うわない。あたしの思う通りの人間だよ、あんたは。

うっはー面白ッ、天使が魔女の子を産んじゃったんだ。

うひひひひひ。

「黙れ」

おっと。

怖い怖い。

その握りしめた拳はなあに？ わたしを駆逐しようとしているのかな？ 無駄だけどね。

「お前は誰だ」

わたしの正体が知りたい？

あーらら。そんな闇雲に知覚神経を周囲へ張り巡らせても無駄よ。そんなほうに居やしないんだから。

「……こころ？」

外れ。

あんだの中にいるわけじゃないよ。

でも、そこもわたしの一部だけどね。

「お前は誰？ 歴代魔女がわたしの心に塗り付けた闇黒？」

そんなこと、どうでもいいじゃん。

それよりも、望ちゃんって本当に酷いよねえ。

ミーちゃんと深田君を自分の良いように操っちゃうんだもんね。

あの2人をオモチャみたいに扱っちゃうんだもんね。

でもまあ、他人を自分の好きなようにいじくるのは得意だもんね、

魔女はさ。

「だから、それは違う。わたしは、2人のためを思つて」

ブブー、ハッズレー！ ざんねーん。

まだ嘘付くつもりなんだ、まったく、しょうがない子だねー。

自分で認めることが出来ないんだー望ちゃんは。

ふふ、じゃあわたしが教えてあげちゃおっかなー。

わたし、ちゃんと知ってるんだよねー。

望ちゃんは自分を守るために、2人を自分から突き放したんでしょー？ 最初からそのつもりだったんでしょー？ 2人のことなんてこれっぽっちも考えていなかったんでしょー？ 実は、あの2人の記憶から自分を消したんじゃないんだよねー？ 実は実は、その、逆！ 自分の記憶から、2人を消したんだよねー？ だって、もう傷つくのは嫌だもんねー？ お父さんが突然いなくなつた時と

同じ気持ちを味わうのは、もうゴメンだもんねー？ あのと2人がー、
魔女になった望ちゃんの姿勢と感情に絶えられずに、望ちゃんと縁
を切るのなんて時間の問題だったしー？ 記憶を消そうが残そうが
どっちにしろ2人が自分から離れていくのは、絶対に阻止できない
必然のことだったからねー？ それだったらさー、あの2人に愛想
尽かれて捨てられるくらいならさー、お父さんを殺されたときと同
じ孤独を、も一度味わわなきゃいけないくらいならさー、捨てられ
る前に自分から2人を捨てたほうがいいよねー。そんなの当たり前
だよー、こっちが捨てられるよりも何倍も楽だもんねー？ わた
し1人で生きていけます宣言しちゃったほうが、開き直れるもんね
ー？ 苦痛なんて感じもしないもんねー？ 望ちゃんはミーちゃん
と深田君がこれまでと同じような接し方はしてくれないだろなーつ
て考えたんだよねー？ だって望ちゃん、悪い魔女になっちゃった
んだもんねー？ 魔女になった望ちゃんから、2人の友情が簡単に
離れていっちゃうと思ったんだよねー？ 9年間も一緒にいた友達
の言葉を、信じてあげられなかったんだよねー？ あの2人の記憶
から自分をさっさと消しちゃうなんて、うふふつふふふいいん
じゃないいいんじゃないの、望ちゃん。あらあらららら、なに、
なんなんですか。やだ！ 泣いちゃったりしてんの望ちゃんってば、
もー。悲観する必要なんて全然ちつともないじゃーん？ だってだ
ってだあーっ、てー、望ちゃんの自己防衛に打算的なところって、
とっても魔女ぽくてすごおくステキじゃなーい？ それに他人を心
から信頼できない、根っからの疑心暗鬼な気質とか、つい今まで唯
一無二の大切な親友だった奴等の記憶を、一瞬で闇に葬っちゃえる
冷酷さとか、そんじょそこの魔女じゃあ、とてもとても、足元に
及ばないって感じで、ちょーくーる！ わたし思うんだけどさあ、
望ちゃんって、すごくすつごく悪い魔女になれると思うなー。っ
てかこれって誉めてるんだからねー？ 分かてるよねえ、望ちゃ
んはアホでクソで救いようのないバカどもを地面に平伏させて、そ
いつらの顔面を踏んづけて踏んづけて、腹を蹴って蹴って蹴って蹴

って血を吐くまで蹴り上げて、それから殴って殴って殴って殴って
目も鼻も口もグチャグチャになるまで殴ってやったあとの皮が崩れ
て骨が剥き出た醜い顔面を指差して、笑って笑って大爆笑しておな
かがねじれて痛くなるくらい笑い転げてやる場面を、せっかい中の
人たちに見せてあげるのが仕事なんだからねー？ 間違っても自分
が好かれようとか、そんなこと考えちゃダメなんだよー？ あっあ
ー。でもでもでもでも、望ちゃんは根性が根っから捻じ曲がってっ
から、無理に嫌われようなんて考えなくってもいいザマスよー。望
ちゃんの普段どーりの、寝て起きてメシ食ってウンコして歩いて走
って、声を出したり頭を掻いたり笑ったり怒ったり昼寝したりって
いう、ナチュラルな生活の振る舞いが全部、周りの人たちを余すこ
となくム力つかせるだろーからねー。なにしろ、お前は、魔女なん
だからねー。うひっひひひひ無駄ですよ無駄無駄、無駄なんだって
ば。魔女の運命から逃れられることは誰にも出来ないよ。

唯一お前の命が失われる瞬間を除いてね。

「わたしは、」

「わたしは魔女だけれど、それを誇らない。約束します。黒い魔女
であっても闇に触れません。お日様を尊び敬います。誠心誠意で万
人に接し礼儀を重んじます。誓います。誰とも剣の先を交えません。
誰にも憎しみや苦しみを植え付けません。守ります。人を好きにな
ります。素敵な人と愛を育みます」

黒崎望の生活は変わらなかった。

朝7時に起きて目覚ましテレビを見る。

朝食にはトーストを食べる。

自転車で駅まで行って、満員電車に乗り、窮屈な目に遭う。

倦怠で退屈な講義をこなして家路につき、菓子類で小腹を満たし
てから、スーパーのレジ打ちのアルバイトに出かける。

真面目に働く。

仕事を終えて、コンビニに寄って、帰り道沿いの民家に飼われている愛想の良い犬の頭を撫でる。

豆電球の点いたオレンジ色の1Kアパートに帰り、テレビを付けたままベッドに寝転がって、雑誌を読んでいるうちにウトウトして、夜中の4時ごろにふと目を覚ます。

テレビと電気を消して、ちゃんと布団に潜って眠りにつく。延々とリピートする。

ただ、前田みどりと深田裕の姿は、そこにはない。静寂に満ちている。孤独が耳に痛い。

「クロっちー、なに1人でブルーはいつちゃってんのー？」

「あー、えーべつにそんなことないよー」

学食でノロノロと昼御飯を口に運んでいた黒崎望に、肩越しから声を掛けてきたのは瀧本瞳だった。雑誌のモデルを忠実に再現したようなファッションセンスの比較的いける友人だった。今日はレザージャケットとリーバイスで決めている。望はそれよりも、瀧本が履いているスニーカー調のハイヒールが珍しくて気になった。そのヒールをカツカツ言わせながら、瀧本は望の向かいに座った。

「そーいえば最近クロっち1人でご飯食べてること多くな？」

「えー。そうかなー」

「うん。あれー？ でも、元々だったっけ？ ま、いつか」

と、会話をしながら瀧本は、ときどき望が自分の肩越しから後ろ

をちらちら盗み見ていることに気が付き、そちらを振り返った。

後ろの席には、言い争いをしている男女が、もしかしたら恋人同士なのかもしれないが、周囲に喧騒を振り撒きつつ、学食に集う生徒たちの注目を一身に集めている。

「なにが違うんや、アホボケカスッ！ 白状せえッ！」

「だってだから、違うの！ お前が誤解してる時点で違うんだよ！ あれは俺の、い、従姉妹だよ従姉妹！」

「てめえ、今、口ごもったやろ、聞いたぞコラ」

「いや、だから。あれは従姉妹です」

「まだ言つつもりか。分かった。せやったらこっちにも考えがある。死ね！」

「ギャッ！ お、ち、つ、け、みどり！ ここは食堂だ、公共の場！」

「うつさい！ あっ貴様！ 待たんか、ブツ殺す！」

全力で学食を飛び出していった男の後を、凶悪な身軽さの女が追いかけていった。それを目で追いかけていた望の様子を、瀧本は見ていた。

「ほっほっほっほ」

「えっ」

薄気味の悪い笑い声を連呼させる瀧川。望はビビッて、箸をこぼしそうになった。

「そっかークロっち。あの仲良し夫婦が羨ましいわけねー。クロっちも彼氏が欲しいってわけだ！」

「えっ」

「なによー早く言ってくればいいのにさ。水くさいなー。ちょうど今夜、合コンがあるんだけど、メンバーが足りてなかったんだー、クロっち来るよね？ バイトとか休んじやいなよ。今日の合コンって、ケツコーイケてる連中が来るみたいなんだよね」

「えっ」

「な。じゃあ7時に駅前に集合ってことでね」

「あ。えっ」

と、いうわけで合コンに参加することになったんですけども、駅前に集まった女性メンバーの中でも、黒崎望がブッチギリで田舎くさくてドンくせえ女子だった。普段は女子間の容姿をあれこれ言う会話に、あまり興味を持たなかった望だったが、この現実を前にしてさすがにガツクリきた。

いやー、瞳ちゃんの友達だけあって、わたしなんてとても足元にも及ばないっていうか、自分と比較しようなんて考えただけでこっぴどかしい気持ちになってしまいうくらいに、みんなカワイイです。なかでも同性のわたしから見てもグツと来るのはもちろん瞳ちゃ

んで、あのあと家に帰って着替えて来たのね、学食で見た格好と違うね。この5人の中じゃなくても、この街中でも群を抜いてカワイイなあ。っていうかわたしもa n a nとかc a n c a mとか読んでるつもりなんですけど、なんでこんなファッションに差が出るかなあー。んー、そうか、センスか。センスが違うんですね。生まれついでに能力差か、これは縮めようがないかな。あー、ガックシ。来なきゃよかったかな。は、は、は。アラなんでしょうか、自然と口を突いて出てきた自嘲気味の笑いが止まりませんよ。あははははは。

という落ち込み具合のまま、居酒屋に着きました。はい。

合コンをスムーズに円滑に進行させるための必須テクニクその1が、入店後に早くも瞳ちゃんの手先からほとばしりましたよ。

入店後、わたし達はすぐ男の人たちが待っているテーブルに行っちゃいけないんだって。速攻でテーブルに向かうような女子は、男なら誰だっと思っていいと思っている、とつても卑しい男好きなんだ。それ以外の女の子たちは、テーブルに足を向ける前に、待っている男の子を離れた所からじつくりと観察するらしいです。どんな男の人が参加してるのかを、把握するんですって。顔とかファッションとか持ち物とか……。んで、男の子達の評価をみんなで充分に吟味した上で、足をテーブルに向けるか、それともカラオケに進路を変えるか、どちらにするか決めるらしいですよ。わたしは合コン参加したの、今日で2回目なので、知りませんでした。

今日はみんなのOKサインが出たので、テーブルに向かったよ。テーブルの5人の男の人はわたし達、っていうか正確に言うときっとわたしはそこから除外されていただろうけれど……。わたし達が到着するとY A H O O O ! とか、G o o o o o g l e ! とか、へんてこな声を上げて、諸手を挙げて歓迎してくれました。いやー、なんて言うんでしょうか、みんなホストみたいにカッコよかったけど、1人だけわたしみたいな、って言ったらきつと怒られるだろうけど……。他の人とはちよつと違って、頭も黒髪のままの

人が居たから、んツ？　と思つてよく見たら、

「うはツ?!」

「え、望ちゃん、どしたの？　知り合いでもいた？」

「あーううん。違ったー、似てる人」

つてゴマかしたけど、なんだこりゃ。なんでしよう。

黒髪の男の人を見た瞬間、わたしの中の魔女が危うく表面に飛び出してきそうになった。わたしはそれを、穴の開いた潜水艦の浸水に板を押し当てて、必死で止水している潜水夫の最中です。こういうときは深呼吸をするといいいんです。

すーはーすーはー。

よし。落ち着いた心と瞳で男を見る。そして判る。

あの黒髪の男は、魔女の祝福を受けてる。理屈なしで、感じ取つた。まだ魔女に成り立てだし、魔女の祝福とかの意味も全然分らないけど、心の中に自然とその言葉が浮かんできた。この男は過去に、魔女と関わりを持っていて！　それがどんなものなのかまでは読み取れないけど、確かだ。ひょっとしたら、もしかしたら、わたしがずっと憎んできたあいつとの、関係なのかもしれない。向かいに座る黒髪の男からは、なんとなく、わたしが殺した魔女と同じにおいがある。

つていうか、色々と、ノロノロ思考していた間に、わたしの座席が、その男の向かいに決められてしまったいたわけです。けどまあ、2人とも壁際の端っこで、いかにも頭数合わせて雰囲気だし、おなじ魔女のおいを持つもの同士だし、めでたい合コンの席ですし、ここはひとつ、ケンカなんかしないで、仲良しモードでやっていきましようねツ？

うふふっ、あははっ

とか思っていたんだけど、目を合わせたとき、向かいの男の人はすごく不機嫌そうな顔をしてた。合コンの頭数合わせの、捨て駒みたいなポジションが、そんなに気に入らないのかな……。それとも正面がわたしみたいなのが女だから、滅入ってんのかしら。失礼な。いや、そのどちらでもないのか？　もしかして、向こうも、わたしが魔女だつてことを見抜いているのかも？　……分かんない。聞いてみるわけにもいかないから、確かめようもない。

でも、いつか、別に。もし魔女だつてバレてたつて、逃げるわけにもいかないしね。わたしはもちろん、彼だつて、こんなところで騒ぎを起こすつもりは、ないでしょう。彼の雰囲気、わたしへの殺意や敵対心も感じないし。機嫌がちょっと悪いだけみたい。これはひとまず安心して考えてもいいかな？　目付きは悪いけど、とりあえず友好モードってことにしておいていいのかな？　うん、そういうことに、しておこう。つてことで、乾杯のドリンクを注文します。あ、こっち、ドリンクメニューが、ないんですけど……。あ、はい、いいですいいです、おんなじで、ナマチューで、いいです……はい。

えーっと自己紹介です。男の人たちからです。向こうからコージさん、ユウさん、ジュンさん、スーさん、ときて、最後に黒髪の人、それまでのマリファナハイな男の人たちの自己紹介と一線を画して、

「あー、星野です」

と、ただ呟くように、それだけ。笑いを取ろうともしません。とっても事務的で調子が低くて耳触りで感じが悪くてやる気のない、場の雰囲気全然考えない、冷めたラーメンのような自己紹介に、テーブル中が静まり返りました。けど、そこですかさず合コン百戦錬磨の瞳ちゃんの出番です。

「ハイッ！　じゃあ次はクロっち、お願いしまーす！」

と突然振られた。心の準備もなにも出来てなかったのもので、

「えっ！　あ、はっ。黒崎のツのぞみですっ」

と、どもりながらゆったらなんでしょう。星野さんが繰り出した南極サイズの極寒の中でオーロラを見上げていたような態度だったのをコロツと翻した全員が「どもっちゃって、カワイー！」とかって大爆笑した。どこが可愛かったんでしょうか。それより大爆笑されてるこっちは全然面白くない。恥ずかしくなって顔が熱くなってきた。きつと赤面してると思ったので、前髪で積極的に顔を隠しました。でも場の雰囲気を再び盛り上げられた。ダッサイ田舎娘の分際で合コンのスムーズな進行に貢献できたのでまあ、結果オーライってやつです。これで出番終了という感も否めませんけど。うん。

そしてその予想は本命的中、払い戻しです。

合コン開始30分くらいで早くも席替え。わたしと星野さんの幽霊合コンメンバーは2人仲良くテーブルの隅っこに追いやられて片寄せあつて、寂しさで凍死寸前ブルブルと震えています。

ってのは嘘でー、わたしだけは今言ってみたいに1人寂しくしてただけど、星野さんは席替えの直後にトイレかなにかで席を立つたまま、一向に帰ってこないよ。だからわたしは1人で呑んでいます。たまに隣のナミちゃんとユウさん組が楽しげーに交えているトークに耳を傾けて、あははーとか笑い声を合せています。……死にたいほど虚しい。その向こうでは3対3の男女がいい感じの組み合わせで、かなりの声量ではしゃいでいます。

まあわたしも魔女ですから。……いえ、例え魔女じゃなくてもこうなること……つまりダサいわたしだけ1人孤島に取り残される事態に発展するんだろうなアとは予測してたつもりですが、いざその

通りのシチュエーションに身を置いてみると、思いのほか手持ちぶさたで腹立たしくもあり、なによりクソつまらないです。とてつもない疎外感です。わたしはイジメとかに遭った事はないんですが、高校のとき、クラス中のみんなから無視されていた人…… もちらんわたしもイジメの標的になりたくなかったので同じように無視していました…… 成田京子さんという人が居たんですけど、その子の気持ちってこういう感じだったのかなーと、思いました。

取り留めのない思考の端でビールがよく進みます。ヘイヘイ、わたしもう3杯目空けちゃいましたよー。誰か店員さん呼び止めて追加のビールをお願いしまーす。

それで、4杯目来ました。相変わらずうめー。ゲフツ。ナミちゃんが瞳ちゃんか誰かに声掛けられてですねー、ユウさんとの会話が一時中断した時なんだけど、手持ちぶさたになったユウさんが仕方なくって感じで、っていうか本当にそんな気分だったんだろうけど、わたしに話し掛けてきたわ。

「ウオツ、スゲー進んでるじゃん！ あんま飲まなそーな顔してケツコーいくんだね」

「あーそうですねー」

「酒強いんだー」

「えーでもすぐ顔とか赤くなるしー」

「ってか全然赤くねーよ」

「あれーホントですか？」

「おいおい、酔わせてお持ち帰りしようと思ってたのになー、無理

じゃん！」

「エー、ユーサンそんなこと考えてたんですかー？ やだー」

とか。自分の低脳さ加減にうんざりとしながら、それでも酔ってグデングデンに近づいているわたしの脳味噌は、精神で制御できる範疇からどんどん遠ざかり、旅立っていつてしまうであります。それよりも、今まで一人寂しく飲んでいたので、舌がツルツル良く動きますよ。人っていう生き物は寂しいと、もうなんでもいい、誰でもいいからお話をしたり触れ合ったりしたがるという、言葉を、誰かが言っていたのを思い出しましたよ。

ホッホー。とても酔っ払っています、わたし。

「アー、そーいえば星野さんなくなっちゃったデスねー」

「ああ、星野？ あいつはいいんだよ。あいつ合コンとか初めから興味ない奴だし」

「えーそーなんだ」

「それに彼女もいるみたいだし、だいたいあいつ居ると場が盛り上がんねーの。自己紹介とか聞いたでしょ？」

「あー最低でしたね」

「でしょ？ でしょ？ あいつ、いっつもあーいう感じなんだよね、合コンの時に限ってさ。普段はフツートの奴なんだけどね」

「彼女居るのに合コン来るんですねー」

「ああ、今日は俺が無理言って来てもらったの。どうしても1人足りなくて無理に。だってそうしないと合コンできないじゃん？途中で飽きたら帰っていいって言つといたから、もう帰ったんだろ」

「へー。へー。わたし、トイレ！」

「おお、おう。なんか注文しとつか？」

「あーいいです。帰ってきてからでー」

トイレの鏡に映っていた自分の酷い顔を見て、しばし正気に戻る。ああ酔ってんなーコレ。まずいなー。ピッチが早かったなー。今戻ったらきつとまた飲んじまうなー。一度店の外に出て、頭を冷やすとしよう。

ガラガラ音の出る引き戸を開けて外に出ると、夜風のひんやり感がとても懐かしいです。火照った顔と首に心地がいいです。

外にはなんでしょうか、人待ちでしょうか、わたしよりもずっとダサイ男の集団がタム口ってアニメみたいな話をしてました。まあいい。

そいつらの脇をすり抜けて、店の入口から少し離れたガードレールの前に辿り着く。と、そこに座っている男は。

あららあらら、星野さんじゃないですか。

帰ったと思ったら帰ってなくて、ガードレールに座って携帯をいじってます。

ホホホホ、なんでしょうなか、彼女にお迎えでも頼んでいるんでしょうか。

わたしは酔っているの、きつと酔っていなかったらそんなことしないでしょけど、酔っているの星野さんに声を掛けます。

「あーあーあー、何しているんですかー？中に戻らないんですか

「？」

って聞いたの。そしたら、星野さん、最初に会った時のひどくキツイ目付きより、もっともっときつつい、気の弱いコならシヨック死してしまうくらいの、メデューサの目で睨んできたよー。こっ、怖いよー星野さーん。

「ああ？ 誰だデメー」

ウハッ。覚えてないのかよ！ みんなを爆笑の渦に巻き込んだわたしの自己紹介、聞いてなかったのかよー。

アウト・オブ・ガンチュウツてヤツか。

「えー、と……あの、黒崎です。黒崎望」

「知らねえよ」

なっなんですか！ なんだチミは？！ わざわざ名前を教えてやったわたしをシカトして、メールしてますッ！ なんて慇懃な、態度のデカイ最低な男なんでしょうか！

星野、この際呼び捨てで構わないと思います。星野はわたしに一瞥もくれず、携帯をしまったポケットから続けて煙草を取り出した。ほーHOPE？ 知らない銘柄ですねー。それになんだか短いですねー。あら、美味そうに吸い込みますねー。わたしは喫煙家ではないんですけど、酔った勢いでなんだか一緒に吸いたくなってきちゃったよー。

「デメエ、さつきからなに見てんだ」

「えー。タバコ一本ほしーなーと思ってー。くださ、い？」

と言ったら、渋る素振りもせずにくれました。なんだ、意外と素直さんじゃないですか。

それに火まで点けてくれるんですのよー。やつさしー。

でも、わたし吸いかた知らないから、指で挟んだ煙草の先端に火が点くの待ってたから、いきなり頭を叩かれた！ バチンって！ すごく強く叩かれた！ 会って1時間も経ってない、初対面の相手ですよ、しかも会話も碌にしてない人を、しかも自分で言うのいやらしいけど、わたし女なのに、叩かれたよ！ ひでーよ、酷すぎッ！

「なっなんで叩くんですかー！」

「ふざけんなバカ！ 啜えて吸い込まなくちゃ全然火が点かねーじやねえか！ バカッ！ 知らねーで初心者か調子こいてんじやねーよ！ バカッ！」

「なっなんですかっ！ そんな、バカバカ言わなくなっって、いいじゃないですか！」

「さっさと点けろよモタつきやがって！ ム力つくんだよ！」

ななななな、なんてフテブテしいんでしょうか、この男は！

さっきの優しさもきつと偽りだっ！

うー！ あー！ がーッ！

ここでなんか言い返したいんだけど、きつと言い返したらまた星野が言い返してくるから、そしてわたしがそれに言い返したら星野がまた言い返して、っていう無限ループにはまってしまいそうなので、痛い痛い頭を擦りながら、わたしは諦めて、黙って煙草を啜えました。んで吸い込んで火をつけました。

一瞬で口の中が苦くなって、喉の中を針がグザグザ突き刺さった痛み。

ゲホー！

なによこれ、人間が吸うもんじゃないよー！ 煙た過ぎるよー。気持ち悪くて我慢できなくて吐き出しちゃったよ。あー星野の前で、平然と吸い込んでみせて、ヤツの顔に煙を吹きかけてやる予定がーくずれてーくやじー。

「ゲホッゴホゴホッ」

「あーあ。バカじゃねーの？」

「でよつど、いぢいぢバガバガいはないでよ」

「なに言ってるのか分かんねえよ。んじゃ、俺、帰るから。誰かに言っというて」

「ばっ？」

「くろさき望ーのーやろおおーおー気があーつきやがったなーあー明確にーいー知覚しーているわけではないようだが、星野哲郎の精神規格の祖型は闇黒組織が成形している真実を魔女の深紅の眼の解析でなくただ人間としての俗的な六感の曖昧を延長させた確信で捕らえそれを結論しようとしている」

「まずいですね」

「ホシノをジブンのドウルイだとシンじてアンシンするつもりだよあのムスメは」

「つまり、どういうことなの？」

「つまりくろさきのぞみさんはじぶんとおなじやみにおいのするほ

しのでつろうさんとならばふつうのともだちかあるいはこいびととしてのかんけいをたまちながらふだんどりのせいかつをおくつてゆけるだろうと、しんじはじめています」

「事実、星野哲郎が黒崎望の闇黒に侵蝕された記録は全くございません」

「同属同士ならば侵されないと、そういうことですか」

「ううむどうしたものかねえ」

「どとどとどうしよう」

「黒崎望の急設された魔力の薄弱さでは闇黒の素質を生まれながらに持つ星野哲郎を現実的精神的空想的に殺害することができませんよ」

「うふふふっ」

「誰に対しても嫌悪と病害を与える黒い魔女の大前提を破るつもりか、あたしら歴代に汚泥を擦り付けるようなもんだよ。許せん！

小娘ふぜいが」

「どうだっていいだろ、ババアどもが僻んで愚痴ってんじゃねえよ！ 耳触りだから黙ってる」

「あ・あ・ああああのですね、あなたがた老人の時代は終わっているのですよ、魔女はみんな性悪・年寄り・醜女・腐敗臭・嘘つき・陰険・救いようのない邪悪・結局最後に負けて死ぬ、て落ちは終焉しているのです、今の時代は全然そんなことありませんのよ。無限の多様性に裏打ちされた時代です。あなた方は、いつまで古臭い形式に囚われ続けるつもりなのでしょうか。そんなことでは黒崎望の若さと美貌が生み出す心の中の希望の太陽に照り焦がされて朽ちて化石になって風化して砂になって夕焼けの美しい丘から海に向かって撒き捨てられて、意思さえ残らず果てることになりますよ。いいですか先代魔女のババアども、心に寛容を持つべき時代がやってきているのです。黒崎望の好きなようにさせてあげましょう」

「だ・い・た・い・ま・じょなんて、世界のなーんの役にも立ちやしないんだから、干渉せずにあの子の好きなようにやらせてやった

「いいじゃん」

「そんなことが認められるものか、貴様らには分かるまい、誰にも愛されず望まれず、誰かを愛することも望むことも出来なかった私の病んだ精神が闇に腐り、唯一自分を救う方法として黒い魔女の道を選択し、生物としての価値の底辺まで陥落するしかなかった、わたしの絶望が」

「そんなもん知らねえよ、クスが！」

「わたしは許さない！ 黒い魔女に成った女が、一瞬でも幸福を感じることをわたしは認めない」

「ううううぜえええんだよばいたああああ！」

「死んでしまえ」

「みーんな意外と心が狭いんだねえ。あたしは黒崎望に殺されたわけなんだけど、まあ別になんとも思わないしねえ。ただ、星野哲郎とは仲良くしたいワケだ。あの子は類稀な心の暗闇を隠し持っているし、なにしろ、あたしのかわいいヒトだからねえ。今から抱き込んでおけばきつと心強い味方になるさ」

「えー、なんなのコレ？ どうしたらいいワケ？」

「ハハハハハハ、バアアアアアアアッ力！」

ああ、背を向けて。

ポケットに手をつ込んで、明確な意思のない適当さで、ゆったりと街路の暗がりに消えてゆく星野が、なんだかカッコよく見えてしまつて、いとおしく目に映つてしまつて、いよいよビールのアルコールが、わたしの脳に侵攻し始めたようです。

わたしは思わずに彼を追いかけることを決意してしまつた。

ただ、その決意の直後。合コンの席へ鞆を忘れてきたことを、思い出してしまつた。人から見れば安物かもしれないけど、わたしから見ればとても高かつたんです。ルイヴィトンです。

それが、魔女の力を使おうと思った動機。

なんていうのかな。だって。さっきだってテーブルにわたしの居場所なかったんだもん。空気みたいでさ。いやー、空気のほうが、まだまし？ トイレに行くって言うて席を立った半分は、その場からの逃避。あからさまな疎外からの脱出。瞳ちゃんはわたしに彼氏斡旋とかそういう人助け根性じゃなくてさ、きつと、わたしを踏み台にしているんだ。田舎の色彩のないわたしを隣に置いとけば、さらに美貌が際立って、目立って、合コンの中心的存在で、モテモテって寸法ですよ。

わたしは、要は、瞳ちゃんを美味しくするためのダシと呼ばれたわけです。

瞳ちゃん以外の人も同じでしょ。ま、始めっから顔合わせたことない初対面ばっかで、今後も積極的に仲良くしたいとも思えない、全然話の合いそうにないメスどもだったから、どうでもいいんだけどね。というか奴等はわたしなんて全然、男の人たちとしか話してないじゃん。男の人たちもわたしとは、全然話さないし。ね。

だからです。あのテーブルに戻るのが嫌なんです。でも、でも椅子に置き忘れたルイヴィトンのは捨て難いのです。

どうしよ、どーしよ。

そっという気持ちだが、動機。

『魔女なんだからー、力を使っちゃえばいいじゃん』

動機に裏打ちされた行動に移ります。人目がなくて、影の濃い路地裏に場所を移して、えーと、どうすればいいんだろう。

『水くせえ、水くせえよ望ちゃん。『夜の手』を使いたいなら、すぐに、わたしを、呼び出してくれればいいのにー。ほっほっ、ほっほほ。酔った勢いなのかしらー、あーんなに嫌ってたのに、すんなりとわたしたちの魔女を使っただね。でもわたしうれしい。やつ

と望ちゃんの魔女が役に立つちゃうんだからー」

「念じる、ればいいのかな？」

『千里の道も一歩からー　　どんどん望ちゃんの好きなように魔女を現実に取り出してえ。そうすれば魔女は望ちゃんのことをもっともっと好きになるしい、望ちゃんだってわたしのことが、好きで好きで、大好きでしようがなくなつて、離れられなくなつちゃうよー』

「手の周りに闇を集束して、それが濃く濃くなるように」

『ちよつち時間が掛かるのは心配なくつてえ。何事も慣れですからね。何度もやればすんなり出来るようになるからねー。自分の欲求を堪えもせずそのまま垂れ流そうとする自制心のなさ、素敵だなあー』

「あんこくので、ルイヴィトンを掴む」

『ほっほっほー！　うまいうまい、とーってもおじょーず！　満点あげちゃえる魔女っぷりだね！　さっすが望ちゃんは、今までの売女どもとは違うなー、気品すら感じるみたいなー。キャハッ、てゆーか嘘でーす。すっげー毒々しいよね。あれ、これって誉め言葉よ？　ひひっ』

「ルイヴィトンを……取った！　できた」

『ゲーツ！　ルイヴィトンを、ゲットだぜー』

ガラスの触れ合う音、男女の喧騒に満ちた雑談。店員の忙しい足

音。居酒屋。

十数分前まで黒崎望が腰を据えていた椅子の裏側の影。そこから黒い腕がニョッキと生えて、飛び出してきた。

影で造られた正体のない腕は、椅子の裏側から表側へと移り、文字通りの手探りで、椅子のクッションの上を探る。

ふと指先にぶつかった、背もたれに立ってかかっていたハンドバッグ。それを、5本の先細った指が驚掴む。

喰らいついたウツボが獲物を巢へと引きずり込むように、ズルズル、黒い腕はハンドバッグを椅子の裏側へ運んでゆく。ハンドバッグは黒い腕と共に影に吸い込まれ、居酒屋の店内から消えた。

店中の誰もそれに気が付くことがなかった。皆、談笑と酒とアルバイトに夢中だった。

路地裏というだけでは説明のつかない、夜中だとしてもありえない濃さの闇の塊が、黒崎望の手首から先を覆い隠していた。その、直径20センチほどの球状の闇から引き抜かれ、比較にならないほど明るい路地裏の影のなかに戻ってきた望の手には、外面にブランドロゴの印されたハンドバッグをしっかりと握りしめている。望の創り出した魔女の闇は、バッグを手に入れるという役目を終えると、音もなく周囲の闇に溶け込み、消えていった。

『こんぐらつちゅれーしょん！ おめでとー、おめでとー、あけましておめでとー望ちゃん！ 夜の魔女とゆー新年を迎えたあなたに、呪いあれー！』

マ、ラ、ソ、ンなんて、何年振りの運動だろうか。

長い髪が着地に合わせて背中を叩く。首と胸には心臓の早鐘が、速度を着実に増しながらリズムを打っている。両腕は無意識に高く高く、大きな振り子となって揺れ、疾走の助力となる。スカートの

裾に触れる両足のアキレス腱が美しく伸縮し、身体を宙へとはぜらせる。前方から現れる電柱と、視界の端へ消えてゆく街灯の、滯らず、常に流れて変化してゆく視界。夜の新鮮な空気は、一呼吸ごとに肺の薄汚れた細胞を壊し、同時に真新しい細胞を生み出してくれるような。誰の声も町の雑踏も耳に届かない、風の歌だけが鼓膜に気持ちがいい。おしゃれなヒールの高い靴じゃなくて、ナイキのスニーカーを履いてきてよかった！

黒崎望は、星野哲郎の後を追って駆けている。望が路地裏でルイヴィトンに夢中になっている間に、星野の姿は周囲からすっかりと消えてしまっていた。望は彼の背中が最後に立ち去った方向へ、一直線に走っている。望の走る延長に、星野が居るかどうかが、そんなことは知らない。もしかしたらどこかの角を曲がったのかもしれない。けれど望はまっすぐ走った。まっすぐに走りたかった。進む方向に、星野が居るか居ないかは、分からない。でも、追いかければ、きっと彼に追いつくんだって、漠然と考えていた。

そして実際に、望は一人の男の影を、視界の先に捉えた。星野の気だるそうな背中だとは、遠目にも判断できた。望はハツとした。星野の背中を見つけた瞬間、彼に追いついて、それからどうしようか、全然考えていなかったことに、今さら気がついた。自分が何をしたいのか、言いたいのか、全然考えていなかった。ただ、星野の背中にときめいて追いかけてきただけ。告白とか、準備も覚悟も全然。そんなつもりはハナからない。

（どうしよう！）

ああ、考えがまとまるまで、立ち止まるか？ けれど、それは正直なところ、勿体の無い気がした。望の疾走する速度は、彼女の精神を柔らかい恍惚へと持ち上げていた。立ち止まるなんて、そんなもったいない事はできない。じゃあ、星野の横を突っ切ってこのまま走り続けるか？ それはあまりに間抜けだ。星野を追いかける為に走り出したのに、彼を無視して通り過ぎてしまっただけ。それじゃあ、どうすればいいの？ この力強い速度を保ったまま、こ

れを後援にした現状を維持したまま、星野に、

『飛び蹴りをかましちやいなよ、面白いよー。きつとあいつ、地面をゴロゴロ転がっていくよ。ケケッ』

星野に、飛び蹴りを喰らわす。星野を追い掛けた自分の速度と気持ちは靴の裏に集約し、それを一気に放出。打撃という最もシンプルな部類の攻撃で、星野の背中へ自分の思いをぶつける。望の繰り出した蹴りの衝撃に、きつと星野は前のめりに倒れ、もしかしたらアスファルトをゴロゴロと、間抜けに転がるかもしれない。最悪、星野は転倒時に頭を強打するかもしれない。翻るスカートの可憐な望が着地する目の前で、反対に星野は無様に地面を這いずる。アスファルトに手を付き、震える上体を起こし、切れた額から流れ出る大量の血液で朱に染まる星野の顔面には、疑問と敵意の入り混じる表情。夜の闇に儚げに煌く潤む星野の瞳は、街灯を背にして影に隠れた望の顔を見上げる。

そして望は、とびっきりの笑顔で星野の激昂を歓迎する。白々しく、ゆっくりと優しく星野に手を差し伸べて、こう言う。

「大丈夫ですか？」

（これだっ！）

星野との接触方法は、これしかない！

望はさらに加速する。息が弾み、膝がぎしぎしと悲鳴を上げ、太ももとふくらはぎの筋肉が張ってくる。足首は炎を纏ったように熱い！ 疾走することの快感へ、徐々に苦痛の味が食い込んでくる。しかしそれすらも新鮮に思える。本当に長い間、長距離走なんてしていなかった。身体中60兆の細胞が、躍動する悦びを思い出して、嬉々の絶叫を上げている。星野の背中が5メートル先に迫った。いける！ 望は両足で地面を蹴ると、高く飛び上がった。街灯に型抜

きされ、壁に映し出された望の影が、ライダーキックのそれを模した美しさで、前方に行く星野の影に突き刺さる！

「ッそ！？ んぎゃッ！」

着地した望の靴がベロンと滑り、足首から下をもぎ取らんばかりのすごい勢いで、彼女の意図しない方向に滑っていく。前のめに姿勢を崩した望は、膝と両手を地面に付けた。速度は収まらない。止まれ！ という命令は受け入れられず、望の身体は前へと進んでいく。手と膝がアスファルトの上を滑走する。それでもなお収まらない速度が、望の胴体を軽々と持ち上げると、小学生の体育の前転みたいに、望の体をゴロゴロと転ばせる。後頭部が地面に打ち付けられるたびに、頭蓋骨の中で、石と砂利を緩く詰めた麻袋を叩きつけるような鈍重なりズムが耳に響く。望はアスファルトを3回転、4回転して、腹這いの姿勢でやっと止まった。

「うはっ」

痛い。なによりもまず始めに、それを思った。

痛い。手を見る。身体を支えて犠牲になった両掌は、黒く汚れて所々が擦り剥けて、広範囲に粒状の出血をしていた。針を突き刺されたようなピリピリした外皮の痛みと、着地の際に打ち付けた肉と骨を潰された鈍い痛みが、コラボレートする。背中と後頭部には、重石がのしかかっている圧迫感。唇がジャリジャリする。膝頭は、見てはいないが、きっと皮膚がすっかり削げてしまっているのではないか。

すごく痛い。全身が、熱い。

「いたい……」

地に伏した望の顔に、影が落ちた。首を起こし、見上げると、星野の姿があつた。街灯を背にした逆光の星野は、望の想像していた自分の姿であつた。黒塗りの彼の、両目だけがギョロギョロと、人外のように光っている。それは一瞬で望に恐怖心を植え付け、開花させた。

「う」

「お前」

「う、ごめんなさい」

望の口から速攻で謝罪が飛び出した。が、星野の目付きは変わらない。だが、星野の言葉と声調は穏やかなそれだった。

「お前。あんな足音立ててちゃ、分かるぜ。俺じゃなくなつたってな」

星野は、望の蹴りが背中に接触する直前、身体をひねり、腰をかめて望の射線から逃れたのだ。標的を失った望の飛び蹴りは、覚悟の無いまま失速をして、墜落してしまった。

星野が1歩、近づいてきた。望の身体がビクツと波打つ。こちらに近づいてくる星野の動作に、敵意を感じとったわけではない。逆に、星野がアスファルトを転げた自分を心配している雰囲気、望は何となく感じた。でも、星野が近づいてくることには躊躇した。敵意は感じないけれど、星野の目付きを見た望は、彼に殺されるんじゃないかと思った。いや、違う。これは星野に飛び蹴りを喰らわそうとした望自身の、罪悪感の増長なのかもしれない。

「立てんの？」

星野から視線を外し、望は答えなかった。相変わらず痛みを引きずる両手でアスファルトを押し、足に力を入れると、途端に激痛が走る。その出所は擦り剥いた膝頭ではなく、足首だった。捻挫したと直感した。捻挫は、安静を過ぎ、動作に移るとたちまち凶暴さを増し、足首を激烈に痛めつけてくる。最悪だ、どうやら両足を捻挫してしまっている！

望は四つ這いの姿勢から、立つことが出来ない。震える四肢と、突き出した尻。望の姿は生まれたての仔馬を模していた。人前で披露するには、充分な恥辱を含む格好であった。望は星野の目の前でとんだ醜態を晒していることに恥じて、身体中の血液が顔面に集まってくるのを、つまびらかに感じた。

恥ずかしい。最悪のレベルで恥ずかしい。

他にやるかたがないので、仔馬の姿勢のまま首を上げ、上目遣いに星野を見た。暗がりの中、はつきりと見えたわけではないが、星野が疑問と怪訝の表情を作っているのが、雰囲気で察せられた。仕方ない。星野じゃなかったって、自分だって、きっとそういう顔をするだろう。望は観念した。

「なんだ、お前？」

「ああの、足、捻ったみたいなんです」

「捻った？ どっち？」

「り、両方」

「はっ？ お前、バカなの？」

「そ、そんなこと言われても。実際そうですけど……」

「立てねーのかよ」

「はい」

そこまで確認すると、星野は、へーえと呟いた。例のH O P Eという煙草を取り出して、火を点け、悠長に吸い込み始めた。煙草の赤い火でやっと、目だけでなく、星野の顔全体が見えて、望は安心した。

それよりも、いつまでも生まれたての仔馬をしているわけにはいかない。ここはひとつ、恥を忍んで。

「あ、あの」

「あ？」

「あの、足捻って、立てそうにないんです」

「ああ。それで？」

「え？ あの、えっと。えーっと。立ち上がるのに、手を貸してもらえないかなあと、思ってた」

「お前、人にモノ頼んだことねーの？」

「えっ？ ありますけど……」

「そーじゃねーだろ、言い方。なあ、まず言うことがあんだろが」

「え。それは、どういう……」

「『た』」

「た？」

「『たすけ』」

「え？ あ。ああー。あー」

「『たすけてくだ』」

「おねがいします、助けてください」

「よし。助けてやる」

（……せ、性格悪ッ！）

睨みつける望の視線に気付いているのかいないのか、綽々と煙草を吸い終えた星野は、望の前にしゃがみこんだ。

星野におぶってもらった。望は、少し恥ずかしい気もしたが、両足を捻挫してるから、肩を貸してもらったところで碌に歩くこともままならないだろうし、俗に言うところのお姫様抱っことか、死にたくなるほど最悪な方法でもないし、まあ妥当なやり方だな、仕方ないなと思った。幸い、自分たちの周囲には人目も無いことだし。いいかな、と思った。ただ、星野の背中に身体が密着することを除けば。星野はかなり性格が悪いから、おっぱいが小さいとか、なにかしらの皮肉を言われるかと思っていたが、そんなことはなかった。代わりにこんなことを話した。

「なんか、お前どつかで見たことある気がするんだけど、前に会ったことあったっけ？」

「あ、あの。さっき、居酒屋で」

「それくらい憶えてるっつーの。もっと昔の気がするんだけどさー」

「えー。全然分かんない」

「俺も分かんねえ」

「なにそれ……。似た人じゃないの？」

「かもな。つーかなんでタメ口になってんだよ、テメエ」

「別に、ほ、星野、お前だってタメ口じゃないか！」

「降ろすぞコラ」

「あつ、あつ、うわっ！ 危なッ！ ごめん、ごめんなさい！ タメ口やめますッ！」

「分かりやいいんだ」

（性格悪ッ！）

星野は最低の男だ。と、望は思った。

なぜこんな男に一瞬でも気をやってしまったんだろう。

星野は、最低なだけじゃない。また落とされそうになるかもしれないと思って望が腕に力を込めただけで、

「苦しいんだよ、バカッ！」

と怒鳴って望をブンブン振り回して本気で振り落とそうしたり。仕方ないので腕の力を緩めていたら、歩いている最中にずり落ちそうになった望に、

「バカ、しっかり掴まってる！」

と矛盾に満ちた罵りを浴びせたりする、とんでもない自己中だった。

一番頭に來たのは、動けない望を駐車場に放置したまま、ファミリーマートで小一時間近くも立ち読みしていたことだ。けれどそれは、食べたいと言ったアロエヨーグルトをおごってくれたし、転んだ傷口をペットボトルの飲料水で洗い流し、消毒液でマキロンしてくれたので、水に流してやった。

星野の背中では、彼が黙ってさえいれば、望にとってまずまずの心地よさだった。

いや、まずまずではない。正直に、とても心地がいい。おぼろけた望の鼻先にある彼の後ろ髪から、シャンプーではない彼独特の匂いがして、ちよつとタバコの煙が混じった苦いそれが、すごく良かった。気が付かれないように細心の注意を払いながら、鼻をスンスンと鳴らして嗅いでみた。その行為の、なんだかとてもなくHENTAI的な恥辱感と、自分の魔女を容認してしまってるような背徳感と、星野に対する敗北感が、望の心臓をキュンキュンと突き刺してきて、頭がフットーしそうになったので、すぐに止めた。

その変態行為を抜きにしても、星野の背中では、望の父親の記憶と類似した安心を感じさせた。決して認めたくはなかったが。この気持ちは、きつと魔女という共通の気配を持っている者同士だからだろうと、望は理解した。そうだよ。これはわたしの中の魔女が、わたしの精神に影響を与えているからなんだ。この感情は、わたしが感じているものじゃなくて、わたしの魔女が勝手に感じていること

なんだから、仕方ないんだ。絶対、魔女のせいだ。そうでもなくちゃ、こんな男に気をやるわけないもん。絶対、ぜつつつたいに、わたしが星野を気に入っているわけじゃ、ないんだよーっ！ と、強く自分に言い聞かせた。自己暗示を掛けようと試みた。

その試みは無駄だった。言い争いもあつたけれど、ちゃんと家まで送ってくれた星野に、望は携帯電話の番号を交換したいと伝えた。しかし星野は、望が彼に赤外線を送り終えた後、携帯電話の画面を見たまま踵を返して、アパートの階段を下り始めたのだ。

え。と、望は星野を呼び止めようとした。が、番号交換を希望した望の言葉を聞いた時の、興味のなさそうな星野の顔と態度が、望をとどめた。そういえば星野には、彼女がいるって聞いたつけ。だけど、もしかしたら。それでまず、自分から赤外線を、送った、んだけど……。な……。

望は去っていく星野の足音をBGMに、溜息をしながら自宅の鍵を開けた。

電話は、不意にきた。

合コンから2週間を経過した望が、落胆に呻き、ベッドに倒れ伏して、枕に顔を突っ込んでいたところへ、着信した。

低く、相変わらず不機嫌を伴う彼の声が、望の耳にはなぜか、心地よかった。

魔女の夜 - 2

異変は犬からだった。

黒崎望がアルバイトを終えた後の帰り道の民家に、大人しい日本犬がいる。望が民家の庭と街路を隔てる柵の前にやっていると、望の気配を察知した日本犬はむっくりと立ち上がり、のたのたと望の柵のところまでやってくる。そしてベ口を出し、ニンマリ笑うような表情をしてくれる。望はそんな犬の頭や喉元を、モフモフと撫でる楽しみを、習慣にしていた。それが突然無くなった。

ある日、望がいつもと同じように柵に近づくと、庭で寝そべる犬は、耳をひょいっと望に向けるだけの薄情さで迎えた。前脚の上に乗せた顔も、閉じたままの目も、くるくるとぐるの尻尾も、微動だにさせない。おかしいなと思いつつも、「おい」とか「わんこー」とか、何度か呼びかけてみた。手を叩いたり、指を鳴らしたり、犬の興味をなんとかこちらへ引こうと試みた。しかし、それが成功することはなかった。

たまたま機嫌が悪いのかもしれない。その時は深く考えず、諦めて家路についた。

ところが次も、そのまた次も、犬は望を無視し続けた。遂には望がやってくるのを悟った途端に、犬小屋の中へ身を隠してしまうようになった。望の位置から見えるのは、犬の尻尾だけになってしまった。一体どうしたというのだろう？ 何か犬の気に触るようなことを、気が付かないうちにやってしまったのだろうか？ 望は自分の行為を思い返しながら自転車から身を乗り出し、柵に手を掛けた。

その途端、民家の庭先に面した窓に掛かっているレースカーテンが、引きちぎられんばかりの勢いで開け放たれた。カーテンがなくなった窓越しに、中年女の顔が現れる。女の表情を目にした望は、ギクリとした。中年女の表情から、望に対するはつきりとした敵意

が伝わってきた。思わぬ人物の出現に驚き、望は緊張して体をこわばらせる。射殺するような視線を望に飛ばしながら、女は庭のガラス戸を乱暴に引き開けた。

「うちの犬に変なことをしないでください！」

女は金切り声のヒステリックを起こした。望は言葉に気圧されて慌てて柵から手を離す。声に反応して、犬小屋からゴソゴソと音を立てながら、日本犬が久しぶりに望に姿を見せた。だが、犬はやはり望には一瞥もくれない。家人である中年女を見上げるだけだった。女は足元の犬に一瞬視線をやったあと、再び望に目を向ける。女の目付きに、望の心がズキリと傷つきた。

「あなた、いつもうちの犬に変なこと、しているでしょ！ やめてください！」

「えっ。そんな、こと。ただ、撫でてただけで」

「やめてください！ 今度は警察を呼ぶからね！」

女は叫び終わると、再び乱暴にガラス戸をスライドさせる。窓と壁が勢いよく衝突し、窓ガラスの表面に映し出された庭の景色がぐらぐらと、割れそうなほどに揺れる。窓の向こうの女は、望との間をしっかりと隔てるように、レースカーテンを閉じた。しかしカーテンの向こうには、女の、あの表情がまだ残り、望を見張っている。犬は家人の退場を見送ると、軒先のサンダルに近寄り、首を垂らして、2度ほど鼻を小刻み震わせた後、くるりと望に背を向けると、犬小屋の中に消えてしまった。

街路を通りかかった男女の2人組が、終始のやりとりで怪訝な表情を浮かべていた。はつきり、望に向けられていた。望は気が付か

ないふりをして下を向くと、急いで地面を蹴った。前傾姿勢で、逃げるような速度でペダルを漕いだ。

レジ打ちのアルバイト中、望は店長に声を掛けられて事務所に来るよう促された。休憩時間とはつくに過ぎている。なんだろうと、手にした食料品のバーコードをピコピコ読ませながら、心当たりを巡らせる。特に思い当たる節はないのだが。

ロッカーとカーテンで区切られた更衣室、アルバイトの休憩室、そして事務所と、3つを兼ねる部屋の中央には、会議やアルバイトの休憩に利用する長テーブルがある。望は机を挟み、店長と対座する。店長は自分の机から引つ張ってきたノートパソコンを脇に置き、視線を下げてわざとらしい溜息を付いた。望はノートパソコンの画面に帳簿のエクセルが開いていたのを、先ほど店長がパソコンを持ち上げるときに見つけた。店長は溜息のわざとらしさを表情に移し、望に目を向ける。

「言いづらいんだけど、この頃ずっとレジの金額の差異が出ていてねえ」

「はあ？」

店長の言葉の意図が汲めず、望は店長の顔をまじまじと見つめた。店長は望から視線を外してパソコンのディスプレイを、追求する厳しさに睨みつける。

「いや、今までだって全然無かったわけじゃないんだけどね。最近、目立って、黒崎さんに担当してもらったレジばかりで起きてるんだ」

店長の言葉には、望に対する疑いが含まれて、はっきりと感じ取れた。望の背筋がぞわっと泡立つ。店長はレジの金額の差異が、釣り銭の受け渡しによるミスではなく、盗難だと、声に出しているわけではないが、はっきりと言っていた。その犯人として、望を疑っている。望の心の真ん中に大きな穴が開き、恐怖がどつと湧き出てきた。望は慌てて反論する。

「そんな、わたし、とっ、とったりしてません！ 交代するときだって、帰るときも、ちゃんと点検してます！」

「いやいやいや、そういうことを言っているんじゃないんだけどね」

爬虫類のように冷ややかな目付きで、望の反応を確認した店長は、あたかも想定してような、準備されていた謙遜な態度で、しかし、手のひらを望に向けて、望の主張を遮るポーズを取った。店長の仕草を目にした望は気が付いた。望へ盗難の嫌疑をかけている店長の内実は、全く別である。心臓が痛み走るほど大きく脈打った。

店長は、望がレジの金を自分の懐へ盗取していると、疑っているのではない。望を揺さぶり、反応を伺っているのではない。彼は始めから確信をしていた。望が犯人で間違いがない。事実なのだ、と決めつけてかかっている。『俺は知っているんだぞ、全部知っているんだ』店長の心の内が、耳に飛び込んでくる。なぜ？ どうして店長はそんなふうに確信しているのだろうか？ 証拠なんてあるわけがない。証拠もなにも、本当にやっていないのだから！ 状況証拠だけで判断しているともいうのだろうか？ いや、望の知る限り、店長はそれほど簡単な人間ではない。それなのに、どうして。

望の胸の中で、覚えのない罪悪感を押し付けられる不快さと、潔白の自分を醜穢だと決め付ける店長への怒りが、どろどろと混ざり合う。それが望の心を漆黒に塗り上げる。望の全身から汗が吹き出てきた。

「黒崎さんはずっと、真面目にやってきてくれているしね。そんなことは、少しも思っていないんだけど。でも最近になって、黒崎さんが使ったレジばかり立て続けに金額の差異が出ているから。お客さんからお金をもらったり、釣り銭を返すときとか、もっとちゃんと確認をしてもらえるかな。初心にかえるっていうかさ。悪いんだけど、遊びじゃないんだからね。仕事しているんだから、いい加減な気持ちでやってもらっちゃ、他のバイトやパートさんにも悪い影響を与えるしね。なんだかレジしているときに、ぼうつとしてることがあるって、最近何人かのアルバイトから聞くこともあってさ。具合が悪いなら、無理して出なくてもいいから。ちゃんと、ミスしないようにやってもらいたいんですよ」

望は、店長の話をほとんど聞いていなかった。

それよりも、そんなことより、これはなんだろう。

この違和感。今までの自分の生活に降りてきた、違和感の塊。

どういう事なんだろう？

おかしい。いくらなんでも、これはおかしい。

「でもさー、あんなに上手くいくとは、思わなかったって感じ？」

「あははっ。ヤッター！ って感じだったよねー」

「店長も軽く信じすぎ」

「でもこれで黒崎もいなくなるんじゃない？」

「だよねー。あたしが疑われたら、こんなとこのバイトなんてすぐ辞めるって感じだし」

「呼び出されたあとの、あいつの顔すごかったね！」

「顔面蒼白だったねー、マジウケた！」

「実は、ほんとにやってたんじゃね？」

「ひやはっ、ひどっ！ でもそうかもね！」

「わたし、店長に黒崎と同じシフトに入れないでって、頼んじやった」

「はあっ？ マジでー！？ ははは、ウケるー！」

「だあって、見るだけでムカついてくるんだもん」

「わたしも店長に言ってみようかなー」

「そうしてもらいなよー」

「てか、早く辞めないかなーあいつ」

「ホントホント。マジでさっさといなくなって欲しいよね」

「アハハッ、そうだねー。まあこの調子でやってきや、あいつも辞めるっしょ」

アルバイト仲間の会話は、望の耳に筒抜けだった。更衣室は、事務所の一角をロッカーとカーテンで隔てているだけなので、事務所でのお話は極端に音量を押さえるかしないと、はつきりと聞こえて

くるのだ。

望は着けていたエプロンを静かに外してハンガーに掛け、少しの音も立たないように、そっとロッカーの扉を閉ざした。足音が立たぬように細心の注意を払って、カーテンの隙間から身をすり抜けさせ、事務所の扉から外へ飛び出した。

「お前たちのせいかな」

電球色のユニットバスで、黒崎望はつぶやいた。

シャワーを浴び終えた洗いざらしの髪が、彼女の体に張り付き、肩から乳房、脇腹に掛けて、漆黒のヴェールになり、包んでいる。湯気に曇った目の前の鏡を掌でぬぐい、水滴ごしの自分を映しだした。鏡の中の瞳が闇色に燃えて、光を全く反射していない光景を目にして、望の憎悪はますます肥大する。

魔女が力を強めている。

今までは臭いものに蓋、の言葉通り、自分の魔女が少しでも現実に出てこないように、渾身でもって抑制していた。他人を悪く思ったり、他人に不快を感じさせない言動に徹してきたつもりだった。自分の中の魔女から湧き出すもの以外、心の闇黒が浮かばないようにと細心の注意を払ってきた。

それでも、無理だったのか。無駄な足掻きだったのだろうか。一体、どうして。どこから魔女が出てきているのか？

他人に対する自分の行為を、一つ一つ丁寧に思い出しながら分析をしていた望に、ある記憶が蘇った。合コン。居酒屋。あれか。魔女の力を初めて利用して、黒い手で掴み取ったルイヴィトン。あの一度きりの、アルコールのせいでタガの緩んだ抑制の隙間から、ぬるぬると漏れ出てきて、つい利用してしまった魔女の力。あの時使ってしまった魔女のせいなのか？ 嚴重に目張りをして、これ以上

ないほどの重石を乗せて、更にその上から荒縄でぐるぐるに緊縛して、決して漏れ出ることがないように願った魔女への封印の決意が、たった一度だけの力の解放で、すべて崩れてしまったのだ！ 魔女を閉じ込めた封印が開いたのではなくて、頑丈に造ったはずの、魔女を囲っている壁のどこかしらに亀裂が入り、その隙間から魔女が、チロチロと漏れでてきているんだ。きつとそうに違いない。そして、壁の亀裂を造り出したのは他でもない、自分自身なのだ。

望は、唇を強く噛んだ。自責の念を代弁する赤い血が、唇と歯の隙間から滲み出てきた。挽回できない自分の失敗に、心がたちまち闇黒に落ちていく。望の悔恨の意を、魔女たちはすぐに認識する。

鏡に映った望の耳と肩の間隙、髪に隠れて影になった部分から、小さな赤い点がポツリポツリと現れる。光の加減や、望の目の錯覚ではなかった。赤い点は魔女たちの目だ。赤い目は姿を表すと数回瞬きを繰り返す。そして鏡ごしに望と視線を合わせると、笑いながら消えていく。そしてまた、別の部分に別の目が出てくる。それが何度も何度も続いた。退屈なオカルト映画のワンシーンのような光景に、望の憎悪は終着した。魔女は望の感情を読み取っている。

望の黒髪の中に、魔女の目が一斉に出現した。46個のまばらな大きさの、赤い水玉模様が望の紙を染め上げる。バラバラに瞬きをしながら、魔女たちは笑い出した。低い声で、高い声で、唸り声で、擦り切れた声で。望の全身がゾツと粟立つ。魔女が自分の心を覆い尽くしてしまい、そして最後には、自分も赤い目の仲間入りをしてしまうのではないか。その予感に恐怖が湧き出してきた。

望は楔を打ち込むように、魔女に対する恐怖心を、すぐさま激昂で上書きした。右手を強く握りこみ、鏡を強く殴った。壁の潰れる音と、鏡の割れる音がたたたく響いた。洗面台に破片がザクザクと落ちた。望と鏡の接点からは、赤い血がドロドロと、粘度の高い油のように流れ落ちてきた。

望は気がついていて、魔女を憎んではならない。けれど、それをしなくては、怖くて怖くて、震えが止まらない。だから恐怖を憎悪

でくるんで、心の奥に精一杯押し込んで、なかったものにして無視をした。恐怖なんて少しも感じていないと嘘をついた。

魔女を憎んではいけない。魔女から脱却したいものが決して破つてはいけない約束なのだが、望はそれを守らなかった。だがそうしなければならぬ。そうしなければ望の精神は闇黒に朽ち果てて、負けて、死んでしまう。

魔女たちは望の擬態を見抜いていた。望は自分たちを怖がっている。怒りと憎しみで、それを誤魔化そうとしている。まったく、ダメな子だねえ。諦めて受け入れることが、あたしらと共生する入り口だつてのに。それを知っているのに、知らないフリなんかをしちまつて。12年間、わたし達を憎んできた記憶が残っているから、私たちを許すことができないのね。うひっ、うひひっ。なんてあたしたちにとって都合のイイ、弱々しくて、クソみたいにきつたねえ心を持つているんだろうね、この子は。これじゃあアタシたち、嬉しくって嬉しくって、よっぽどいつから離れることができなくなるじゃないか！ ああ、なんだってこんなに気持ちのいいことばかりしてくれるんだろうね、のぞみちゃん？ なあーんか、お返しをしてあげないと、バチが当たっちゃうよね。うひっ。

この街には数人の『情報収集屋』さんと『データベース屋』さんがいます。

情報収集屋さんは、この街にどんな能力者がどれくらいいるのか、いつどこでどんなことがあったのか、どんな戦闘があつて誰がやられて誰が勝ったのか、そんな情報を集めています。そしてそれをデータベース屋さんに、金銭や他の情報との交換を前提として提供しています。

データベース屋さんは2種類います。1つは、情報収集屋さんから手に入れて、溜め込んだ膨大な量の情報を自分で楽しむだけのコ

レクシヨナー。もう一つは、情報収集屋さんから手に入れた情報をさらに、金銭や物品を媒体として、情報を欲する人へ提供する商人。

大丸剛史さんはデータベース屋さんの、後者のほうです。

大丸さんはネットや携帯で閲覧のできるウェブページを運営しています。会員制ですが、月額利用料金は100円（税込）と非常にリーズナブル。安いからといって、彼の扱う情報がガセネタばかりだとか、使い回しの古いものだったりとか、そういうことは滅多にありません。ウェブページの更新頻度は街の誰よりも多く、一日に最大120回の更新が掛けられたこともあります。情報の正確さも秀でていますし、新着情報へのレスポンスと、その後の動向調査も、他のデータベース屋さんより一枚も二枚も上手です。この街にはもはや、なくてはならない存在の大丸さん。彼のウェブページに現在登録中の有料サービス利用者は、なんと5万ユーザー。いやー、これって凄いですよね。

我々取材スタッフの中にも、大丸さんのサイト利用者がいることを知り、大丸さんは食べかけのラーメンを口元から盛大にこぼしながら、照れ笑いの謙遜でこちらに振り返りました。

「ぶひつ、おだててもらっても、なんも出ませんで。ぶひひつ。商人やさかいな、ボク」

いえいえ、そんな。でも、やっぱり凄いですよね。大丸さんの情報って、いつも正確だし、何より更新が、早い！これって何か、情報収集のやり方に、他の方とは違う秘密があるんでしょうか？

「あ、あかん。シャツにシミがいつてもうた。まあええわ。オカンに頼んでシミ抜きしてもらお。ああ、ボクのオカン、クリーニング屋で働いとってね。これが、腕ええんですわー。見かけはただの、クルクルパーマのオバちゃんなんやけど。こないだもねえ、戦いで

もって、シャツを血イまみれにしてもうた常連さんが来てね。『これ、このシミどうにかしてくれ』って頼みはんのよ。なんや、えらいお気にいのシャツやったそうでね。せやからボク、その人にオカシ紹介してあげてね。えらい感謝されましたわ。ぶひつ、せやからボクもね『お前、オカシの腕がええんは認めるけど、たまにはなあ、いつも特ダネ提供してやってるボクにも、オカシの半分くらいは感謝せえよ！』ってドツいてやりましわ。ぶひや。ええと、で、なんでしたつけ？ ああ、情報収集の、秘密？ ああ、せやね。っていうかあんだ、そんなん言えるわけないでしょ。それがあんだ、いわゆる企業秘密ちうやつやないですか。まあ、仮にもしココでボクがソレを教えたとして、他の誰かが真似しよう思っても、ようでけへんでしょけどね。なんや、あえて言うんならね、ボクが昔から今まで、長年培ってきた、人徳！ 人徳いうヤツのおかげですわ。ぶひや、ぶひやひやー！」

人徳！ さすがですねえ。さしずめ『人徳の大丸』といったところですね。それにしても、大丸さんもやっぱりこういった職業柄、誰かに狙われたりとか、危険な目に遭ったりとか、やっぱりあるんでしょうね？

「ああ、そりやありますよ。もちろん。全部がボクの情報のせいとは、よう言いませんけど。壊滅したチームとか、危ない目に遭うた人とか、まあ、死んだ人もおりますしね。せやから今の質問どおり、命狙われたことも何度かありますよ。両手では数えきれへんくらいね。足の指も入れたら、数えられるもんやけどね。ぶひやつ。ただボク、そのへんに転がってるような、ただの情報屋とは違うからね。これなんや、企業秘密ちうもんやから、ぶひつ、細かくは言えませんが？ ボクにも色々能力あるしね。あと、人徳？ ぶひや！ ボクの情報で困らせられた人も、そりやようさんおるんやろうけど、ボクが死んだら困る人も、それ以上にたくさんおるからね。」

そういう人らの、まあ、善意で？　ぶひゃひゃ、善意でもって、これまで生かしてもらってるうちう話ですわあ！　ぶひゃひゃひゃ！　ボクん所は他と違って、気のいいお客さんばかり恵まれとってね、ほんまもうコレは、お金で回ってるんちゃいまっせ。ユーザーのみなさんとボクとの、助け合い！　ぶひゃっ！　助け合いがあつてこそ、大丸ですわあ！　ぶひゃひひゃーッ！　あー、なんか、誰も突っ込んでくれんから自分で言うけど、うまいことまとめたわあ、コレ」

善意！　人徳の上に、善意とは。恐れ入りました。仏様みたいですね。

「せやから、おだてても、何も出さへんて！　ぶひゃー！」

またまた、ご謙遜を。

「いやあー、うん。せやね。まあ確かに命狙われて、ヒヤヒヤしたことはもう、一度や二度ちゃいますからね！　中でも凄かったんがここ。このラーメン屋。ここに来るとね、まあせやっても、毎晩このラーメン屋、来てますけどね！　ぶひゃ！　思い出しますわ。ここにね、いつだったかなあ、まあ細かいのは置いて、ここに星野哲郎が来たことあるんですわ。ボクを訪ねて」

えっ。星野哲郎って、あの、星野哲郎ですか？

「うん。あの星野。以前に『Ecstasy of the Angel』が潰されたでしょ？　あの、なんだったか、ほら、その、チームの人」

鰐淵武人ですか？

「ああ、それぞれ。鰐淵。あれを星野がやったのは知つとるでしょ？ でもね、ほんまはアレ、半分はボクがやったんですよ？ 半分ね。言うたら、星野とボクの共同作業ですわ。共同作業。ぶひゃ、結婚式ちゃうで！」

それは、初耳です。それは、凄いですね。

「まあ、結婚式は置いといてね。星野が鰐淵を潰す言うてね、それにあたって、ボクに協力を求めて来たワケですよ。このラーメン屋に。そこでその時ね、ボクは星野に言うたりしましたわ。『話はええから、ここのラーメン食うてからにしといてんか？』ってね。カツコよくね。人差し指立ててね。ラーメン屋入ってきて、水だけとか人として違うでしょ？ そんなで星野にラーメンおごったつたんですけどね。ウマイウマイ言うてましたわ。ねえ大将！ ここのラーメン、いっつもごつつうまいで！ ありがとね！ あ。せや。ごめんごめん、アンタらも食べる？ 今日はなんや気分ええし、ラーメンおごつたるよ？」

ああ、ではお言葉に甘えて、頂戴します。それで、星野が？

「大将、ラーメン3つとギョーザ3枚、追加で！ ギョーザもボクがおごりますがな！ 財布のぞかんでもええですつて！ あ、チャーハンのほうがよかつたつて？ なーんて、ちやうか！ ぶひゃ、ぶひゃひゃひゃー！」

それは、ありがとうございます。それで、星野が？

「今日のこと、みんなには広めんというてや？ ボクがおごったことね。こんなん知れたら、金のないピンボー人や、最近のアホみたい

な若い連中がようさん押しかけてきますからね。ココだけの話にしとってくださいよ？ 約束ですよ？ ぶひゃっ」

はい、それはもちろん。ココだけの話ですよ。もちろん。それで、星野が？

「ああ、そうそう。星野。星野が来たとき、あの時だけはね、さすがにボクも殺されるか思いましたわ。実はボクね、ああ、コレは絶対言わへんから、勝手に想像してもうてくださいね。星野をね、あのチームと協力して、潰したろう言うてね、そいつらと手を組んだことあったんです。まあ失敗したんやけどね。それを星野が知って、ボクを殺しに来たんちゃうかと思ひましてね。彼がここに来たときに。いやー、あの時の悪寒は、いつ思い出して、ゾツとするわ。クーラー、いらへんようになるわ。あつ、大将、ほんまにクーラーきいたらあかんよ！ リモコン持って！ なにすんねん！ ぶひゃひゃー！ ね？ ココの大將も、おもしろいでしょ」

なるほど。これまで幾つもの修羅場をくぐり抜けてきた大丸さんでも、星野は、ヤバいと。

「フーッ。そうやね。ちょっと喋りすぎて、あつなってきたわ。大將、ちょっと温度下げてんか。2度くらいでええよ。そうやねん、ボク、今まで仕事でね、いろんな人と会ったり、命狙われたりしてきたけど。星野。あれはマズイですわ。あれはね、規格外。人間とちやいますわ。たまーに、星野がらみの依頼を持つてくる輩がいるんですけど、全部断ってますね。あれ以来。お前が死ぬんは勝手やけど、ボクまで巻き込むなや！ って言うたつて、追い返してますわ。まあ、星野は、でもね、みんなが思ってるんと、ちょっとちやいますよ。ホンマはええ奴やと思います。イメージだけ一人歩きしてもうてる感じでね。ボクもあいつと直接顔合せるんまでは、え

らいアカン奴や思ってたけど。あいつは、あれで礼儀はちゃんとしてってね。若いのに、殊勝ですわ。鰐淵の件でも、ボクが仕事やりやすいように、手土産持ってきてくれたりね。まあ、凄い奴ですよ。色々ね。でも、関わるんはもう、ゴメンやけどね」

ここで、我々と大丸さんの間に割って入るかのような、アニメの主題歌だと誰もが間違いなく理解できる着メロが、大丸さんの携帯電話からけたたましく鳴り響きました。大丸さんは着メロに抗議の睨視を向けると、携帯電話をひったくりまです。どうやら着信通話ではなく、メール受信のようでした。

しかしディスプレイをチラリと覗くや否や、それまでの眉を寄せた表情の大丸さんが、突然目をまん丸に剥き出して「ええっ!？」とことさらな大声を発したのです。

そして脇に控えていた我々を押し付け、手荷物から小型のパソコンを取り出しました。それを、ラーメンの丼を押し付けたスペースで広げます。パソコンの壁紙は我々の期待を裏切り、ウィンドウズのデフォルトのままでした。ほんの僅かなキーピッチしかないラップトップ上で、丸々と肥えたカブト虫の幼虫のような10本指が、あまりに器用な高速キータイピングで残像を発生させながら、文字を打ち込んでいきました。見たところタイピングミスは一切ありませんでした。

大丸さん、一体、どうしたのですか？ 何か。特ダネが？

「えー、あ？ ああ、ごめんやで。うん。特ダネが入ってね。せや、今からこいつをボクのサイトにアップすんねんけど、君等にはアップ前に、特別に教えたるわ。ぶひゃっ、特別でっせ」

を継承 New！

「魔女って、魔女ってさあ、強いのか？」

笠原雪子がスマートフォンディスプレイを見つめながら言った。それを聞いて、西田恭平は口に含んでいた烏龍茶を吹き出しそうになった。慌てて飲み込んだ烏龍茶が、僅かばかり気管に届き、むせる西田の胸が激しく上下する。雪子はそれを鼻で笑う。西田の咳に合わせて、彼の手の中でせわしく氷の触れ合う音を立てるグラスを、熟練の手捌きをもつスリのような鮮やかさで、無音で奪い取った。雪子がグラスをテーブルへ置くと、西田はグラスの横を目がけて、反対側の手に持っていた読みかけの文庫本を放り投げる。それから、呆れと叱責の混じった視線を雪子に向ける。雪子は西田の視線に彼の本位を汲み取って、瞳をくりつと上に向け、肩をすくめて、やれやれと彼に背中を向けた。

「やめてください」

「あはっ。強いかどうか、聞いてるだけだよ？」

「強いですよ。もちろん。だから、やめてください。ちょっかいでも、手を出すなんて考えないでくださいね」

雪子が西田の言葉を、最後まで聞いていたのかどうかは、判らない。彼女は手にしたスマートフォンの裏側の、鏡面加工に映し出した自分のヘアスタイルをいじっていた。明るめのブロンドに染めたミディアムの髪は、肩に少し触れるくらいのところまで内側にカールしている。その先端を指でつまみ、他人には判らないくらい繊細な

湾曲を整えるのに夢中になっていた。西田はため息を付いた。先程の烏龍茶が、まだ僅かに残っているようだ。胸の中に湿りを感じて、大きめの咳払いをした。それを自分に対する何かの合図だと思ったらしい。雪子は髪から指を離すと、西田に向き返った。

西田は雪子の考えているものを白紙に戻すために、雪子の瞳を真っ直ぐに見つめて、強い決意を乗せて言った。

「やめてください。大怪我します、死ぬかもしれない」

言葉に対して雪子は、屈託のない純真な子供の持つ笑顔で、えくぼを作った。

西田の思いは届かなかった。同時に西田は、先ほどとは全く別の決意した。雪子の、この笑顔が続くようにしなければならぬと。

笠原雪子は完璧だった。幼い頃から。学業は言うまでもない。机上の成績はもちろん。なんの種目も卒なくこなす運動能力。一度読んだ本はすぐに諳んじるし、歌唱も流行りから演歌までプロ並だ。誰かに疎まれたことがないのは、彼女に告白をして、それを断られた凡百の男女や、彼らの取り巻きたちが、その後たった一言も彼女の悪態をついたことのない事実が証明する。政治家の御曹司から、道端で衣食住を済ます浮浪者まで、交友も幅広い。彼らから誘いのあるシヨッピングやレジャーや炊き出しに、雪子が一切の拒絶もせずに参加するのは勿論のこと。最近も合コンやクラブのライブイベントに誘われて、交友の幅をより一層広めてきたところだ。

笠原雪子の容姿は清潔で、肢体には一欠片のシミもホクロもありません。神々しいという単語は、彼女のために造られたと言っても過言でないほどでございます。それを裏付ける1つのエピソードとして、学生時代のことですが、更衣室で雪子の着替える最中の素肌を直視した女学生の数十名と、更衣室を覗き見していた男子生徒の数百名が、あまりの美しさに気をやられて気絶してしまう事故が、

数えきれないほど起こったものでございました。雪子の万物に訴えかける美しさは言葉通りでありまして、彼女の美しさが及ぼす範囲は心のあるものだけに留まりません。雪子の前では無機物ですら自信を喪失してしまうようでして、彼女が通り過ぎた後のウィンドウショッピングは、腰の部分から折れ曲がり、まるでうなだれを表現するようなマネキンで埋め尽くされる光景が常でございます。彼女の体軀の中でも際立って素晴らしいのは、白くしなやかな肌が白百合の花弁を連想させる、長く伸びた四肢でございます。喜びの感情を心の中に包み隠すようなことはせず、表情や言葉だけでなく行動でもって表すこともはばからない雪子から、突然に抱き付かれ、柔らかな腕を絡ませられた老若男女は、あまりの光栄に我を忘れてたちまちのうちに昇天致します。また、ちょっとしたおふざけが大好きな雪子が繰り出すローキックをお見舞いされた方々は、雪子の御身足が盛大にヒットした瞬間、歓喜と慈愛を心のなかに深く刻まれ、それはもう治療することが出来ないほどの致命的な傷として、生涯に背負うのでございます。それを唯一救済することのできる彼女の笑いえくぼを一目でも拝観しようと、日頃から雪子の元には彼女の信者の集団が集うのであります。雪子はこの世に生まれ落ちた、まさに天使様といった様相をしながら、毎日を過ごしております。

しかし、雪子自身はずっと以前から、子供の頃から自分を取り巻く環境と、生まれ持った才能とに、二度と熱を帯びないほどにまで冷たく、興味を抱かなくなっていた。とはいえ彼女には、そんな氷塊な人生を捨てようという気持ちは微塵もない。彼女の内に宿った倦怠は、彼女自身と、親しい一部の人間を除き、誰にも気取られることなく、どんどん広がっていた。そんな折にふと、彼女は気が付いた。自分の中にある求め。これまで考えたことのない気持ち。誰かを気持ちよくさせたり、嬉しがらせたりするものとは真逆の存在。他人に心の底から憎まれてみたい。

雪子は今までに何度か戦闘をしたことがある。彼女の所属するチ

ームに敵対する他人とのものだ。そのどれもに勝利したのは言わずもがな。場合によっては雪子の姿を目にしただけで、敗北を受け入れるチームもあった。雪子の前に平伏した彼らが、そのあと雪子にさらなる敵対心を募らせたこともなければ、復讐を企てたことも全くない。みんな雪子に優しい瞳を向けてくる。心底、退屈だ。

あるとき、一人の男と戦闘をした。もちろん勝利したのは言わずもがな。彼はそれまでの相手と少し違った。雪子に対してほんの僅かだが、敵意を向けてくれた。雪子は彼の目に宿る闇黒に気が付いた時、今までに感じたことのない心臓のリズムを自分の内に聞いた。でもあれは、なんていう人だった。犬みたいな名前と顔とにおいだった。彼との戦闘で、雪子は期待を抱きながら、ほんのちよつとだけ本気と本心とを含ませて、彼と交えてみた。でもそうしたら、犬みたいな人の目からは、煙が風に吹かれて消えてしまうように、たちまち戦意と敵意が失われてしまった。それが分かった途端、雪子の期待もしぼんでしまった。戦いに敗れて地面に額を擦りつけ、雪子に謝罪を見せた彼。彼の丸まった背中に、雪子のしぼんだ期待はちよつと諦めが付かなかった。彼の胸ぐらを掴みあげると、自分でもビックリするくらいの音が鳴る強さでもって、往復ビンタを気の済むまでしてみた。けれど、彼の顔が赤く腫れ上がって、所々雪子のネイルアートの引つ搔かれた皮膚に血が滲んできて、あ、結局右目は大丈夫だったんだっけ？ あの人、失明せずに済んだのかな。彼が不意に首を動かしたせいで、彼の右目に爪の先が入って、凄く変な色の涙が出てきて、ちよつと背筋がサワツとしたのは心地が良かったのだれど、それでビンタを止めた。それでも彼は、ほんとに忠犬みたいな表情で、腫れ上がった顔を雪子の足元に擦りつけて、雪子に対しての終生の従属を願ってきた。あれ、やっぱりダメなんだ、って思った。そのとき周りには雪子の仲間が何人もいたんだけど、誰もやりすぎだと咎めたり、雪子を制止する行動を起こしたりなんてことは、全然しなかった。みんな、雪子の行動を『許す』とか、『諦めた』とか、ネガティブなベクトルではなくて、全て承

諾して受容した瞳で見つめていた。子供の頃から何万回も目にしてきた、いつものやつだ。

そんなことがあってから雪子は諦めて、しばらく戦闘を止めることにした。

雪子の精神祖型は天性からの天使で出来ている。彼女がどんな言動をしても、どんな思想を持っても、どんなに汚れた酷い欲求をしても、彼女の心を否定することは、凡百の民にはできない。

西田恭平は雪子の本心を知っている。彼女は誰かに憎んでもらいたいと思っている。殺意して欲しいと羨望している。馬鹿な。他人に恨まれる状況を、冗談でもなく、真面目に、真摯に欲して、求めているだなんて！ そんなもののない人生のほうが、よっぽど素晴らしいくて、何よりも代えがたいものなのに。雪子は知らないのだ。本当の恐怖を知らない。闇を見たことがない。だから、求めるんだらう。

だから、雪子は魔女を求めたのだらう。魔女は人々の増悪の対象だ。恐怖の具現だ。西田はかつて、雪子に魔女の話をしたことはなかった。万が一にも雪子が魔女に興味を抱いてしまつては、それこそ挽回の出来ない失態に繋がってしまうのを、痛切に理解していたからだ。しかし、交友の広い雪子のことだ。いつどこで誰から魔女について吹き込まれるか分からない。数年前に雪子が携帯電話を手に入れた時、彼はどんな事柄よりもまず、雪子が魔女についての情報を、いつかそこから知ってしまうのではないかと焦燥した。昔と違い、この街の情報はどこの誰に対しても、自動販売機でジュースを買うような手軽さで手に入るようになっていた。そして危惧した通り、雪子は魔女の情報を手に入れ、気をやられてしまった。魔女と対峙してみたいと希望してしまっている。魔女ならば、自分を憎んでくれるのだらうと期待している。欲望している。

西田は、魔女と対峙したいと願う雪子の心を、一片たりと残さず

に払拭しなければならなかった。彼女に合うのは光り輝く道だけであって、暗がり続くような汚れた道は、靴の裏にだって踏ませてはならない。西田は雪子の守護騎士である。雪子の姉であり、西田の姫である明海に、命令されている。雪子を守ってくださいと。西田は決意していた。明海の命令よりも、ずっと以前から。彼は命を賭して雪子を守るため、彼女の傍らに控えている。

けれど、西田も雪子の力には逆らえない。雪子の欲することものを、彼女の口から直接命じられたのならば、自分にはそれに抗う力の無いことを、西田は理解している。彼女が魔女を欲しているのであれば、雪子に魔女を差し出す道筋を立てなければならない。西田は自分の方針に悔恨した。雪子には魔女を隠すのではなく、魔女の残酷な恐ろしさを諭し、理解させ、雪子自身の意思でもって魔女を遠ざけさせるべきではなかったのだろうか。しかしその懺悔はもう届かない。罪を償うために、西田は全霊でもって雪子を守護しなければならぬ。西田は準備を急かねばならなかった。雪子から魔女を遠ざけることが叶わなくなった今、次のシーンに移らなければならない。魔女の討伐だ。

「黒崎望って、わたし知ってるんだ。お友達じゃないけどね。こないだの、合コンのときにヒトミちゃんが連れてきたの。途中で居なくなっちゃったけど。彼女が魔女だったなんてね。あの時はそんな雰囲気、全然なかったのになあ。でも、狭いねえ。世間ってさ」

「合コンですか。いいですね、花の女子大生。若さを無くしたおじさんは羨ましくて、涙で、前も見えませんかよ」

「それは、困ったわ！」

雪子は西田の座る椅子の背もたれに手をついて、嬉しそうにピョンピョン飛び跳ねた。それから背もたれごと、西田の首を抱きかか

えた。西田は苦笑して、手で目元を覆い隠すようにして、こめかみを揉んだ。

手元に隠れた視線は、雪子のなかの魔女を。小指の先にも満たないほんの小さな黒い刺となり、大切な雪子の心に深く突き刺さった魔女に向けて、鋭い光を放っていた。

黒崎望がベッドの上であぐらをかいてぼんやりしていると、久しぶりに携帯電話が着信を知らせた。ディスプレイに表示されているのは『星野くん』だ。うつひゃあ！ 望は飛び上がり、ベッドの上に正座した。見られるわけでもないのに、髪を手ぐしでサツサカ整えて、上着の襟元を正すと、あーあーあーと喉の調律を行い、大きく深呼吸をして、心の準備を整え、そして通話ボタンを押下した。受話口の星野哲郎はやっぱりというか、いつも通りというか、不機嫌そうな声調から始めた。それでも望はドキドキしていた。

「デートなの？ それはデートのお誘いなの？」

大事なことなので、二度聞きました。受話口から、なんか、唸るような、変なノイズが聞こえてきて、あー、困ってる。困つてると思っ、わたしはニヤニヤしっぱなしだった。唸り声の延長から星野は、やっと言葉を返してきた。

「いいから、どうなんだよ。来るのか、来ないのか？ 他に予定があるならいい」

答えなんて、最初から決まっているのに！ わざわざ確認なんて

必要ないのにつ！ イエエス！ イエス！ イエスだよ！ 行く！
行きます！ 行きますともっ！ 例えどんなに大事な予定があつ
たつて、全部ほっぽり出しちゃうよっ！ ないけどね、予定なんて
初めっから、なんにもないけどね！ ないけど、ないけどーっ！

「あー、うん。確認するから、ちよつと待って！」

つて答えて、わたしはごそそとルイヴィトンから手帳を取り出
して、予定を確認するフリをします。開いた手帳は、真っ白！
買ったまま！ 一文字だって書いてない！ さびしい！ でもい
い、いいんだよそんなの！ 今から書くんだから！ デートって太
字で書くから！

「うん。その日は空いてるよー。一日大丈夫だよ」

「分かった。じゃあ、駅前に来い。時間は、あー、何時でもいいや」

「何時でもって！ 待ち合わせするのに、時間決めなくっちゃ、お
かしーでしょ」

なんて言っただけど、何時でもいい！ 何時だっていいよッ！ あ
なたが言うなら、何時間だって、何日だって、ずっと待つちゃう！
来てくれるまで待つてちゃうもんねー！

「あー、じゃあ2時だ！ 2時に来い。いいな」

「うん、2時にね。14時だね！ 分かった、いいよー！」

メモだ、早速メモしなくちゃ！ ヒヤッハー！

「……なんかお前のケータイ、おかしくねーか？ さっきから、たまに雑音が入るぞ？」

「えっ？ そっそうかなー？ おかしーな、故障かなあ？」

やだ、荒くなった鼻息が掛かったのかな。慌てて人差し指を横にして、鼻の穴を塞いだ。

「じゃあそっいうことで、頼んだぞ」

「うん」

「じゃあな」

「あつ！ ほっ、星野くん！ ちょっと待ってッ！」

「ああ？」

「おつ、おやすみ！ おやすみなさい！」

「……ああ」

電話が、切れた。

ちッ、違うでしょおおお！ もおおおおお！ そこは、「おやすみ」って返すところでしょおおおおおおお、がああああッ！ ああッ！ もうっ！

でもいい、でもいいの！

わたしはそのとき、ベッドの上にかしこまって正座していたんですけれども、膝だけの跳躍でクローゼットの前まで飛んでいきました。こまけえことは、いいんだよ！ そっいう気分だったんだよッ！

クローゼットの中の服を全部取り出して、片っ端からベッドの上に並べました。さあ、どうする？　どういう組み合わせにしようか？　ハンガーに掛かったままの服を、姿見の前で何回も何十回も、何百回も体に合わせてみた。

「ダメだ！　なんかちがう！　全部なんかちがう！　イメージとちがうしっ！」

「う、るっせええええええええ！」

「このクソブタ売女がッ！　口を閉じろおお！」

「死ね。死ね死ね死ね死ね、死ね！」

「うひっ！？」

突然、頭の中で幾つもの怒鳴り声が出た。驚きのあまり、思わず手に持ってたワンピースを落としてしまった。外音じゃなくて、内面からの声だっというのは、すぐに察知した。魔女だ！　魔女がわたしの中で、叫んだ！　これは、こんなにはつきりとした魔女の声が聞こえるなんてことは、魔女を継承した、あの夜以来のことだった。やっぱり、わたしの中の魔女が、活動を密にしているんだ。

最近の、変な違和感。ワンコに嫌われたり、店長に疑われたり、バイト先の友達に嫌われたり、鏡に映った変な目も、やっぱり、そうなんだ……。これで確定した。事実を突きつけられた。あれは、やっぱり、わたしの中の魔女のせいなんだ。

「でも、いーの！　今はそんなの、どうだっていいんだッ！」

わたしは振り上げた右腕を袈裟斬りに払って、その一撃で魔女を払拭した。わたしの切り結んだ決意の前に、魔女の声は閉め出されて、ピタリと止まった。

わたしの、今のわたしの心を覆い尽くしている、この幸福感、充足感といったら。今この瞬間のためになら、今後の人生が魔女のせいでどんなひどい目に遭っても、全部許せる。どんなことだって受容できるくらいに、幸せだ。しあわせでいっばいなのだ！

星野が、わたしを、デートに、誘ってくれた！

この事実だけで、わたしの心は未だかつてないほどの幸福に満たされたのだ！ 心に光が差し込んでいるのだ！ しあわせで、窒息死しそうなくらいに、胸がいっぱいなのだ！ これはいくら魔女の力でも、覆せない、変えられないんだよッ！

わたしはボクサーみたいに構えて、2、3回シュツシュツと、ジヤブを切ってみせた。

「今のわたしは、今世紀最強だ！ かかってこい、魔女どもめ！ どうした！ わたしからこの幸せを、奪ってみせる！ 闇黒で上書きしてみろッ！ できないのか！ できないんだろッ！ ひっひー！ なんでもやってみろッ！ わたしを落ち込ませて、絶望させてみせる！ 残念だなッ！ お前たちには、どうしようもできないんだ！ ざまあみろッ！ わたしの勝ちだッ！ ふっひーッ！」

腹の底から、わたしは勝利の雄叫びを上げた！

と、その時だ。突然、壁の向こうから、『ドスン！』と、部屋中が震える、けたたましい衝突音が響いた！ わたしの体はまたビクッとした。

大きな音には、はつきりと苛立ちの感情が込められていた。

うへっ。これは……。魔女のしわざじゃないな。隣の部屋の人だ。こわばった身体を、音のした壁のほうに向けたわたしは、隣に住んでいる人へ、心の底から謝った。こんな時間に、一人で騒いだりして、すいません……。

「ふっ、ひー……」

落ち着け。ちよつと落ち着こう。

すーはーすーはー。

よし。落ち着いた心と瞳で、部屋を見渡す。散らかした衣服が、床を覆い尽くして足場もない。いけないいけない。行き過ぎだ、この散らかり具合は。片付けよう。

散乱した衣服をいそいそと集め始めたその時、わたしの視界にクローゼットの一番下の引き出しが入った。わたしは、ハツとして、気がついてしまった。まだ回収途中だった衣服をベッドに放り投げて、クローゼットの前まで歩み寄ると、膝まづいて、そつと引き出しを開いた。中には、折り畳まれた小さい布切れが並んでいる。わたしは布切れを一つ一つ手に取って、熱心に確かめた。ベージュ、白、ベージュ、白、ベージュ。クツ……！。

わあああーっ！ だめだーっ！ 全部、ボツだあー！ なんてこんな、無地の機能重視ばかり！ カラーもデザインも全然カワイくないし！ これは、困った！！ いやややや、違います！ 違うんです！ 全然、期待しているとか、そんなじゃないんです！ これは、そんな、魔女みたいな淫乱な気持ちじゃないんですよ！ 決して！ 絶対に！ 初めてのデートなのに、わたしがそんな淫らなことを、コレっぽっちだって、考えるわけじゃないですか！ 誓って、神様に誓って違います！ でもでもでも、やつぱり、身だしなみ！ そう、身だしなみですよ！ 見えないところも、ちゃんとするのが相手に対する礼儀っていうものなんです！ 大切な事じゃないですか！ それに、いえ、わたしは全然、頭の中にだって浮かんでませんけど！ かつ考えてもいないことですけど、ひよつとすると、ひよつとすることだって、あるじゃないですか！ 二人きりでいるうちに、なんかこう、雰囲気、あれっ？ これってもしかすると、もしかしちゃうかも？ っていう、いい感じの流れに

乗ることだって、想定しておかなくちゃ、だめじゃないですか！可能性に対する準備は、万全不可欠でなくちゃいけないじゃないですか！　だってだって、星野も、お、男の子だしっ！　わたしにはそんなつもり、これっぽっちも、1オンゲストロームほどもなくたって、ほっ、星野が、星野のほうがつ！　なにかの弾みで、弾みで、がぶり寄って来ることだって、あるかもしれないじゃないですか！　そうですとも！　十分考えられるハプニングじゃないですか！　ご飯の時に、お酒とか飲んだりしたら、自制心が効かなくなっちゃったりして、男の子は怖いんですから！　いきなり、不意打ちに、星野がわたしを、抱き寄せでもしてきたら！　そそそ、そんなことをされたら！　さすがに、身持ちの堅さに定評のある望ちゃんだって、どうなるか分からないんですからね！　キャーッ！　初デートでも、そういうことだって、充分にありえるじゃないですか！　こは、おお、お、押さえとかなきゃ絶対ダメな、大事なポイントでしょッ！

うひーっ、顔が、なんか熱い。

「買いに行こう！　明日、あと、服も……」

ついでに、なんか、化粧品も買っておこうかな。なんだろう、なにを買ったらいいのか、あんまり頭に浮かんでこないけど……。

っていつか！　違う！　落ち着け！　落ち着け、のぞみ！

もっと大切なことがあるじゃないか！　もっともっと重要なこと。大切なのは、そう、

誠意だ。

星野に、好かれてもらう。これだ。これが最重要だ。もちろん、身だしなみとか、下着が、どうのこうのとか、それも、もちろん大切だけど。一番は、心構え。相手の気持を、察して、できるだけ合

わせて、彼を楽しませなくっちゃ。これだ。これが一番だ！ 彼がどんなことが好きで、どんなことに興味があるのかを知って、それに対して限りなく正解に近いレスポンスをするのが、ミッションだ。彼を安心させて、充足させることが、なにを置いても最優先だ。私と一緒にいることが、心地いいって彼に思わせるように。わたしがこれからはずっと、彼の側に居ても、いいんだよって許してもらえるように。一緒にいてもウザくないし、邪魔にもならないって思わせるように。むしろ、ずっと側にいてくれって、星野に思わせるくらいに！ それだよ！ そこじゃないか、重要なのは！ デートの日に向かって、自分の中の魔女を払拭する位の、綺麗な心を作らなくっちゃ！ 一度きりのデートで終わりじゃないんだ、どんどん繋げていかなくっちゃ！ 帰り際に、星野の口から、次の約束を引き出させるくらい！ ガツツリと星野の心を捕まえなくちゃ、好感度あげなくちゃいけないよねっ！ やるよ、わたしやるよ！ がんばるよ！ 絶対、星野の、本命になるよっ！ なってみせるよっ！ お父さん、お父さん！ わたしを見守って、応援していてねっ！

『あーあ……なんなのこの子？ 気持ち悪くて吐きそう』
『うひっ、うひひっ』
『恋する女はなんとやらって、昔から言うじゃないの。けけっ。ア
ンタたちは知らないのか。ブツサイクなツラ並べやがって、黙り込
んじまってまあ』
『セックスの時だけ代わって欲しいな』
『死ぬ。死んでしまえ』
『あああああああああー』
『ブン殴りたい。ブツ殺すんじゃないでブン殴りたい』

黒崎望はその夜、ほとんど徹夜をしていた。星野哲郎との初デー
トに想いを馳せるのもあった。自分の中の魔女がはつきりとした輪
郭をじわじわと帯び、存在を強めてきたという自覚に不安を抱かざ

るを得ない心もあつた。しかしそんなことより、なによりも、彼女が夢中になつていたものというのは。ずっと以前に買って、ちよつと中を覗いて見たんだけれど、なんだか怖くなつて本棚の奥にしまつたまま、つい先ほどまで忘れていた一冊の雑誌。

ベッドに寝転がり、枕を顎の下に敷いた姿勢で、望が熱心に目を走らせるのは、ファッション雑誌の数ページに記載されたセックス特集だつた。べつ別にこれを鵜呑みにして、いざその時が来たら実践するつもりなんてコレっぽっちも、脳細胞のシナプス一欠片分ほどだつて考えていないんだからねっ！ という言い訳に握りしめた拳を、ベッド脇のかわいそうなクマのぬいぐるみの腹部目がけて、縫い目から綿がはみ出さんばかりの激烈さでもってバスンバスンと殴りつけながら。しかし強烈な知識欲に焦がされ、炎さえ上がりそうなほど熱を帯びた瞳で、『彼をその気にさせる誘い方』がうんぬんとか、『一緒にお風呂に入った時』のなんたらだとか、『ベッドでの彼への愛撫』がどうだとか、丁寧に図解の入った記事のひとつひとつを、熱心に読みふけていた。えっ、こつこんなことまでー！ とか、そつそんなテクニクがー！ とかを心の中で絶叫しながら、決して記事から目を離さなかつた。時たま「ひっひー」と、耳にしたものの精神を確実に病ませる声色の悲鳴を小さく上げながら。その時の望の姿といつたら、例え彼女が生まれてから今までを品行方正な振る舞いに徹し、天上を臨むほどにうず高く積んだ徳を持つていたとしても、それを一瞬で帳消しにされてしまうような、酷い痴態だつた。というか変態だつた。

望は、雑誌の情報を着実に脳内メモリーへと記録していった。あくまで知識としてだけ。そういうことも、もちろん知っている、でも実践はきつと、たぶんしない、小悪魔的なわたし。と、少しでもこすれたらかすれて読めなくなつてしまひそうな、引っ搔いただけの鉛筆書きの注釈を添えて。

その間、彼女の背中に流れる長い髪の間から、時たま魔女たちの目がキョロキョロと飛び出してきていることに、望はこれっぽ

ちも気がついていなかった。しかし、今夜の魔女の赤い目は皆、いつまで続くか知れない望の独り乱痴気騒ぎにあてられて、疲労困憊の色に閉ざされていた。

魔女の夜 - 3

西田恭平は眼を閉じて、記憶を遡った。

まばたきにも満たない僅かな時間で、全員が拘束されてしまった。底の見えない闇のように黒く、あやふやな輪郭の魔女の手は大きかった。掌に大人1人を飲み込んで、まだ余裕がある。西田恭平と彼の仲間は、魔女の黒い手に捕らえられ、決して振りほどいて逃げることの出来ない絶望的な握力の強さで、全身を締め上げられていた。黒い手は、1人の魔女の背中から伸びている。魔女から飛び出した十数本の腕のうち4本が、西田たちを捕らえている。余った残りの手は、ゆるゆると宙を徘徊している。あるものは、5本の指をゆつくりと開閉しながら握力を確かめているように見える。あるものは、優劣を付ける意図ではなく、ただの暇つぶしに何度もジャンケンをし合っている。あるものは、雲を掴もうとするかのように、高く高く腕を伸ばして上空に消え、戻ってきそうにない。あるものは、西田の目の前の魔女にゆつくりと絡みついて、大きな指先が愛おしそうに魔女の頬を撫でている。腕のそれぞれが魔女とは独立した意思を持った生き物のようである。魔女にしがみついた黒い手の指先が、じゃれる犬のベロのように魔女の顔をくすぐっている。魔女は嬉しさに甲高い悲鳴を上げながら、両腕で抱えるようにして、黒い手を優しく撫でている。

魔女は笑顔のまま、西田の隣の男に視線をやった。黒沢もまた、西田と同じように、魔女が夜の闇を寄り集めて造り出した黒い手に捕らえられている。西田が見た黒沢の最期は、ひどい顔をしていた。まぶたはこれ以上ないほどくれ上がっている。眼内は毛細血管が破裂して赤く染まり、瞳の黒とのコントラストを作っている。眉間には幾筋もの深いしわが入り、真っ黒い鼻の穴からドロドロした血が垂れている。食いしばった顎が筋張っている。

ごりつごりつと固いものをすり潰す鈍い音が、黒沢の周囲に響き渡る。途端、黒沢を掴み込んでいた黒い拳が縮まり、指の間から赤黒い血液がぶわっと噴き出た。周囲に四散した血飛沫が、西田の頬にも降りかかってくる。黒沢の身体は黒い手の、万力のような握力で潰された。黒沢の頭が、彼を握り込んでいる親指と人差し指の間で、ぐらぐらと揺れている。黒沢の表情は、西田が見たときのまま凍り付いていた。

魔女が耳障りな、バイオリンの引っかき音の笑い声を上げる。

「あつさつ」

黒い手は黒沢の亡骸を地面へ叩き捨てた。濡れた雑巾を床へ叩きつけるような、耳障りな衝突音がそこら中を跳ねた。血溜まりに捨てられた黒沢は、もう、どうやっても助からないだろう。呆然と思いつ、西田は自分の感情が麻痺しているのを感じた。ピンク色の肉塊と象牙色の骨の山に埋もれた黒沢の顔が、西田に向いている。地面へ叩きつけられたときに欠損したらしい、黒沢の顔は、右半分しか形を残していなかった。自分の数十秒後が、あれなのだろうと、西田の心は他人事のような冷淡さに包まれて、落ちくぼんだ。

佐々木が怒号とも取れる悲鳴を上げた。佐々木を捕まえている黒い手の上から、長い刃が突き刺さっている。対角線の長い側が3メートル、短い側が30センチほどの、菱形をした黒い刃が、佐々木を捕らえている黒い手ごと、佐々木の太腿あたりを貫いていた。どすると、頭の中にこもる音を立てながら、2本目の菱形が佐々木の腹の当たりを貫いた。佐々木が再び絶叫する。西田が刃の飛んできた先に目を向けると、自分の影を地面から剥がしている魔女の光景があった。夜の公園の外灯は、背中から魔女を照らしている。魔女は自分の足元に伸びる影を、まるで拾い物をする動作で、アスファルトからペリペリと剥がしている。すっかり剥ぎ取られた影は、黒い厚紙を魔女の輪郭に合せて切り出した形である。ただ、外灯の角

度のせいで、剥がされた影のほうで、本当の魔女よりずっと背が高かった。

魔女は、剥がし終えた影を肩に担ぎ上げる。と、魔女の靴と地面の間から新しい影がぬるりと流れでてきた。影はたちまち、先ほどと寸分違わぬ魔女を型どった。

魔女は両手にとった影を、捨てるような乱雑さで放り投げた。影は空中を一直線に進みながら、たちまち菱形の刃へと変わっていった。変化を終えたとほぼ同時に、影は佐々木の眉間に突き刺さった。佐々木は「あつ」と大きく声を上げ、がくりと首を垂れると、それから一言も発しなくなった。同じように魔女も「あつ」と声を上げた。

魔女は自分の頬を右手で軽く叩くと、ニヤニヤした。

「手がすべつちった。まあいいや。しさつ」

次は自分の番だろうか。

西田は魔女を見遣った。くしゃつとした笑顔だけを見れば、年端のいかない可愛らしい少女であった。だが、少女は魔女で、くしゃつとした笑顔の数秒を得るためだけに、ためらいなく人を殺すのだ。西田には信じられなかった。

西田は、佐々木を殺したことに悦び笑みを浮かべる魔女と、ほとんど同年代の姫を信仰している。姫の名前は笠原明海という。明海はちよつとした冗談や気遣いだけで、本当に心の底から笑顔を見せる、純粋な心の持ち主だ。彼女の喜ぶ顔を見ると、西田の心も嬉しくなった。

その明海の笑顔と、魔女の笑顔が、そっくりなのだ。顔つきが似ているということではない。雰囲気があるきり同じなのだ。魔女は、相手を殺し、或いは殺した後の死体を弄びながら、笑う。本当に純粋に、心の底から。明海と、目の前の魔女は、根底にあるものが天と地ほど掛け離れているのに、同じ笑顔をほころばせる。西田は信

じたくなかった。

「助けてください。助けてください」

小さく、震える声で、木下が魔女に懇願している。彼女も黒い手に捕まっている。と、声を聞き入れたのだろうか。黒い手の指がぱたぱたと開き、木下をそつと開放した。木下を捕まえていた黒い手は、木下の元からすると離れていき、彼女の目前で、ぴたりと動作を止める。木下は恐怖のあまり、拘束から解かれた事実が気が付いていないようだった。目をぎゅつとつむつたまま、繰り返し、魔女に向けて助けを乞うている。胸の前で両手を組み、神様に祈るようにしている。

「うひっ」

木下の小さな祈り声に、魔女の嬌声が重なった。

声を合図にして、黒い手が姿を変えはじめる。5本の指が全てくつついて1つに。先細った紐状になる。変化を終えた途端、黒い紐は木下の僅かに開いた口元へと殺到した。口元に違和感を感じたのか、わつと目を見開いた木下が、ぐうつと喉を呻かせる。木下の体が大きく脈打つ。黒い紐がどんどんと木下の口内に入り込み、喉を通過して、腹の中に流れ込んでいった。毬のように丸々した胴体がさらに、ぶうと風船に膨らむと、次の瞬間破裂した。風船を針先で割つたような破裂音と共に、木下の血液と、着衣の布切れと、肉片とが入り交じりながら、周囲に飛び散った。木下が祈るようにして組んでいた両手は、その形を残したまま、彼女自身の血溜まりの中に落ちた。

「ばっくさっ」

魔女は上機嫌だった。

西田が木下の肉片から視線を反らすと、その先には魔女の顔があった。黒目と白目が逆転した、気狂いの目つき。耳たぶまで大きく裂けた唇は、例の笑みで覆いつくされている。魔女の顔を目にした途端に、西田の心の麻痺が解け、膨大な恐怖がこみ上がってきた。西田の奥歯は噛み合わず、ガチガチと音を立てた。絶望が心の中を覆い尽くした。

殺される。死ぬ。

と、西田と魔女の間に、前触れなく、白い閃光がザツと走った。その途端、西田を捕らえていた黒い手の表面に、白く光る無数のひびが入った。ひびはたちまち黒い手の全体に回っていく。徐々に幅と深さを増していったひびは、ついに黒い手をバラバラに砕いた。ガラス片が折り重なるような乾いた音を立てながら、黒い手は地面に崩れ落ちると、幻のようにふうっと消えた。

拘束から解かれた西田は、地面に手と膝を付いて倒れこみ、喘いだ。カラカラの喉を鳴らして空気を飲み込み、ぐっと首を上げる。西田の目の前には、1人の男の背中があった。彼は、全身が白い光に包まれていた。魔女の闇をずっと向こうへ遠ざけるほど、力強く輝いている。男は魔女の闇から西田を護る、盾の役割をしていた。

魔女には、もう一つの光が迫っていた。光は左腕に握りしめた剣を、隼のように素早く振りかぶると、魔女の頭に目掛けて斬り下ろした。魔女は抵抗もせず、一声も上げず、光の斬撃をともに受けた。魔女の右側頭部から入り、左顎部に抜けた閃光がパツと光る。一瞬、闇に包まれていた公園がすみずみまで照らし上げられた。光の断面から魔女の顔半分がずり落ち、ベシヤリと音を立てて地面に落ちた。

「さっさと立ち上がれ。逃げるんだ」

穏やかだが強い口調で、西田の目の前の男が命令した。今の一撃で魔女を討てたわけではないということを、西田は悟った。男の声に恐怖を解かれ、西田は立ち上がることができた。

西田の予感どおり、魔女は顔を半分失いながらも、両手を腰に当てたまま直立している。地面に落ちた魔女の頭が、上下左右にぐりぐりと、不規則に目玉を動かしていた。魔女は自分を襲撃した光の正体を確かめると、喉の奥がのぞく切断面から、不気味な笑い声を放った。

「白騎士のおでましか！ 魔女に不意打ちなんて、男前もいいところじゃないの、あんたたち！ だけど、だけど、たった2人きりなの？ ほかにはいないの？ あとはだれも来ないの？ なんのつもり？ なんのつもりなのよ？ こおんな程度の低さで、あたしを殺すつもりなの？ そうなの？ そうなんだあ！ うひっ、ひ！ ばーか！ うひっひひひ。やれるもんなら、やってみやがれえええ！」

「早く逃げろ！」

魔女の顔半分を切り落としたもう1人が、西田に向かって叫んだ。西田は白騎士と魔女に背を向けて、一目散に走り出した。背後から金属同士がぶつかり合い、ひしゃげるような音が耳に飛び込んできた。

全力で走りながら、西田は後ろを振り返った。

西田の目に飛び込んだのは、頭部の断面から子供の胴体ほどの太さの、鞭のようにくねる闇黒を際限なく伸ばし始めた魔女の光景だった。巨大な黒い鞭は、嵐のような荒々しさで空気の切り裂き音を響かせている。

黒い鞭がひゅっと光を薙いだ。一片の慈悲も含まないしなりは、先程西田を黒い手の拘束から解き放った白騎士の首を、白騎士が手

にしていた剣の刀身ごと横一文字に斬り払った。折れた剣先は、くるくると回転しながら、地面に突き刺さった。光に包まれた白騎士の首は勢いよく宙へ跳ね上げられ、真つ黒な公園を背景に、まばゆさを失ってゆく。白騎士の頭部はすっかり光を失うと、地面へ墜落した。

西田は前を向いた。喘ぎながら必死で走った。二度と振り返らなかった。

「西田さん、気分が悪いんですか？」

茶器を乗せた木製のトレイを運んできた四谷紀乃が心配げに声を掛けた。声にハツとした西田恭平は、椅子に腰掛けた居住まいを正す。丸縁のサングラスを指でくいと眉間に押し込み、いいえ、と四谷に向けて微笑んだ。四谷は西田のほころんだ表情に安心して、えへ、と笑い返した。四谷はテーブルに茶器を並べる。赤色のぽてつとしたつばきが描かれた湯飲みに、急須の注ぎ口からとぽとと煎茶が注がれる。湯飲みを茶卓に乗せると、四谷はそれを西田に差し出した。湯飲みを手にとって一口すると、ふくよかな甘みが西田の喉を通り過ぎ、香りがしつとりと広がった。あとには輪郭の丸い、ほのかな苦味が残る。

「お上手ですね。とてもおいしい」

西田の言葉に、四谷は照れ笑いを浮かべてもじもじとした。

「いえいえ。ほんの粗茶でございます」

「ところで、なぜメイド服を着ているのですか」

「あ。はい……」

西田の問いかけに、四谷は笑顔を無くしてみるみるしぼんでいった。

四谷は足元まで隠れる長いスカート丈の、黒いメイド服を着ている。その上にフリル付きの白いエプロンを着け、頭にはメイドカチューシャまで乗せている。屋内だというのに黒い靴を履き、歩くたびにフローリングをコツコツと鳴らす。床に傷が付いても構わないのだろうか、と西田は変な心配をした。

四谷はカチューシャを外すと、短い髪をくしゃくしゃと掻いた。

「これは、清美さんの趣味というか、なんというか、その。命令で！ 仕方なく。もう一週間くらい経つんですけど、なんだか、なかなか飽きてくれないので」

「靴まで」

「はい……。蒸れるので、素足になりたいです」

「似合ってますよ」

お茶を誉められたときと違い、西田の言葉に四谷は表情を曇らせた。四谷は苦笑をして、ひとりごちる声量で呟いた。

「いつもの、アディダスのジャージのほうが気楽でいいです」

そういえば以前に見た四谷は、学生の体操着のような白いＴシャツと、側面にラインの入ったジャージパンツの姿だった。西田は目の前の四谷と記憶の中の四谷とを並べながら、湯飲みをすすった。

意気消沈した様子の四谷がなんだか可哀想に思えてきたので、メイド服についてこれ以上聞くのは止めにした。

「すみません。清美さんは、まだ、ちょっと、その、お仕事っていうか、やることがあるみたいで」

四谷は言いながら、廊下へ繋がる扉にチラリと目をやった。西田は北野清美の自宅を訪問している。

北野清美はこの街のデータベース屋さんだ。しかし、他のデータベース屋さんとは一線を画した能力を持つ。北野はそれを活かしてデータベース屋さんでありながら、どの情報収集屋さんとのコネクションも持たない。北野は他者に頼る必要のない、独自の情報収集能力を有している。北野は自分の能力に【空読み】と名前を付けている。単語自体の持つ暗記の能力ではない。北野は空を眺めて、この街で起こった事柄の観測を行うのだ。西田は以前、北野から説明された。空は、この世界で起こり得た事柄全ての観察者であり、目撃したことを余さずに記憶している。空の記録庫には古今東西の膨大な情報が保管され管理されている。空の記録庫に接触し、自分の欲しい情報を参照できる能力が【空読み】なのだ。北野が【空読み】を用いて過去の事象を参照したとき、それは常に的中している。なにしろ空の記録庫には、本当にあつた出来事しか記録されていないのだ。

過去の事柄を空から引き出すものとは別に、北野清美の【空読み】にはもう一つの力がある。西田が今回北野を訪問した目的は、そちらの能力の提供を依頼するためである。それは、北野清美の予言能力だ。ただし北野の予言は、ほんの些細な出来事までしか分からないし、的中率も7割に満たない。【空読み】を用い、既に過ぎた事柄を参照することよりも、未来に起こりうる事柄を予測するほうが、ずっと困難で、骨が折れる作業なのだと、北野は言っていた。ちなみに、今まで北野が予言を的中させた例で、西田が知るものとして

は以下が挙げられる。

北野の従者である四谷が翌日に、晩ご飯に何をどれだけ食べるのかを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、いつどこへどのような経路で買い物に行き、何をどれだけ購入して、いくら支払うのかを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、当時付き合っていた彼氏から『占いで合わないという結果が出たから』という理不尽な理由で別れ話を切り出されるバッドなイベントに遭遇することを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、当時付き合っていた彼氏から『化粧をした母親の顔に似ているから』という理不尽な理由で別れ話を切り出されるバッドなイベントに遭遇することを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、自転車で移動中、路地から突然飛び出してきた野良猫を避けきれずにアスファルトへ転倒し、自転車から投げ出されてゴロゴロと地面を無様に転げまわり、たまたま横を猛スピードで通りすぎようとしていた軽トラックにタイミング良くはねられて宙を舞い、アニメ的な放物線を空中に描いた終点で民家の壁に顔面から激突し、噴水のように鼻血を撒き散らしながら路肩のドブに落ち、四谷が気にしているちよつとした安産型の腰が溝にすっぽり挟まり、通りがかった大人5人の助けを借りても抜けなくなってしまったのでレスキュー隊が出動し、騒ぎを聞きつけた近所の住人が見守る生あたたかい雰囲気の中、3時間掛けて破壊された側溝のコンクリート片とヘドロの中から救出され、野次馬連中からお情けほどの拍手を浴びせられながら救急車に乗せられて、搬送先の病院で偶然入院している友人の見舞いに来ていた当時付き合っていた彼氏と鉢合せて痴態を目撃され、事情を把握した彼氏に指をさされて大爆笑されたことにカッとなり、周囲の医療関係者や救急スタッフの静止を振り払って彼氏に右ストレートをぶち込んで全治2週間の頸椎捻挫を負わせ、怒り狂った彼氏にその場で別れを切り出され、シヨックのあまり気が動転し、病院で治療を受けること

も拒んでワンワンと泣きながらその場を逃げ出し、病院近くの路上に停車していたバイクを盗んで走りだして、北野家に帰ってくることを的中させた。

北野の予言は、その程度の些細な能力である。もちろん四谷以外の事柄を予言し、的中させた事実もあると、北野は言う。しかし、西田はそれを知らない。自分から予言的中のエピソードを語るにあたり、なぜだか分からないが、北野は四谷に由来するものしか語らないのだ。北野が大げさな身振り手振りを踏まえて四谷に対する予言的中例を語るとき、北野は本当に楽しそうに次々と言葉を並べていく。そしてその時、北野の傍らには必ず四谷がおり、北野の口から四谷の恥ずかしい話が飛び出すたびに、四谷は両手で顔を覆い隠して湿っばいうめき声を立てる。北野はそんな四谷を笑い飛ばしながら、四谷の後頭部に思い切り平手打ちを叩きつける人物である。

「北野さんは相変わらずお忙しいんですね」

四谷は自分の発言を受けた西田の返答に、なぜかきまりの悪い顔をした。手にしたトレーの縁をしきりに爪で引っ掻きながら、ごにごによとつぶやく。

「ええと、その、実は、すみません!」

「えっ?」

突然、深々と頭を下げた謝罪を見せた四谷に、西田はばかんとした。顔を上げた四谷は定まらない視線で、またごにごによする。

「実はその、清美さんは、今……ネットオークションに夢中なんです!」

「ネット・オークション？」

「はい。インターネットで買い物をしているんです」

「落札じゃないんですか？」

「あ、そうです。そっちのほうです！ なんでも、ずっと前から欲しかったブランドのバッグか、何かが、今、ちょうど落札終了時間なんです」

「はあ」

西田は特に驚かなかった。ネット・オークションならば今時分、特に珍しいものでもない。つい最近も、笠原雪子がスマートフォンをいじりながら「かわいいワンピースを競り落としたよ！」と歡喜して、西田の目の前でウサギのようにピョコピョコ跳ねていた。

それに、北野の性格のことである。それを知る西田にとって、北野が自分との約束をほっぽり出し、ネット・オークションに注力するシチュエーションなど、想定範囲内である。

四谷は、すみません、すみません。と、何度も頭を下げて謝罪をする。逆に西田が恐縮をしてしまうくらいに、切羽詰った雰囲気を全身から吹き出していた。西田は居たたまれなくなって、ほとんど空にしていた湯飲みを口を付けた。それに気が付いた四谷は、急須に手を掛けた。

「すみません！ 新しいお茶をいれてきますね」

「いえ、大丈夫ですよ。お構いなく。ああ、こちらこそ気が付かなくて。四谷さんも立ったままでは、疲れるでしょう。そんな固そうな靴では。どうぞお座りください」

「いえいえいえ！ お持てなしは、わたしの仕事ですから！」

「いえいえ。持てなしを受けるほどの身分でもありません。どうぞ、楽にしてください」

「いえいえいえいえ！ そんな、お氣を使わず！ 西田さんこそ、お茶をもう一杯、どうぞどうぞ」

いえいえ。どうぞどうぞ。とダチヨウ倶楽部のやりとりを意図的に繰り返す二人の鼓膜に、突然女の怒り狂う声が飛び込んできた。二人ともビックリして、倶楽部は解散になった。怒号は続き、そこへ更に、なにかをメチャクチャに叩き潰すような騒音が続いた。どすんばたんと、西田の湯飲みが茶卓の上でカタカタと揺れるほどの振動を伴った不協和音は、数十秒間に渡って鳴り響いていたが、急にぴたりと止んだ。音の聞こえる扉のほうを見やっていた西田と四谷は、顔を見合わせた。

「北野さんに何かあったのでしょうか。想像は付きますが」

「そうですね。きっと、オークションが……」

どすどすどすと、扉の向こうから苛立った足音が、西田たちの居るリビングに近づいてくる。足音は扉の前で止まる。ぎい、と蝶番の軋む音と共に扉がゆっくりと開き、そこから現れたのは、北野清美だった。北野の顔は全身の血液を集約したように紅潮している。腰のあたりまで伸びたワンレングスの茶髪がしだれ柳に、顔のほぼ半分を覆い隠している。髪の下には、金剛力士は阿形像を掘り込んだ、怒りに満ちた表情が覗いている。荒い呼吸で胸が激しく上下して、全身がわなないている。北野の様子を見つめる西田と四谷は、

黙っている。北野は二人に視線をやることもなく、肩をいからせながら大股に歩くと、広い中庭を一望できるガラス戸の前まで進んだ。ガラス戸と向かい合い、腰に手を当て仁王立ちになる。

「ちくしょうがッ！」

いきなり叫んで腰をひねり、右手をぐつと腰だめになると、北野は正拳突きを放った。北野の拳は一撃でガラス戸を突き破る。ひい、と四谷が小さく悲鳴を上げて、体をびくつかせた。ガラスの破片が庭先と室内に、音を立てながら飛び散る。パラパラパラと、細かなガラスが断末魔を終えると喧騒は止み、打って変わって部屋中が静寂に包まれた。北野は突き出した右手をゆっくりと戻して、腰に当てる。ふうーっと肺の空気を全て吐き出すような長い息をつく。冬でもないのに、北野の呼吸は僅かに白みがかっていた。

中庭に向かっていた北野がくると振り返ると、今までの一連の出来事が嘘であつたかのような表情である。紅潮もなくなり、真顔に戻っていた。北野が四谷に視線を向けると、四谷の体は電気が走つたような震えを起こした。北野は自分が割つたガラス戸に指を差す。

「キノさん。ガラスの修繕を依頼しておいて」

「は、はい。分かりました」

「それから、わたしの部屋のパソコンを新調しておいて。あと紅茶」

「はい。ただいま」

四谷はテケテケテケ……と、足首から下だけを動かす不思議な足運びで、逃げるような速度でリビングから出て行った。

北野は溜息をしながら手ぐしで髪を上げ、リビング中央のテーブルへ歩み寄って椅子を引き、西田の向かいにどかりと座り込んだ。そして背もたれにだらりと体をまかせる。天井を見上げるような顔の角度から、北野は西田に視線を向けた。およそ来客に接する態度ではない、見下しにしか取れない姿勢である。北野の服装はラフで、黒いタンクトップに灰色のショートパンツと、まごうことのない部屋着だ。タンクトップの胸元には、毛筆で書かれた『きたのきよみ』という白抜きの大きな文字が入っている。西田はなんと云ってよいのか、ちよつと分からなくなってしまった。西田は北野と目を合わせた。

「お久しぶりです」

「そうねえ。いつ振りかしら。ワニちゃんの一件以来？」

西田は頷いた。ワニちゃんというのは鰐淵武人のことだ。

北野は背もたれから身を離すと、今度はテーブルに両手を投げ出し、上半身を乗り上げる姿勢に変わる。タンクトップの襟首をぐいと指で引き開け、豊満と云っていい胸の谷間に挟んだセブンスターとジッポを取り出す。一本咥えると火を点け、ソフトケースとジッポをテーブルに放り投げた。勢い余ったジッポがクルクルと回転しながら西田のところまで滑ってくる。西田はジッポを掴み、そのままセブンスターもまとめて掴むと、北野の脇に整えた。ぶしゅーと、北野の口から白い煙が勢い良く吐き出される。割れたガラス戸から吹き込んでくる風が、タバコの煙を無秩序に散らした。

北野は指を弾いてタバコの灰を落とす。しかしテーブルには灰皿がない。灰はテーブルの上に落ちて、煙と同じように風にさらわれていく。

西田は、北野の態度と先ほどの癪癢には言及しないことにした。

「お元気そうですね」

「そうでもないのよ。ついさっき、ムカついたことがあって」

「そうですか。それは災難でしたね」

西田は心の内で、うつんと唸った。

北野はテーブルに左頬を付けて倒れこみ、一定のリズムでタバコをふかしながら遠い目をした。職場の残業から開放され、一人暮らしのアパートへ帰宅した30前の独身OLが、ベッドにバッグを投げ出し、部屋着のジャージに着替え、とりあえず点けたテレビを眺めて、化粧落としてのコトソンで顔をぐりぐりとこすりつつ、コンビニ弁当をつまみに缶ビールをすすするような、疲れ切った雰囲気だった。

しかしすぐさま表情を一変させると、北野は西田にも音が届くほど強烈な歯ぎしりを始めた。苛立ちが、ぶり返してきたらしい。歯ぎしりと併せて、ブツブツと呪詛のような呟きも発しはじめた。北野の陰気な一人多重奏のハーモニーが、西田の鼓膜を曇らせる。西田はサングラスを少しずらしてこめかみを揉んだ。

「ケータイに切り換えるべきだったんだわ。なんですぐに思い付かなかったのかしら。パソコンを再起動させてる場合じゃなかったのよ。クソッ。それにしても最近の液晶は本当にヤワね。パンチが軽々突き抜けちゃったわ。ブラウン管だったら3発は入れられたのにあ！ そうだ！ ねえキョーさん！ アケミちゃんは元気？」

いきなり上体を起こした北野は、西田に詰め寄った。ロボットみたいな予備動作のない動きに、西田は北野の行動に予測を立てられない。西田が目にした北野の瞳は、なにかの期待にキラキラとしたときめきを放っている。西田は心のなかで、まるで百面相だな、と

感想した。

北野の言うアケミちゃんとは、笠原明海のことだ。北野は西田の姫である明海と交流がある。交流がどれほどの深度のものなのかは、西田は把握していない。いつだったか、まだ鰐淵武人が活動していたとき、鰐淵の所持していたクラブで、北野と明海が一緒にいる光景を見たことがあった。その時に西田は、明海が対人において、いつものぱつと花が咲いたような爽やかな笑顔ではなく、どんよりとした暗澹な苦笑いを浮かべていたのを、初めて目にした。俯きがちの明海の心情をこれっぽっちもおもんばかることなく、キャツキヤと大音量の嬌声ではしゃぎなら、明海にベタベタくっついていたのが北野だった。北野は明海の頭を撫でたり、抱きついたり、キスしたりしていた。明海は観念した様子でそれを受け入れていた。同性愛者なのだろうか和西田が勘ぐるほど、北野の行動は明海に執着していた。だが、西田の勘ぐりは的外れだった。北野は子犬や子猫を愛でるような心持ちで、悪意もなく明海にじやれていたのだ。西田は未だかつて、姫である明海をオモチャ扱いする人間を見たことがなかった。それに、北野に弄ばれて困惑する明海の表情が、とても珍しかった。西田は、明海から北野を引き剥がし、明海を北野の毒牙から護る行動を取らなかった。普段見慣れない明海の表情を観察し続けることに、より強いレアリティを感じた西田は、遠巻きに2人を見守っていた。

「元気ですよ。何も変わりません」

「アケミちゃんに言うておいて！ 貰い物で使わないからって、わたしにくれるって約束したバッグを、いつ取りに行ったらいいのかを、ね！ そうね、バーキンの件って言えば判ってくれるわ。バーキンの件。忘れないで、絶対聞いておいてよね？ バーキンの件、分かった？ バーキン。バーキンの件だからね」

「分かりました。バーキンの件ですね。明日会う約束になっているので、確認しておきます」

西田は携帯のスケジュール帳を起動させ、律儀にも北野の言葉を登録した。

「あつ、清美さん！ 灰皿、使ってください！ もう！ いつも言ってるじゃないですか」

戻ってきた四谷が灰まみれのテーブルを見つけて顔をしかめた。テーブルに置いたトレイから灰皿を取り上げて、北野のすぐ横に置く。四谷はエプロンのポケットから布フキンを取り出して、テーブルに散った灰を丁寧に拭き取った。北野は、四谷が運んできたティーポットと北野専用のプラスチックマグカップを見つめた。北野が途端に怪訝な顔付きに変わる。

「キノさん。ブランデーは？」

「えっ。まだ、昼間じゃないですか！」

「ブランデー」

もう！ と四谷はエプロンを平手で叩いて悪態をついた。四谷はリビングの壁面キャビネットの前までテケテケと歩み寄る。数十本の洋酒が並ぶ棚から、半分ほど残量のあるガラス瓶を手に取った。四谷は北野の横に戻ってくると、瓶をテーブルの上にドスンと置いた。北野はニヤリとして、瓶を掴みとるなり蓋を外しにかかる。

西田はブランデーを手にした北野の右手の甲に、赤い筋が走っていることに気が付いた。赤い筋は光に照らされて、テラテラと濡れた輝きを放っている。きつとガラスを殴った時か、それとも液晶デ

イスプレイを突き破った時に、怪我をしたのだろっ。西田は指をさして、北野に教えた。

「北野さん。右手の甲が切れてますよ」

「ああ。こんなの、舐めりゃ治るわ」

「ああーっ！ なっ！ 半分以上ブランドーじゃないですか！」

四谷がマグカップに紅茶を注ぐ脇から、北野がドボドボとブランドーを投入した。カップから液体が溢れそうになる。四谷が慌ててティーポットを離れたが、北野は意に介さずブランドーを注ぎ続ける。カップの縁に表面張力が盛り上がった。

北野はヘラヘラしながら瓶を置き、そのまま右手を口元に持つていく。西田から指摘のあった甲の傷を赤い舌先でチロリと舐めた。

「ん？」

北野は表情を曇らせる。首を四谷のほうに傾げると、四谷の靴のすぐ近くにペツと唾を吐き出した。ぎゃあ！ と叫んで、四谷が後ろに飛び退く。着地の瞬間にスカートの裾を踏んでしまったようで、四谷はドテンと後ろに倒れ込んだ。尻、背中、後頭部と、規則正しく床に打ち付ける、見本のように美しい転びかただった。四谷はその時ティーポットを抱えていたのだが、無意識のなせるものか、生来からの運動神経の良さからか、上手く両手で操っていた。ポットを床に落として割ってしまったり、ポットから熱い紅茶が飛び出して四谷に降り注いだりすることはなかった。西田は感心した。北野は大きな笑い声を立てた。四谷は真っ赤な顔で、スカートに気を取りながら立ち上がる。北野の笑い声に、四谷は憤然として叫んだ。

「きつ、清美っ！　なんていう、お行儀の悪いことを！　めーなのっ！　めっ！」

「きゃあっ！　ごめんなさいっ！　うひひっ！」

四谷が右手を振り上げて、北野を殴るポーズを取る。北野は両脚を椅子の上に縮こませ、両手を頭のうえにかざして守るポーズを取った。

やりとりに気を取られたが、北野の甲の傷が、既になくなっていく事実を西田は見逃さなかった。驚きに、西田は心の中で唸った。傷口を舐めるだけで治癒ができるのか。いや、気が付かないほどの短時間に他の力を使って治したのか。それにしたって、いくらかすり傷とはいえ、完治に至る早さが尋常ではない。強い能力だ。西田は北野が治癒能力を持っていることは知らなかった。北野自身から教えられたこともないし、西田の周囲で知っている人間もない。そして、今まで西田には語ることもなかった能力を、気兼ねなく西田の目の前で披露してみせた。西田は、北野の治癒能力が彼女にとって取るに足らない些細なものだと理解した。北野は他にも、まだ色々な能力を隠しているのだらうと、西田は考えた。

北野は四谷に向かって、赤い舌先をペロツと突き出した。

「だって傷口にガラスが残っていたんだもん。口の中に入ってたからビックリしてつい」

「すみません。人様の前でこんな、お恥ずかしい」

床の唾を拭きとった四谷は立ち上がり、西田に向かって頭を下げた。北野はなみなみとなったカップを手で引き寄せようとすらせず、テーブルに乗り上げる。長い髪を背中にししながら、カップに直接唇を付けて中身をすすった。四谷は北野を睨みつけたが、疲れたの

か、もう何も言わなかった。四谷は溜息を付いた。

「いえ。お二人があんまり楽しそうでしたから、つい見とれていました」

「紳士な回答ねえ。さすがナイト」

ようやくこぼれないほど中身の減ったカップを手にして、北野がニコリとした。四谷は空になった西田の湯飲みにおかわりを注いでいる。

北野は四谷を促して、白とピンクの造花でデコレートされたシュシュを受け取った。長い髪を後ろで束ねる。居住まいを正して、きちんと西田に向き直った。

「さあて、犬のようなおしゃべりはこのくらいにしておくか。それで、今日はどんなご用向きですか、西田さん」

西田も再び姿勢を整え、北野に向き直る。

「黒崎望が黒い魔女になったのはご存知でしょう。彼女の今後一週間の、予言を頂きたい。レートは通常の3割増です」

「いいよー」

北野は価格交渉することもなく、あっさりと話を終わらせた。

【空読み】を用いた未来の観測の売買では、北野は金額を提示しない。購入希望者の現状と、予言する対象とを勘定しつつも、北野は決して販売金額を口にしない。必ず予言の購入希望者から金額を明示させる。購入希望者の言い値が北野の意にそぐわなければ、販売額は上昇し続ける。北野の予言を強く欲する者ほど、北野の予言

を手に入れるための値段は釣り上がっていく。前述のとおり、北野の【空読み】の予言は必ずしも的中するわけではない。しかし、北野の予言を得ようとする者の多くは、北野が首を縦に振る提示額を支払い、予言を手に入れる。

西田が北野から予言を買取るときは少し違う。北野と笠原家関係者との取引は、両者間に締結された契約の下になされる。北野が笠原家関係者に予言を提供するとき、特別な事象の予言でない限り、一定のレートで売買することが決められている。ただし今回の黒崎望を対象とした魔女に対する予言は、特別な事象の予言に相当する。予言は間接的とはいえ、魔女と関係を持つことになる。間接であっても、魔女と関わりを持つことは危険である。魔女は対峙したことのない、自分と面識の無い相手に対しても、高い殺傷能力を持ち合わせる。力の強い魔女ならば、名前を知っただけの相手にも、呪いを掛けることができる。魔女に関係したり、干渉したりする行動は慎むべきであるというのが、魔女を知る者たちの前提である。

また、北野の【空読み】は、北野が唯一誇るもののない、精度の甘い能力である。一般事象の的中率ですら7割に満たない未完成の能力である。予言の対象が魔女であれば、的中率はさらに下がる。心変わりしやすい魔女に対しては、四谷に関するもののように軽々しくはできない。それは北野も承知している。

しかし西田には、北野が黒崎望の予言の依頼を引き受けるだろうという算段があった。一つはレート金額の上乗せ。魔女の予言に自信のない北野であっても、通常レートに特別報酬を上乗せすれば別である。北野はお金が好きだ。魔女の予言の的中率の低さを知りながら、増額してまで予言を欲する態度をして見せることにこそ意味があるのだ。西田がどうしても欲するので、北野は仕方なく予言を提供した、という図式が出来上がる。北野の予言が外れたとしても、北野が恥を搔く道理はなくなる。

もう一つ。北野は過去に一度、魔女の予言を行っている。人づてに聞いただけであるが、10年前に依頼された魔女の予言を、北野

が二つ返事で引き受けたことを、西田は知っていた。西田はこう考えている。北野は、魔女に対する恐怖心が薄弱である。やもすれば、北野はまじよに対して恐怖心を抱いていないのではないかと。

北野の承諾を得たことに安堵しつつ、西田は表情を変えずに湯飲みをすすった。北野は西田を見つめる。

「それにしても、ずいぶん自信があるじゃない？ 成り立てとはいえ魔女をやるだなんて、そのつもりなんですよ」

「自信だなんて、そんなことはありませんよ」

西田は湯飲みを置くと、人差し指でサングラスをぐっと引き上げた。

「内々の問題でして。ある人から魔女討伐の声が上がっているのです」

「はぁん。お守りね。分かるわぁ、大変よねえ。聞き分けのないのがいるとさ」

北野が視線を西田から四谷に移した。四谷はギョツとして目を剥き、左右の腕をブンブン振り回して抗議の声を上げた。キキキ、と北野が歯を剥き出しながら笑い声を上げる。

「んじゃあ、明日にでもメールで送つとくわ」

「助かります。承諾いただいて、ありがとうございます」

西田が椅子から立ち上がって、深く頭を下げた。四谷がそれに合

わせて、いえいえ、とお辞儀を返す。

北野は椅子に座ったまま、ごくごくと喉を鳴らしてカップの中身を飲み干した。

黒い魔女ねえ。あんなのとやり合いたいだなんて、何を考えているのかしら。ユキコちゃんのブツ飛んだ性格は知ってたけど。西田も西田だわね。あれの恐ろしさを一番良く分かっているくせにね。ちゃんと勝算あるのかなあ。ううん、確かにユキコちゃんは、強い。か。まあ、沢原圭ほどじゃないにしても。黒崎望は沢原を倒したけど、そのおかげで黒崎の武力の殆どは消滅しちゃったし。まあ、例え今も使えたとして、元々ほとんどが魔女狩りのためだけに集めた能力だから、魔女以外にはゴミほどの性能も発揮できないか。今の黒崎が相手なら、ユキコちゃんの勝ちは確実かなあ。黒崎はどうするんだろ。殺されるくらいなら、トラウマの魔女の力を使っちゃうのかな？

沢原圭。沢原圭かあ。懐かしいな。あのババア、結局半世紀も生きたのか。黒い魔女にしては長かったわね。若い頃、あいつにちょっかい出したのは、人生最大の汚点だな。あの頃のわたしったら、白馬に乗った王子様の存在を信じていたり、恋人と二人で裸足になって夕焼けの海岸線を散歩するデートを夢見たりしてたっけ。ズボンが擦れる音で、男のチンポのサイズを把握できる聴覚術を駆使することすらためらうような、母親の羊水のにおいも抜けきらない処女だったからなあ。笑っちゃうわね。いきがったウンコちゃん風情で、黒い魔女に挑んだんだから、あの失態は仕方がない。社会勉強だったってことね。

沢原圭の力は、今思い出してもブルツと来るわね。わたしの繰り出した全ての【祈り】や【加護】や【防護】や【障壁】を、障子にペニスをズブリと突っ込む気軽さでブチ抜いてきやがった。プライ

ドをあんなに傷つけられたのも、相手に恐怖を感じたのも、あの時が初めてだった。全ての能力を駆逐されて、悔しくって怖くって、泣きじゃくりながら必死で逃げたっけ。小便もらしながら全力で逃げるかよわい処女のわたしを、沢原は笑いながらゆったり追いかけてきた。「同じ魔女なんだから、仲良くしようや」なんて抜かしやがって。同じじゃねえよ、全然。クソッ。今のわたしなら、なんともしてやれるんだけどなあ。ああ、こんな量のアルコールで酔っぱらってきたのかしら。未練だなんて。いやだわ。

北野清美はガラス戸の向こうの夕暮れを見上げながら回想していた。結局、北野が割ったガラスの修繕は当日に間に合わなかった。割れた戸には、四谷紀乃が新聞紙とガムテープで目張りをした。北野は右手にマグカップを持っている。先ほどとは違い、純粹にブランデーだけが入った3杯目だ。北野は左手の人差し指をしゃぶり、唾液で充分に濡らすと、目張りの新聞紙にプスプスと穴を開け始めた。小さな穴からひゅうつ、と風の音が漏れる。

魔女には種類がある。簡単に言うと『シンデレラの魔女』と『白雪姫の魔女』だ。黒崎望は後者にあたる。人々に疎まれ、憎まれ、張り付けにされて、殺される道理だ。北野清美は前者だが、清美には人の役に立とうだなんて高尚な決意は微塵もない。ただ自分の気持ちのまま、欲のままに生きている。清美にとって魔女の称号は、自分の暮らしを充実させるための、便利な道具に過ぎない。

清美は『東方不敗の魔女』である。『東方不敗の魔女』の継続条件は名の通り『負けない』ことだ。相手の目の前から『逃げる』ことは、『負けたこと』には当てはまらない。例えその場の戦闘から逃亡しても、後からリベンジして相手を殺せば構わない。また相手の死は、清美の手に因らなくても構わない。事故や病気や寿命で死んでしまえば良いし、或いは沢原圭の例のように、清美自身ではない誰かが相手を殺してくれれば、なお良い。なにしろ相手がこの世

からいなくなれば、清美の勝ちになる。清美が死ななければ『東方不敗の魔女』は継続される。『東方不敗の魔女』にとっての『負けない』というのは『死なない』と同義である。

ただし、相手の目前から『逃げる』ことで『東方不敗の魔女』の能力には大きな制限が掛かる。幾つかの能力が使用できなくなり、使用できるものの効果も半減する。相手が生きている限り、その制限は継続する。清美は沢原が生きていた今までを、限られた能力に色々と工夫しながら、やりくりして過ごしてきた。節制は清美の最も不得意とする分野だ。能力の工面に、北野は胃に穴が開くほど苦悩してきた。沢原圭が死んだことで、能力の施行に心を砕く必要がなくなった。無尽蔵の魔女の力を取り戻せたのだ。本来の力を取り戻したことで清美は、もつともつと遊びの幅を広げられる。悩みの種を一つ解消することができた。清美は『東方不敗の魔女』を取り戻してくれた黒崎望に、ほんのちよつとだけ感謝している。

『東方不敗の魔女』は世襲制をとる。先代の魔女である清美の母親が、清美を出産したと同時に、清美に魔女が継承された。清美は北野家の24代目にあたる。北野家の女は代々から魔女であることを嫌い、隠してきた。初代から清美の母親まで、北野家の女は自分の内の魔女を1日でも早く排斥したくて仕方がなかった。『シンデレラの魔女』だとしても、そんな事柄は何の訳にも立ちやしない。魔女は魔女だ。何よりの恥じだ。それゆえに北野家の代々の女は早婚だった。或いは結婚もせずに子どもだけを孕み、自分の娘へ魔女を押し付け、魔女を捨てた。清美の母親も十代の始めに出産し、生まれた清美を友人に託してさっさと田舎へ籠ってしまった。清美は父親を知らない。母親の愛情も知らない。けれどそれらが清美の心に闇黒を生む原因になることはなかった。清美は今までの北野家の女とは違う思想を持っていた。清美にとって『東方不敗の魔女』は、自分を形作る要素の一つでしかない。別段、魔女を嫌う必要もないし、生活の邪魔になる道理もまるで感じない。魔女である前に、自

分は自分だ。『北野清美』さまだ。スヌーピーも配られたカードで勝負するしかないって言ってるしね。でも、わたしに配られたカードはどれも強烈なのよ。笠原姉妹に劣るにしたって容姿はいいし、能力だって、金だってあるし。その中でも魔女は特別。ジョーカーなんて目も当てられないほど。だけど、切り札つてのは隠しておくものだから、自分が魔女だってことは秘密にしておくの。

先代たちとは異なる理由で、清美は自分が魔女であることを隠している。知っているのは四谷紀乃だけだ。

「西田さんってカッコいいですよね」

北野清美の後ろでは、四谷紀乃がフローリングにクイックルワイパーを掛けている。四谷の格好は西田が訪問していたときと変わって、白い半袖のシャツにジャージパンツ姿だった。北野から着替えの許しをもらって、四谷は嬉々としていた。

北野は四谷の言葉に振り返らず、うつとりとした雰囲気の中、四谷の言葉を耳にしている。

「ちょいワルってやつですよ。けどしっかりしてますし、なによりいい人ですよ。いくつくらいなんでしょうか？」

「確かわたしの6つ上だって、聞いたわ」

「そっか。35歳か。円熟期の大人ですね。かっこいいなあ」

北野は四谷との会話で、自分の歳を思い出してしまったことに後悔して、舌打ちをした。北野はくると振り返って、四谷にニヤリと笑いかけた。四谷はまた、北野に酷いことをされるのではないかと心配がもたげて、表情と体をこわばらせた。

「そんなに気に入ったのなら、『食べ』ちゃえばいいじゃない。お膳立てしてあげなくもないのよ」

北野の言葉に、四谷はブンブンと首を横に振った。

「えっ。いいですよ、それは」

「なあによ。西田さんは色々持っているはずなんだから。能力だけじゃなくってテクニクだって、そりゃあすごいんだから。【空読み】だけだ」

「いいんです！ 西田さんには、そういうことしないんです！ それに……」

「あ？」

四谷は、てへへ、と照れ笑いをして頭を掻いた。北野の眉間がピクリとして、鼻の穴が大きく広がった。四谷のあの笑いかたは、北野に精神攻撃を与える前兆だ。

「新しい彼氏、できたし……。今はその、彼がいちばん大切なんです。えへっ」

ふうん。北野は再び庭のほうを向いた。ガラスに反射した四谷の姿が、えへへ、えへへっ。と、クイックルワイパーの柄を抱きしめて、体をくねくねさせている。

ギ、ギ、ギ、と北野の奥歯が魔女の咀嚼力を放つ。

「キノさん。わたしの彼氏いない歴、ご存知だったかしら？」

「え。し知りません」

四谷は知ってるけれど、嘘を吐いた。北野も四谷が嘘を吐いたのを知っている。

いない歴の最中でも、アバンチュールは何百回もあつたけれどね。と、北野は頭の中で必死に前書きしてから、怒りを押し殺した呟きを発した。

「14年。14年よ。赤ん坊が中学生になつてゐるじゃないの。なんていうことでしょう！　ところで、今回のキノさんのいない歴は、一体いかに長かったのかしら？」

「あ。は、はい。恥ずかしながら……3日です」

「ああ、そう」

北野は左脚を上げて、ぎゅっと腰をねじる。まだ中身の残っている右手のマグカップに左手を添えると、それを腰だめにする。振り返り気味の首から、肩越しに四谷の位置を捉えた。四谷がクイックルワイパーを放り投げて、回避運動に入り切る前に狙いをつけた。トルネード投法を忠実に再現した北野の、視認できない速度の腕の振りから投擲された超高速のマグカップが、空気を切り裂きながら四谷に襲いかかる。中身のブランデーごと、カップは四谷の額に的中した。およそプラスチック製だとは思えない鈍い音を立てて、カップの半分ほどが四谷の頭蓋にめり込んだ。四谷の体は後方へぐらりと崩れ、そのまま床の上に大の字を作った。白目を剥いた四谷の首が横向きにカクリと傾くと、額のカップが音を立てて床の上を転がった。リビング中をむせかえるほどの洋酒の匂いが包み込む。

「このクソブタが！ 地獄に落ちろッ！」

北野は体を戻して、ガラス戸に自分の肢体を映し眺める。左脚に重心を置き、左手を腰に当て、右手で髪をまとめるシュシュを外して放り投げた。はらりと顔に掛かった前髪を掻き上げるしぐさを、ピタリと静止させた。

……傾国の美女！

なんであんなドン臭い女がモテて、このわたしにはおこぼれすらないわけ？ ううん、そういう世間の流れなのかしら。萌えブーム？ 確かにわたしに足りないのはそれよね。美貌にプラスチックアルファの隠し味。なるほどね。だけどまあ、それにしだって、世の中の男どもは何を見てんのかしら。まったく。魔女の力でどうにかしちゃおうかな。

北野はあれこれポーズをとりながら、ぶつぶつと呟いた。

北野は四谷の気絶をそのまま放置して、自室に戻った。四谷が意識を取り戻したのは翌日の明け方のことだった。

北野清美専用の食器が残らずプラスチック製で揃えられているのは、このためである。

魔女の夜 - 4

俺、熊木譲二！ 童貞！ でも毎日一生懸命生きてるよ！

俺は路地裏でバニーガールに話を聞いてもらった。

かおりとの出会いは雨の降る夜だった。俺はバイトを終えて帰ろうとしてた。バイト先の裏口から出たところで、雨が降っていることに気がついた。屋内でのバイトだったし、気象予報に注意を払うクセもなかったから、その夜未明にかけて雨が降ることなんて知らなかった。店長の計らいで、俺はコンビで売ってるような粗末なビニール傘を手に入れた。粗末だなんて、贅沢言っちゃ叱られるな！ 俺は店長に感謝しながら、3箇所も骨が折れ、所々に穴が開いた傘を広げて、土砂降りの中を帰路に着いた。

アスファルトには水たまりが出来ていて、俺はいちいち飛び越えながら帰ってた。大きな水たまりを飛び越えそこねて、お気に入りシューズを濡らしてしまったことに舌打ちした。その時、俺のいた街路から外れた路地に黒い人影が見えたんだ。目を凝らしてみると、傘もささずに、女が座り込んでいた。それがかおりだった。かおりは泥だらけのジーンズに顔をうずめて泣いていた。

別にやましい心があったわけじゃないんだ！ ただ、なんていうか、例えばお前は、バイトの帰り道に、まあバイトでも仕事帰りでも、学校の帰りでも何でもいいんだけどさ、ふと目を横にやったら、段ボール箱に捨てられた子犬か子猫が、雨を凌ぐことも出来ずに、全身をビショビショにして、か弱い泣き声を立てていたら、見なかったことにして素通りできんのか？ 俺には出来ねえ！ かおりを見つけた時、最初に思ったのは、そういう心情だった。それにちょっと、ドラマチックじゃないの！ もし自分が逆に、か弱い女の子の立場で、同じように雨の降る路地裏に座り込んで泣いていたときに、ふと気が付くと自分に雨が当たらなくなってるんだ。顔を上げ

てみると、そこには目もくらむような男前の紳士が立っていて、彼は恩義せがましいこととか、どうしたの？ とか何にも言わずに、傘だけ置いて、自分は雨の中を濡れながら走り去っていくワケ。カッコーいいじゃん？ 惚れるでしょ？ 胸キュンでしょ？ ドラマでしょ！ 俺は人生にドラマを求めているんだ！

という心の台本を読みながら、俺はうずくまっていたかおりに傘を差し出して、雨を遮った。かおりは自分に冷たい雨が降ってこなくなっただけにすぐ気が付いて、泣き顔を俺に向けた！ かわいい！ って思った俺は。でも、俺の台本はここで彼女と親睦を深めるストーリーじゃなかったからさ。後日また偶然出会って、そこからスタートする話の筋だったし。俺はかおりにニッコリと、出来る限り男前になる笑顔をして、傘の柄を差し出した。かおりが傘の柄を掴んだら、俺は全力で走り去る予定だった。

でも実際には違ったんだ。かおりは立ち上がって、親の敵みたいにな俺を睨んできたわけ。アレッ？ それは俺の台本にないんだけど。っていうんで、リテイクを申し込もうとした俺の頬に、かおりの濡れた右手がバチンと叩きつけられた。痛い、って思うよりも先に、いや実際は火が出るくらいに痛かったんだけどさ！ そうなだけどもさ。えっ、なんで？ って思った。俺の台本には書いてなかったからさ。

「放っておいてよ！」

かおりは俺を怒鳴りつけて、また泣き出した。ポロポロと、涙を流した。でも本当に涙が流れていたのかは、かおりの顔中が雨で濡れていたから分からなかったんだけどね。俺の心情的に、そうしておいた話だ。

それにしても、放っておいて！ って言うくせ、俺にビンタするのはおかしくね？ 本当に心から放って欲しいと思うんならさ、俺が差し出した傘を受け取ろうともせず、また顔を膝にうずめて、

しくしく泣くのが、台本通りでしょ！　なんでビンタして、放っておけない話の筋に持って行っちゃうのよ。俺の台本に、ないよ？　そんなの全然書いてないんだけど。

俺は姉貴を思い出した。俺には姉貴が一人いるんだが、面倒くせえ女だ。社会人なんだけど、職場で嫌なことがあると、帰ってきてから俺に絡んでくるわけ。でも自分からは職場であつた嫌なことは話そうとしないんだ。姉貴は俺の口から出てくる「なんかあつたの？」っていう言葉を待っていて、それが出てきた途端に、鬱憤を晴らす勢いで、当日にあつた不愉快な出来事をまくしたててくる。マシガンみてえな勢いでな！　俺が不愉快になるっつーの！　俺はうんざりしながら、いつも生返事で聞き流す。それを悟ると姉貴はしかめっ面して「ちよつとあんた、本当に聞いているの？」って言いながら、握りこんだ拳の人差し指と中指の第二関節を突き出した打撃で、俺の脇腹を殴ってくるんだ。これがマジで痛えからシヤレにならねえ！　しかも俺がちゃんと話を聞いてやるまで、殴るのをやめないんだぜ！　ウゼエ！　本当に放っておいて欲しいときは、姉貴は自室に閉じこもって出てこないからね。かおりの雰囲気、俺の姉貴と同じのを感じて、俺は面倒くせえ台本を引いちまったなあ、とちよつと後悔してしまつたよ。

イケメンの連れなら、ここでおりの肩でも抱いて「もちろん放っておけるわけないよ。それじゃあ雨の当たらない、どこか暖かい所で休もうか」なんつって、自室かラブホに連れ込むんだろうけど。童貞の俺にそんな思考は全然、思いも付かなかつたんだ。とりあえず雨だけでも凌ごうと、ごねながらも素直に付いてくるかおりの手を引いて、近くにあつた24時間営業の牛丼屋に入った。なんで牛丼屋だつたかって言うと、俺が単純に牛丼屋しか知らなかつたからだ！

テーブル席に座って、腹が減っているわけでもなかつたけど、なんにも頼まないのはさすがに店に悪いし、人としておかしいじゃない？　喫茶店だつてそんなことしないでしょ。客も俺達だけだつた

しね。俺は牛丼を頼んで、かおりは何も言わないので、彼女には牛皿を頼んでやった。

牛丼が出てくるまでの短い時間で、俺は畳んだビニール傘の雨粒を数えていた。なにしゃべっていいか分かんなかったし。向かいに座ったかおりも、なんにもしゃべらない。なんだよこれ……。どうなったんの？ 俺の台本はどこを間違えていたんだろうかと、必死に考えてみたけど、分からなかった。そもそも俺の台本と、かおりの台本は、バージョンが致命的に掛け離れているみたいだった。そのうち牛丼と牛皿が出てきた。腹は減っていないけど、とりあえず目の前の牛丼に七味唐辛子と紅しょうがを山盛りにして、一口含んだ。すると、かおりが口を開けた。牛皿を食べるためじゃない。俺が何を聞いたわけでもないのに、自分の事を話し始めた。

彼女はこの街の、あるチームに所属していた。聞いたことのないチームだった。そこで彼女は回復役をやっていた。回復役ってのは、例えばチームのメンバーが戦闘をして、怪我をしたときに、その怪我を直してやる役割だ。

かおりの回復能力は、「ヘル」だ。ヘルってのは地獄のことだ。なんでそういう名前なのか俺は知らない。きっと初めてヘルになった奴が、自分をヘルと呼んで！ とでも宣言したんだろう。ヘルってのは、自分の血液を消費して相手の傷を癒す能力者のことをいうんだよ。

かおりには付き合っていた彼がいて、彼女はそいつに誘われてチームに入った。何で拒まなかったのか聞いたら、なんか簡単なサークルみたいを考えてたんだってさ！ へえー、そっかあ！ って言うておいた。なんて答えていいか分かんなかったしな。そんのかおりは、チームでヘルとしての役割を担わされた。かおりにはそれが、苦痛だったようだ。

「手のひらを切り裂いて、それを腸のはみ出た所に、突っ込まされたのよ。ひどい。あんなこと、普通にできると思うの？ あんたや

ったことがある！？ あんな、あんなのって、ひどい」

と、かおりはまた泣き出した。言われてから気がついたんだが、かおりの左手が包帯でぐるぐる巻きになってた。雨でびしょびしょだったけど。

俺はその時には既にテッローさんのチームに所属していて、彼女がショックを受けるような凄惨な場面にも何度か出くわしたことがあった。俺は、残念なことに、それにすっかり慣れちまっていたから、かおりが泣くほど参っている心情を、半分も理解してやれなかった。ただそれでかおりを突き放すのは、可哀想だったから、俺は初めて戦闘をしたときに、俺のチームメンバーがマネキンみたいにバラバラにした相手の姿を記憶から引き出して、

「まあ、確かにそりゃ気持ち悪いよね……」

と、出来る限りめいっぱいかおりに同期させた心情で、言った。話の途中で牛井と牛皿は完食したけど！ 飯を残すなって、俺んちの家訓だしね

会話らしい会話はそれだけで、あとはグズグズ泣いてばかりのかおりと、空になった牛井と牛皿の容器と、店員のあくびだけが、店内にある光景だった。腕時計を見ると、もう3時を回っていた。俺の家は歩いてでも帰れる。ちょっと時間は掛かるけどね。かおりに帰れるの？ 大丈夫なの？ って聞いた。ここでもイケメンの連れなら「もう終電もないし、仕方ないなあ」とでも言って、かおりを自宅からラブホに連れ出すんだろうけど。俺は童貞だったから気が回らなかった。かおりは大丈夫、家は近いって言って鼻をすすりながら立ち上がった。女の子一人じゃ危ないし、送っていくね！ と、俺は勘定をして、なんか普通に待っていてくれたかおりと連れ立って牛井屋を後にした。

雨は土砂降りからちよつと弱くなってたけど、相変わらず降って

いた。俺は女の子と初めて相合傘をしたっていうのに、ちっともときめかなかった！ もっと心がワクワクするようなイベントだと思っ
ていたんだけどなあ。心の中で落胆しながら、もう充分に全身を濡ら
していたかおりに、それでも雨が掛からないように、小さなビニール傘を彼女のほうへ寄せた。

かおりは小さなアパートの二階の角部屋に住んでいた。角部屋って、いいよね！ って、いつも言うんだけど、さすがに雰囲気的に言えるもんじゃなかった。彼女は自室の扉の前で俺に向き直ると「ありがとう」と鼻声で言った。なんのありがとうなのかなあ。童貞の俺には分からなかった。

「俺、熊木譲二。きみは？」

台本みたいな台詞だったけど、もちろん俺の台本にはそれしか書いていないので、その通りに言うしかなかった。かおりは答えてくれた。

「曽根かおり」

そうだ！ あぶねえ、ここでメアドとケータイ番号を交換しとかなくっちゃ、この先の話が進んでいかないぜ！ 俺はジーパンのポケットから携帯を取り出そうとした。

だけど雨で濡れたジーパンのポケットは固く締まっていて、俺の指を頑なに拒むんだ！ 俺が両手を使って必死になっていた最中にかおりは自室の扉を開けると、何も言わずに扉を締めて、鍵まで掛けた！

「あ、ああ……がぁ……あ……」

俺はドラゴンボールみたいな呻き声を発して、その場に立ち尽く

した！

俺が星野哲郎である、愛すべきテツローさんと出会ったのは今から2年も前のことだ。実は俺の方が1つ年上なんだぜ！ でもテツローさんの雰囲気とカリスマ性に、俺は哲郎さんをテツローさんと呼んで慕っているんだ。テツローさんはそんな俺を、たまに睨みつけたりしてくるけども！ 内心は快く側に置いてくれているんじゃないかって、勝手に俺は思っている！ なにしるチーム内で、俺ほどテツローさんの心情を理解出来ている人間は、そうだな、サナさんを置いてほかに、いないんじゃないかって思うぜ！

サナさんっていうのは、古賀早苗って本名で、テツローさんのハトコで恋人だ。テツローさんは、照れ隠しなのか何なのか、童貞の俺には分からないんだが、サナさんとの仲を指摘されると、不機嫌そうにして、必ず「早苗は恋人じゃない」って言うんだ。でも、間違いない！ だって恋人以外にチューしないでしょ！ 俺のイケメンの連れみたいに女の友達が何百人もいる奴だったら、話は違うと思うけどね。

けどまあ、【夜の帝王】の異名を持つテツローさんには、浮いた話が山のようにあるけどな！ 例えばサナさんの双子の妹に、カナさんってのがいるんだけど、彼女と一緒にお風呂に入って、手ずからオッパイを洗ってあげたりなんかしてたんだけど。きつと童貞の俺には分からない、そりやなにか深い深い深い事情があつてのことなんだろうさ！ あと色んな女が泣きながらテツローさんに抱きついたりしている光景を見たこともあったが、そりやなにか俺の目にゴミでも飛び込んできた上での錯覚だったんだろうさ！ なんで俺がそんな事まで知ってるのかって、それは後で説明するよ！

まあ色恋沙汰には事欠かないみたいだなテツローさんだけど、でも本当は違うんだ！ テツローさんは、恋人のサナさんを裏切って他の女にうつつを抜かすような、そんな不誠実な男じゃねえんだ！

俺には判る！ 何となく、そう思う！ たぶん！ とにかく！ 俺はテツローさんの恋人であるサナさんの次点で、テツローさんのことを深く理解している人間なんだ！ テツローさんが愛煙しているH O P Eの本数を間違いない数えて、新しいキャラクターボックスを差し出すタイミングだって、火を点けるタイミングだって、バツチりだしな！

テツローさんが戦闘をする時は、俺はどんなことがあっても付いていく。バイトだって構やしねえ、仮病で休んでも付いて行くぜ。テツローさんが戦闘をする時は、主に夜だ。まあ昼も十分強いんだけどさ。これも【夜の帝王】の異名を取る、深い事情があるんだろうけど、俺には細かいことは分らない。それっぽそうなの1つの理由は知ってる。テツローさんは夜の闇を操るんだ。闇をいろんな形に変えたり、目に見えなくなったり、感じさせなくなったり、とにかくテツローさんは、闇の力で相手を翻弄する。

俺がまだテツローさんと話もしたことのない、初めて合ったときのことだ。テツローさんと対峙したのは、白騎士だった。白騎士ってのは体中がピカピカに光って、夜だつてのにそいつの周りだけは昼間みたいな明るさなんだ。闇を寄せ付けない能力を相手にして、テツローさんはただ口元のH O P Eを吸い込んで、赤い光を灯すだけだった。俺は、テツローさんが諦めたんだとばかり思っていた。でも違った。テツローさんから何の呪文もしぐさもなく、突然白騎士は口から黒い液体をドボウツと吐き出して、光を失っちゃった！ スゲー！ 見ていた俺は思わず声を上げた！ 次の日に俺はテツローさんのチーム入りを許されるなり、早速テツローさんに聞いた。昨日のあれはなんなんスカ！ どうやったんですか！ って聞いたら、テツローさんはいつもみたいに、普通の表情で「別に。白騎士の能力を反故にさせたただけだ」って煙草を吸うだけだった。カッコいい！ 俺がもし女だったら、迷わずにテツローさんへヴァージンを捧げているところだっただろうよ！ テツローさんの横顔は、そ

りや端正で眩しかった！

そんな端正なテツローさんの横顔が、一度だけ崩れたことがある。表情じゃなくて、物理的に、そりやもうテツローさんの男前が目も当てられないほど、グズグズにされた事があった。

ある時、チームメンバーのケータイに『果たし状』っていう題のメールが届いた。果たし状って！ 江戸時代！ 時空を超えたメールが届いた！ ってんで、チームのみんなで爆笑した。メールの本文を読むと、日時と場所の指定があつて、果たし状の相手には、ケータイの持ち主ではなくテツローさんを指定していたんだ。それを見て、みんな黙り込んでしまった。

テツローさんは果たし状の受信と内容を知るなり、

「俺に突きつけられた勝負なんだから、俺が一人で行くのが筋だ」

って言った。みんなは止めたけど、テツローさんは一度言ったことを撤回しない頑固者なんだ。みんなの反対を押し切って、一人で指定の場所へ向かってしまった。俺は不安を感じて、こそこそと後を付けた。

チームのみんなは「テツローさんなら大丈夫」って安心しきっていた。だが、俺は不安だった。なぜかって、チーム同士の戦闘はゲリラ戦が普通だからね。戦争状態に入ったチーム員同士が、街中でもどこでも何でも、とにかく出会ったら戦闘が始まる。その場が『決戦のバトルフィールド』になるって寸法だ。ゲリラ戦以外には、相手のホームに直接乗り込んでの襲撃か、そのくらいしかないんだ。日時と場所まで指定して、相手呼び出して戦闘するだなんて、考えられなかったよ。だって呼び出す側が断然有利じゃんか。罠も仕掛けたい放題だしね。だからそんなの誰も考えなかったし、普通は相手にしないもんなんだ。仕掛けたほうもさ、そんなので勝ちが

付いても、他から良い評判は付かないんだし、そのへんの体面を気にするでしょ、普通は。なのにテツローさんは行っちゃった。しかもテツローさんが闇の力を充分に発揮できない、昼間の戦闘だよ。そりゃあんだ、心配になつて見に行くしかないでしょ。テツローさんの腹心としてはさ。

テツローさんが向かったのは市営公園の芝の上だった。テツローさんの周りにはなんにもない。テツローさんは突っ立ったまま、普段みたい体にどこにも力を入れない、だらりとした構えだった。時間も気にせず相手の到着を待っていた。

俺はテツローさんから30メートルくらい離れた背の低い木に体を小さくして隠れてた。アベリアって書かれた木の看板が刺さってた。アベリア！　かわいい名前だな！　ツレか誰かが側にいたら間違いないそう言ってたんだが、誰もいないんで心のなかで言っておいた。果たし状の時間まで、まだ少し余裕があつたんで、俺は公園をざっと見回してみた。芝の上にはテツローさんの他に人影はない。芝の向こうには背の高い緑色のフェンスが建っていて、その先は野球場の茶色いダイヤモンドになつた。数人の小学生がサッカーボールを蹴っていた。俺の後ろは公園だ。ベンチと小さいブランコと滑り台くらいしかない。滑り台でお母さんと女の子が遊んでいた。ベンチには仕事をサボっているみたいなりーサラの20代後半くらいの背広がスポーツ紙を読んでいた。

この中に敵がいるかもしれないね……。俺は緊張した。能力なんて、誰が持つてもおかしくないからね。俺が今までで一番びっくりした能力者は、70過ぎくらいの、年金受給者だろうと見ただけで判るようなばあさんだった。俺のばあちゃんくらいの歳をしたそいつは、テツローさんと同じような闇使いだった。ばあさんは自分の足元の影から、50センチくらいの三日月型のカッターを出現させて、すげえ早さでじゃんじゃん飛ばしてくる能力者だったよ。切れ味はとんでもなかった！　近くの家の子の壁のコンクリとか、道路標

識の金属なんかを、トーフみたいにスッパスッパ斬ってたからね。ばあさんの攻撃のとばっちりを受けて、俺のお気に入りウールジヤケットの裾も斬られちゃったぜ！ ジャケットの斬られかたがなんだかカツコいいんで、まだ愛用してるけどね！

でも、切れ味鋭いばあさんの闇力ツターも、テツローさんに掛かりやなんでもなかった。闇力ツターはテツローさんの体に触れるなり、テツローさんの体にスイスイと吸い込まれてった。テツローさんは、ばあさんが連射するカッターを吸い取りながら、スタスタとばあさんの目の前まで歩いていった。遠目でもキョドって見えたばあさんの顔を両手で掴むと、テツローさんは、ばあさんの口を大きく押し広げた。テツローさんは、ばあさんの口に自分の口を近づけて、「チューするの！？」って俺が思わず叫んだと同時に、ばあさんの口から数センチ離れた所から、ふおおおーって息を吸い込んだ。そしたらばあさんの口から真つ黒い煙がどんどん出てきたんだが、テツローさんはそれを全部吸い込み続けた。吸い込み続けるテツローさんの背中が3倍くらいに膨らんで、俺は破裂するかと思つてヒヤヒヤしてた。テツローさんは煙を吸い切ると、一度大きな咳をしてから、ベツと親指の先くらいの黒い塊を吐き出した。同時にテツローさんの背中がぎゅっと縮んで元に戻った。ばあさんの顔から手を離れたテツローさんが、指をバチンと弾いたら、黒い塊が内側からポンと破裂して消えた。テツローさんはばあさんの肩をポンポンと叩いて、ばあさんになにか二言三言呟いた。ばあさんはその場にへたり込んでしまった。それでテツローさんとはあさんの戦闘は終わった。

俺は後でテツローさんに、一体アレはなんなんスカ！ ばあさんになに言ったんスカ！ 念仏ですか！ って聞いたたら「孫の敵討ちだ。だけど人違いだ。俺が代わりにやってやるから、静かに余生を暮らせて伝えた」って、いつもみたいに真顔で煙草をふかしてた。すげえ、さすが夜の帝王！ 俺が叫んだら、テツローさんは不機嫌そうに睨んできたから、俺は黙り込んだ。テツローさんが言葉

通りにはあさんの敵討ちをしたのかどうか、俺は知らないけど、きつともうやったんじゃないかな。テッローさんはたまに、誰にも連絡を取れなくして、どこかにいなくなることもあるからね。

話がテッローさんとばあさんの思い出に逸れちまったが、そんなわけで、敵がどんなナリをしているのかなんて全然分かんねえんだ。もしかしたら野球場でサッカーしてるガキ共が敵かもしれない。約束の時間が過ぎたら、ガキ共が突然ものすごいチームワークでテッローさんに襲いかかってくるかも分からねーし。滑り台で団らんしている親子が、突然まばゆい光を帯びながら合体して、身長3メートルを超える大男に変化しながらテッローさんに突っ込んでいくかも分からねーし。顔を隠してスポーツ紙を読んでるリーサラが、突然口からビームを吐いてくるかも分からないんだ！俺は腕時計を見た。メールにあった指定時間の30秒前になってた。俺はテッローさんに目を向け直した。

戦闘は10秒くらいで終わっただと思うよ。俺はまばたきをしなかった。約束の時間になると、市営公園の時計がベルを鳴らした。瞬間、俺の視界のテッローさんがゆらっと揺れた。でもテッローさんの体じゃなくて、テッローさんの周りの空気が、夏のアスファルトの熱を受けたみたいに揺らいだんだ。上半身がぐにやっと歪んですぐに、テッローさんのほんの鼻先の距離で、火花が散った。ドスン！って、鼓膜が破れるかと思ったほどの、でかい花火に似た爆音が響いて、テッローさんの顔面で光が飛び跳ねた。光と一緒に、幾つかの破片がテッローさんから飛び散った。テッローさんの肩から上は、爆発後の白い煙で包まれて、俺の位置からは見えなくなった。テッローさんの体は爆発の衝撃で後ろに仰け反った。けど、テッローさんは左脚を一步だけ下げて、その足を突つかえにして、転倒するのを拒んだ。

そしたら急にテッローさんの体から、シャボン玉っていうか、かろうじて目に見える透明の膜が出てきてテッローさんを包んだ。でもシャボン玉と違うのは、光に照らされた表面が虹色じゃなくて、

灰色っていうかそんなだった。シャボン玉はバビュンって勢いで膨らんで、ドーム状に大きく大きく広がった。灰色の膜がたちまち俺の目前まで迫って、かと思ったら俺を通り抜けてった。

シャボン玉が俺を抜けていったのとほぼ同時に、テツローさんの足元から30センチくらいの幅の、黒い帯がザザーッと俺の5メートルほど横を通りすぎて、1秒もしないうちにまたザザーッと縮んで、テツローさんの足元まで戻っていった。なんていうか、ちよつと高級な着物屋さんが常連の目の前で、着物の生地のをるぺろーって床に転がす所とか、テレビで見たことない？ あんな感じ。あれの超高速版みたいな。そしたら俺の後ろで男の悲鳴が聞こえた。振り返ってみるとベンチで新聞を読んでいたリーサラの男が、ベンチから崩れ落ちていた。リーサラが相手だったのか！ リーサラはきつとテツローさんの黒い着物にやられたんだろうけど、なにをどうやられたのかよく分かんなかった。そんなことよりも、俺はテツローさんのことが心配だった！ アベリアを飛び越えて、テツローさんに駆け寄った！

駆け寄りながらもテツローさんから視線を離さなかった。風に流されはじめた煙から出てきたテツローさんの姿に、俺は背筋がぞつとなったよ。前に回りこんで確かめたテツローさんの顔面は、ドク口！ って思わず叫びそうな姿になってた！ 顔と胸あたりの皮膚と筋肉が、爆発の衝撃で飛んで無くなってた！ 右目も無くなってた！

「てっ、てっ、てっ」

テツローさんの名前を呼ぼうとしたんだが、動揺した俺の口は震えて動かなかった。テツローさんは残った左目で俺を見た。俺を見ながらテツローさんは、ポケットからジッポとH O P Eを出してきた。こんなときにも喫煙ですか！ 危機感ないんっすか！ だけど、テツローさんの唇は吹っ飛んで前歯しかなかったから、煙草を吹か

すことが出来なかった。俺は震える手でテッローさんの前歯からH O P Eを取り上げ、ジッポの火をもらって煙を吹かしてやった。火の点った煙草を再びテッローさんの前歯にかじらせた。でも吹かせないんだから吸うことも出来ないって、遅まきに気が付いたけどな！

テッローさんは喋らなかった。喋れなかったんだ、喉まわりの皮膚が裂けて、テッローさんが呼吸をするたびに赤黒いドロドロが出てきた。

もしかしたら俺のほうがフラフラしていたのかもしれないが、俺は日付の変わった場末の赤提灯から出てきたオッサンみたいにフラフラしてるテッローさんの肩を担いで、公園を沿う幹線道路に向かって歩いた。テッローさんを引きずっていく最中に、俺は宇野さんに電話をかけた。宇野さんは昔からテッローさんのチームに所属していて、テッローさんの次に頼りになる兄貴分だ。テッローさんと違って歳も俺より上。ちよっとした戦闘狂の変態だけだな。

『どうしたジョージ。いきなりいなくなって、どこにいる？』

「てっテッローさんが、ドクロみたいになっちまった！ 顔の皮が全部、剥げちゃった！ それに、右目が、ないんだ」

『落ち着け。敵はどうした。哲郎はまだ生きてるんだよな？』

「生きてるよ！ 敵はテッローさんがブツ飛ばした！」

『そうこなくっちゃ！ 顔がブツ飛んだくらいで死ぬようなリーダーじゃ、目も当てられねえよなあ！ それで今、どこだ？』

「果たし状のお、メールにあった公園だよっ！」

『分かった。すぐに行く。ツテのある回復屋を連れて行く。それま

で持たせる』

俺達のチームには回復役がない。ちょっと前まではいたんだが、下手なことをやって公安に捕まっちゃった。

俺は宇野さんの『回復役』という言葉聞いて、心当たりを思い出した。かおりのことだ。

「おつ俺、アテがあるよ、回復屋の！　そこに、行ってみる」

かおりが自宅に居るかどうかも分かんないし、彼女がテツローさんを治してくれるか分かんないけど。俺はかおりにすごることしか思いつかなかった。

『分かった。俺もそこに行く。住所は？』

「じゅつ、住所は分からねえ。場所は知ってる！」

『使えねえな、バカ。大まかな場所だけでいい、近所に着いたら連絡する。あと時間差で追撃ってこともなくはないからな、周りに気をつけるよ。頼んだぞ。哲郎を死なすなよ』

携帯を切って幹線道路へ出ると、見計らったタイミングでタクシィが来た。止まったタクシィの扉が開いてから俺は、もしかしたらコレもテツローさんを狙ってる奴らの罠かもしれない……と思うたが、構いやしねえ！　狭い車内で戦闘になったって、どんな敵が攻撃を仕掛けてきたって、テツローさんをこの身一つで守りぬいてやるんだ！　と、心に決めて乗り込んだ。幸いなことに、タクシィはホントに偶然通りかかっただけの、フツのやつだった。俺は勿体ないけどオジサンに万札を突きつけて、全速で目的地まで向かってくれと頼んだ。

オジサンはミラー越しに俺達を見て無関心をしきりに装いながらも、グズグズに崩れたテツローさんの顔面をチラチラと伺っていた。もしも騒ぎになるといけないって思ったんで、俺は脱いだ上着をテツローさんの頭の上からかぶせていたんだが。上着の隙間からテツローさんのひどい顔面が見えたんだろ。

「そっちのお兄さん、なんだかすごいケガをしてるみたいけど、大丈夫？ 病院に行かなくても……」

「だつ大丈夫だ！ これは、ケガじゃねえ！ その、特殊メイクだ！ 撮影用のな！」

「ああ！ なんだ、なるほどね！ そういうことですか！」

俺の言葉をオジサンは心底信じてくれたようだった。なんつー単純なオッサンだ、と思いながらも俺は安堵した。俺は黙っているのが不安だったし、オジサンに疑惑を持たれることを避けるために、テキトーな言葉をべらべら喋った。

「すげえだろ！ 本物みたいで！ 俺が2時間掛けてメイクしたんだ！ 俺達はその……自主制作の映画を撮ってるんだ、大学の学祭で発表するやつをな！ さっきまで公園で撮影してたんだ」

「はああ、自主作成の映画をねえ。すごいねえ、本物みたいなメイクじゃないですか！」

「そ。そうだろ！ 俺も会心の出来だと思ってるよ。実は俺、ハリウッドからお呼びが掛かってるんだぜ！ 特殊メイクが有名なホラー映画の、あの、アレの監督とかからなっ！ 学校を卒業したら渡米する予定なんだ」

「あー、なるほどねえ！ 確かにその腕だったら、ハリウッドから誘いが来てもおかしくないでしょうね！ 本物みたいにすごいメイクですからねえ！」

「だろ？ だけど俺はずっと向こうにいるつもりはないんだ。5年か、長くて10年つてところだな！ 向こうの技術を学んだら、絶対帰ってくるつもりだ。やっぱり日本人は、日本で活躍しないとな！」

「はあ、立派ですねえ！ 最近は野球もサッカーもすぐに海外ですからねえ。向こうのレベルが高いのは分かりますが、なんか寂しいですよねえ」

俺とオジサンが会話している途中で、時たま隣のテツローさんの喉がゴボゴボツて、藻で覆い隠された水槽から気泡が湧くようなヌメった音を立てた。後からテツローさんから直接聞いたんだが、「お前の言うことがあんまりデタラメなんで、つい笑っちゃったんだ」だって、言われちゃった。

かおりのアパートの前で降りて、俺はテツローさんを担いで階段を上がった。角部屋の前でテツローさんを落下防止の柵に寄り掛かせると、俺はかおりの部屋の呼び鈴ボタンを押し込んだ。立っていられなくなったのか、俺の後ろのテツローさんが柵に背中を押し付けて、ズルズルと倒れていった。俺は祈る気持ちで、もう一度ボタンを押した。同時に扉が開いて、隙間からかおりが現れた。俺にはかおりが女神様に見えた！

「何？ なんの用？」

「頼む！ ケガを治してくれ！」

「はぁ？ ひっ！」

かおりの顔が引きつった。彼女の視線は俺ではなく、俺の肩越しにテッローさんを見つけたんだ。途端に俺の言葉を察して、かおりはギツと食い縛った歯を剥き出して、俺を睨みつけてきた。

そりゃそうだ。俺はかおりが自分の能力を疎ましく思ってることも、それを絶対に使いたくないってことも知っている。俺がかおりの心情を知ってながら、それを裏切って治療を頼みに、ここに現れたことに腹を立てているんだ。それなのに俺は、かおりの心よりもテッローさんを優先させている。かおりの気持ちを知っているのに、関わらずに、だ！ ふざけんなって感じだよな。俺は自分が、かおりにどんなにひどいことをしているのかも分かっていた。だけど俺やかおりのことはどうでもいいって思った。テッローさんの傷を癒すには、かおりの力が必要なんだ。

俺はかおりが閉めようとした扉に体を滑り込ませた。かおりは思いつきり扉を閉めようとしていたから、扉と壁に体を挟まれて、びつくりするくらい痛かった！

「ちよっ、やめてよっ！ 出てって！ 帰ってよ！」

「お願いだ！ お願いだから、傷を治してくれ！」

「ふざけるな！ 帰れっ！ 痛っいつ、ちよっと！」

俺は左手でかおりを強引にドアノブから引き離し、扉を全開にした。かおりの手をそのまま握りしめて、後ずさるかおりが部屋の中まで逃げてしまわないように、力づくで引き寄せた。かおりは俺に掴まれている反対の手で、俺の腕に爪を立ててきた。俺はそっちの

手も捕まえ、かおりを完全に拘束した。かおりの細い肩が、もぎ取れちまうんじゃないかってくらいこわばって、俺から必死で逃げようとした。俺はかおりを玄関から扉の外に引っ張り出した。裸足のまま、かおりが外に飛び出してきた。

「頼むから、この人を、治してくれないか」

「最ッ低……。なんなのよ、あんた。ふざけないでよ！ わたし、あんたに話したはずだよ。わたしが、どれだけ嫌な思いをしたのか。話したよね？ それなのに、知ってるのに、こんなこと押し付けてきやがって！」

「分かってる。本当に、悪いと思ってる。だけど君しか、頼る人がいないんだ」

「クソが……。自分の都合ばかり押し付けてきやがって……。お前もあいつらと同じなんだ！ ちくしょう、死ね！」

「おうふっ！」

ズドン！ と、かおりが俺の金玉を蹴り上げた！

俺の視界が一瞬ピカツとホワイトアウトし、俺にだけ聞こえる落雷に似た地鳴りの効果音が響きわたり、金玉から発生した強烈な電撃が俺の全身を駆け上がった！ 俺の頭頂部からは電撃で焼け焦げた脳みそが飛び出し、両方の目玉はバネ仕掛けのオモチャのように飛び出し、口からは五臓六腑がゲロリと飛び出した！

俺は床に膝をつきかけたが、根性で回避した！ 俺の膝が折れたことで、ちょうど俺とかおりの目線が同じ高さになった。見計らったかおりが、俺の鼻っ柱に頭突きを繰り出してきた！ グジツと喉の奥のほうで変な音がして、ガキの頃にプールで溺れたときみたい

な息苦しさが鼻の氣道を塞いだと思ったら、目で見なくてもそれだと判る勢いに、両方の鼻の穴から血が吹き出した。俺は堪らず目を閉じた。洪水のような涙が無理矢理にまぶたを押し広げて、ドバツと流れ出てきた。

すげえ女だ！俺は場違いにそんなことを考えていたよ。うっかり後ろのテツローさんに振り返って「この女をチームに入れましよう！即戦力ツスよ！」と言おうとさえ思った！マジで！

俺はかおりの攻撃を全て根性でカバーした。テツローさんの傷に比べりゃ、屁でもねえ！自分に言い聞かせて耐えた！

腕力に自信のある俺は、左手でかおりの両腕をまとめ、かおりの下腹部に押し込んで自由を奪った。閉じた部屋の扉にかおりの背中を押し付けて、また金的を喰らっては堪らないので、左脚をかおりの太ももにぴったりと付けて動きを奪った。左肩をかおりの胸骨に押し付け、かおりの背後の扉と併せて挟み込んだ。「うつつ」とかおりが呻いた。俺はかおりが、かわいそうになった。突然変な男が押し掛けてきて、こんなことされちゃ、俺だったら周囲の住人が110番を迷わずダイヤルするような大声で泣き出しちゃうよ。でもかおりは泣いてなかった。俺の潤んだ視界のなかで、彼女は相変わらず俺を睨みつけている。スゲエなあ。この氣迫！やっぱり、こいつは即戦力だよ！

俺は心の台本を引っ張り出して、もの凄い勢いでページをめくった。かおりを何とか説得して、テツローさんの傷を治療させるようなセリフを探して必死になった。だけど俺の台本に、こんな場面はない！台本を放り投げた俺は、自前でセリフを考えたが、何にも思いつかなかった。俺は自分のIQの低さを呪った！

「ちくしょう！呪われる！女にこんなことしやがって、お前ら二人とも、呪ってやる！」

かおりも俺を呪ってくれた！ありがとう！だが、二人ともっ

てのはいただけねえ、呪うのは俺だけにしておけっ！

俺は右手に【黄金のナイフ】を召喚した。俺の能力だ。そいつを俺とかおりの目の前に突き出した。さすがのこともあり、これには目の色を変えた。

だがナイフを出したのは、かおりを脅すためでも、刺すためでもない。俺は自分の首にナイフを当てた。俺のナイフは切れ味だけは抜群だ！ そつと首筋に当てただけなのに、持ち主の俺だっていうのに、ナイフは刃が皮膚に触れたことを瞬時に感知して、喜び勇んで裂いてきやがった！ バカ！ 早えよバカ！ ナイフには鍰がななんだ、滴ってきた俺の血が、柄を握りしめた指の上に早速流れてきた！

「俺はこれから、死ぬ！」

「はあ！？」

「俺は死ぬ。だけどテツローさんは死なねえ！ お前がテツローさんを治すからだ！ テツローさんのためなら俺は死んだって構わねえ！ だからテツローさんを、治せ！」

いくら俺んちの猫でもこんな台本は書かねえ！ でも俺の脳みそは猫どころか、昆虫よりも少ないんだ！ これしか思いつかなかつた！ 許してくれ！

かおりは俺につばを吐いた。

「勝手に死ぬ！」

「あああ、勝手に死ぬよ！ だけどテツローさんのことは、頼んだぜ……。俺と引き換えた。地獄から見張ってるからな！」

俺は自分の口から出た地獄って言葉に、突然怖くなった！ 本当
にこの台本で良かったのか……。分からねえ。死ぬとどうなるんだ
？ 首に当てたナイフを思いっきり引いたら、俺はどうなるんだ？
怖え！ 今さら全身からどつと汗が吹き出してきた。

だけど一度吐いた言葉を口の中に押し込んで、嘘でーす！ って
言うのは、ちよつと、なあ……。さすがにカッコ悪い。カッコ悪い
なんてもんじゃない。そんな奴はウンコだ。いや、ウンコのほうが
2倍はましだ。でも、もう言っちゃったしな……。ううん。どうし
よう。童貞のまま、死ぬのも嫌だな……。勢いって、怖いな。突拍
子もないこと言っちゃうんだもん……。。

「ふざけんな、バカッ！」

無意識に、俺は自分で自分を叱りつけてた！ かおりは自分に向
けられた言葉だと思ったのか、少しびっくりした表情を見せた。

俺は、俺自身の言葉で目を覚ました。カッと目を見開き、その決
意で首のナイフを思い切り振った！

首筋から勢い良く血が吹き出し、目の前のかおりが真っ赤に染ま
った！

「……あれっ？」

というのは、俺の錯覚だった。俺の右手は確かに右の首筋から移
動して、左肩のあたりにあった。俺は右手の中にあつたナイフの感
触が消えていることに、しばらく気が付かなかった。

「ひっ」

かおりが息を飲んだ。彼女の視線は、俺じゃなくて、俺のすぐ横
を向いている。そっちに首を向けると、目の前にドクロが立ってい

た。ドクロの左目の中には、俺とかおりが並んで映っていた。ドクロは自分の右手をぐいっと持ち上げると、俺の顔面に叩きつけてきた。かおりの金的や頭突きに比べれば、蚊の止まったような威力だったけど、俺の体はなぜか大きく跳ね上がった。かおりを掴んでいた左手が離れ、俺は床に倒れこんだ。

倒れこんだまま、俺はテッローさんを見上げた。テッローさんは肩を震わせて、ゆっくりと大きく息をしていた。相変わらず喉からは黒い血が出ていた。テッローさんの左手には、どうやって奪ったのか見当も付かないが、俺のナイフが握られていた。テッローさんはナイフを足元に捨てた。ナイフは床のコンクリに、音も立てず半分ほど突き刺さった。テッローさんは俺たちにくるりと背を向けて階段に向かって歩き始めた。ふらついて倒れそうになり、柵に体を寄せた。

俺は立ち上がって、落ちていた俺の上着を引つ掴んで、テッローさんに駆け寄って肩を担いだ。二人してよたよた歩いて、階段を降りた。階段の途中で、きつとかおりの部屋だろうなあ、扉が閉まる音が聞こえたよ。

宇野さんに、回復屋が不在だったことと、住所を連絡して、携帯をジーパンにしまった。振り返ると、アパートの階段の一段目に腰掛けたテッローさんは右半身を柵に任せて、ほとんど息が止まりかけていた。もう喉から血が出ることもなかった。俺はテッローさんにかぶせた上着をそつと直して、隣に座った。宇野さんが着くまで、まだだいぶ掛かる。

テッローさん、これで死んじゃうのかな。と、ぼうつと思った。そしたらなんか泣けてきたんで、ガラでもないんで、俺は頭を振って考えを飛ばした。鼻の下を擦ったら、かおりのヘッドバンドで出てきた鼻血が、半分塊になって半分まだ濡れてて、俺の手の甲にくっついてきた。俺はジーパンで手の甲に付いた鼻血を拭いた。軽トラのトーフ屋が、車体の天井にくっつけたスピーカーからプープー

と例の笛の音をラジオかなんかの録音で流しながら、ゆつくりと俺たちの目の前を過ぎていった。空を見上げると茜色だった。俺とテツローさんには夕日が差さず、アパートの向かいの民家から伸びる影が降りていた。空気がだんだん冷えてきた。テツローさんの命を象徴するようで気味が悪かった。

「テツローさん。サナさんとはうまく行ってるんスか？」

テツローさんは場違いもはなはだしい俺の問いかけに、少し首を傾けて、上着の下の左目をギロギロと向けてきた。でもいつもの、見ただけで殺されるかを感じるような眼差しではなくて、鮮度のなくなつた魚類みたいな半透明の膜が、テツローさんの目に掛かってた。俺はまた泣きそうになって、背中が震えた。たまらずに目を逸らした。

「すいません。今聞く話じゃないっスよね」

俺は眉間を強く摘まんで、目を閉じた。

カンカンカン、とアパートの階段を鳴らしながら誰か降りてきた。俺たちは階段に座り込んで、塞いじまつてる。でもテツローさんをどかすことはできねえ。俺は立ち上がり、一人が通れるスペースを空けた。俺とテツローさんの数段上で立ち止まったのは、かおりだった。俺はギョツとした。かおりは俺のナイフを右手に握り締めていた。顔は無表情だったが、頬に涙が流れてた。かおりはテツローさんの目の前に立つと、身構えていた俺には脇目もくれず、自分の左手首から少し上をナイフで切り裂いた。鋭い切れ味から、かおりの赤い血がどつと溢れてきた。かおりは血を右手でぬぐい、左手を擦り合わせると、テツローさんのふところにしゃがみ込み、血まみれの両手をテツローさんの顔面に押しやった。ジャアアツと、よく熱した中華鍋で炒め物をするみたいな音と、火葬場から昇るよう

な白い煙が、テツローさんの顔とかおりの指の間から上がった。かおりは十数秒の後、押し当てていた手を離した。消し炭のようだったテツローさんの皮膚が血色のいい健康的な肌色に盛り上がり、猛禽類を連想させる左目の眼光が蘇っていた。かおりは再び自分の左手を切り付け、傷口から流れ出る血を両手に受け、今度はテツローさんの喉元へ押し付けた。顔面と同じように音と煙が上がる。かおりがテツローさんの傷の上に手を滑らせる度に、かおりの手の下からはテツローさんの肌色がぬめぬめと再生した。

「すまない」

表面は治っているように見えたけど、内側はそれほどじゃないらしい。久しぶりに俺が聞いたテツローさんの声は、ひどい力ぜを引いたみたいに、かすれていた。でも、かおりへの申し訳なさが、はつきりと聞き取れた。かおりは声を押し殺しながら、泣いていた。

「とまあ、そんなドラマがあつたわけだよ」

俺が話し終えると、目の前のバニーガールは、わあっと感動した表情で、熱心な拍手をした。俺はちょっと恥ずかしくなって、胸の前で組んでいた腕を解いて、照れ隠しに頭を掻いた。

「ジョージさんってお話うまいですよー、わたし思わず引き込まれちゃいましたっ！」

「そんな、褒められても、なんにも出ねえっすよ！　ただのお喋りジョージですよ！」

俺は今、とあるビルの裏で、バニーガールと逢引きしている。
嘘だ！ ごめん、ちよつと見栄を張ってしまった。バニーガール
と俺は何ともねえ、ただの売り子と客の関係だ。本当に何ともねえ。
心の底から、残念なことに、本当に、何もない。

目の前のバニーガールは四谷キノっていう、情報販売屋さんだ。
俺は彼女からテツローさんに関する過去の情報を買っている。俺
が知らない過去のテツローさんに起こった出来事を知っておきたい
からだ！

だけど、別にその情報は、テツローさんの私生活を知りたいって
いうストーカー的なもんじゃねえ。

テツローさんが今までにこなしてきた戦闘のアーカイブをもらっ
てるんだ。

まあ、ちよつとだけテツローさんの過去の私生活も、観ちまった
がな！ それは俺がキノちゃんに頼んだからじゃねえ！ なんか
知らねえが、キノちゃんがおまけで付けてくれたんだ！ 俺は別に
進んで見る気はなかったんだが、捨てるのももったいないんで全部
観たけど。テツローさんの女関係とか、恋人であるサナさんの妹
とお風呂に入っておっぱい揉んだりした過去も、それで知ったんだ！

さっきも言ったんだが、キノちゃんはバニーガールだ。今日は、
バニーガールのコスプレをしてる。頭に長い耳のついたカチューシ
ヤをつけて、リボンのついた黒いチョーカーをつけて、肩の大きく
出たバニースーツを着て、網タイツを履いて、ヒールの高い靴を履
いている。なんていうか、目に優しいよね！ いい保養になるよ！

キノちゃんは情報販売屋さんだが、彼女が売ってる情報は、彼女
の持ち物じゃない。彼女はただ、売り子をしているだけだ。実際に
情報を集めて、それを俺や他の人間にも閲覧可能な指輪という能力
に加工しているのは『キノミさん』という別の人物らしい。このコ
スプレも、キノミさんの命令で仕方なくやっているらしい。本人は
恥ずかしいんで嫌だっけって言うてるが、俺はキノミさんに深く感謝し

ている！

俺がキノちゃんの情報販売屋さんを知ったのは偶然だった。

コンビニの帰り道に、なんかピコピコと電子音が聞こえてきて、何となしにその音を辿っていったら、ビルの裏に続く路地の向こうから聞こえてるって分かった。路地を覗いてみると、十数メートル先のビルの裏から、虎の尻尾みたいなのが地面に落ちてた。不思議に思って足を踏み入れると、虎のコスプレをしたキノちゃんがコンクリに座り込んで携帯ゲーム機で遊んでいた。キノちゃんはゲームに夢中で、俺の存在には気がついていないようだった。俺が耳にしたピコピコは、ゲームのBGMだったわけだ。

俺はどうかのアミューズメント施設か何かのイベントで雇われたバイトが休憩してるのかと思ったが、この辺にあるのはコンビニくらいで、他は住宅かビルしかない。

キノちゃんの足元には、アタッシューケースが開かれていて、ケースの中には紫色の生地が敷いてあった。生地のかぼみに幾つかの指輪が入ってて、指輪には小さな紙が糸でくくりつけられていた。紙には値段と『サトウ』とか『スズキ』とか何とか、人の名前が書かれてた。

俺にはキノちゃんに声を掛けずに立ち去るという選択肢もあった。彼女が何者なのかも分かんないし、確かにたまに道端でアクセを売ってる露天とかは見えるけど、こんな人の通らない路地裏で商売している奴なんて見たことがない。おかしいっしょ。怪しいでしょ。俺の足も引き返しかけたんだけど、そんなのドラマじゃないよね。確かにものすつごく、怪しいけど、女の子だし、これは声を掛けるべきでしょ！俺は人生にドラマを求めているんだ！

「……ここであにしてんスカ」

「……あつ！」

キノちゃんは俺に気が付くと、手にしていた携帯ゲーム機を床に置き、尻を手で払いながら立ち上がった。多分俺は変なものを見るような目付きで彼女に向けていたはずだ。キノちゃんはなんか、きまりの悪そうな顔をして「あ……う……」とキョドッていた。が、いきなり俺との間に腕を突き出して、多分虎の力ギ爪をイメージしていたんだろうが、指の関節を折り曲げて、

「が、がお……あ、あつ、そうだ！」

がおー、ってやるんだと思ったらそれを止めて、キノちゃんは俺に背を向けてしゃがんだ。俺がさっき見た尻尾がキノちゃんの腰のあたりにくっついていたので、俺はそれを無性に引つ張ってみたくなったんだが、とりあえずキノちゃんを待ってた。キノちゃんはアタッシュケースの横に置いていた手袋をはめるのに夢中になっていた。手袋はぬいぐるみみたいなモサモサのやつで、虎の模様が描かれてた。普通の手袋と違って指先が丸くなっていて、先っぽにフェルトが何かで爪の飾りが付いている。キノちゃんは右手に手袋をはめ終わっていたんだが、さっき言ったみたいに指の先が丸くなっているんで、左の手袋をはめづらそうにして「あれ？ あれっ?!」と焦っていた。

なんだこりゃ。どういう台本だよ……。俺はドッキリカメラかと思っ、て、周りをきよるきよると見回してみた。そしたらホントにあった！ カメラあった！ 隣のマンションとを隔てる壁の上に、家庭用のビデオカメラが置かれて路地裏を撮影していた！ 俺はびっくりした。後でキノちゃんに聞いたら、カメラはキヨミさんに提出する証拠だと説明した。キノちゃんがちゃんとコスプレを着たまま売り子をやっているのか、キヨミさんが確認するためなんだとか。なんつームダなことをしているんだ。

ようやく虎の手袋を付け終えたキノちゃんが立ち上がり、俺に振り返った。キノちゃんは手袋を無事に付け終えられて、満足そうな笑顔だった。

「がー！　いらっしやいませっ！」

俺はなんのリアクションも取れずに押し黙った。

キノちゃんは笑顔を緩くして、顔を耳まで真っ赤にして、持ち上げていた腕を下ろして、うつむいた。

「いや、恥ずかしいんなら、やるなよ……。俺の質問の答えにも、なってないっしょ……」

「すみません……こうしないと、後で怒られるので……」

「そっかあ……なら、仕方ねーよな……そりゃ仕方ねえ」

「はい……仕方ないんです……」

世の中には仕方ないことなんて、山ほどあるしな。だけど、なんかもう、どうしていいか分かんなかったんで、黙ってた。

キノちゃんも黙ってた。

路地裏って、案外静かなあと思った。

そんな感じの数ヶ月前、俺はキノちゃんとのコネクションを手に入れたわけだ。

キノちゃんが売っているキヨミさんの指輪の性能は、スゲーもんだ。指輪をはめた人間の五感に干渉して、指輪に記録された出来事

を、映画も目じゃねえ臨場感で伝えてくれる。

こんなにスゲーアイテムを、なんでわざわざ路地裏で売ってるのかって聞いたたら、それもキヨミさんの指示だって言われた。

キノちゃんから聞いた話によると、キヨミさんが言うには、昔のRPGなんかだとさ、ちゃんとした武器屋よりも、村の外れに居るオッサンから、より強い武器を買えたりするじゃない？ アレをイメージしているらしい。売り上げとかは二次なんだと。キノちゃんからしてみれば、コスプレしたまま人目を引くよりは百倍マシだから、助かるとか。確かにバニーガールや虎が路上販売なんてしてたら、いい噂のタネだし、職質の格好の餌食だよな。

「それでそのあと、テツロー兄貴とジョージさんは、どうしたんですか？ かおりさんとは、どうなっただんですか？」

キノちゃんの頭に付いているウサミミは、キノちゃんの声に合わせてピョコピョコ動くんだ。どーいう仕組みなのかわかんねえ……。電池で動いているのか、もしかしたらこれもキヨミさんが作ったウサミミなのかもしれない。ウサミミの性能だとしたら、なんつうムダなことをやってんだらう。キヨミさんとは会ったことないけど、いい友達になれそうな気がする。

「その後は、俺とテツローさんがかおりに謝り通しだったよ。俺はテツローさんが人に頭を下げるのを初めて見たんで、ちよつとビツクリした！ テツローさん、普段は謝らないからね！ サナさんともものすげえ喧嘩して、理由を聞いたら明らかにテツローさんが悪いって時も、謝らないからね。でも次の日には、サナさんもニコニコしてるから、きっと夜にベッドの中で謝ったりしてるんじゃないかな。まあ童貞の俺には想像も付かないんだけどね」

キノちゃんはウンウンと頷いた。

「なるほど。【夜の帝王】たるユエンですね！」

キノちゃんは結構テキストだ！　だがそれが俺とマッチしてるから、いいんだけどね。

「んで、かおりだが。あいつはテツローさんの傷を治した後、俺とテツローさんの謝罪にはなんにも言わずに、部屋に帰っちゃった。それっきりだ。俺の台本にも、この先のことは書いてないんだ」

「そうですか」

俺に合わせて、キノちゃんも暗い顔をした。頭上のウサミミがキノちゃんに合わせて、中折れになってシボンとした。いちいちリアクションの取れるウサミミに、俺は感心した。すげえ。ちょっと欲しい。

俺は咳払いをして、真面目な男前の表情を作った。キノちゃんもハッとなって、眉をきつと引き上げ、口を結んで俺にならった。

「話は変わるが、四谷くん。俺が先週依頼をした、例のブツは用意してくれているのか？」

「はい、熊木さん。例のブツは、ここに！」

いい！　キノちゃん、いいよ！　俺の台本に合わせてくれる、数少ないテキストな人物だ！

キノちゃんは言いながら、アタッシュケースをゴソゴソして、指輪を一つ取り出した。

キノちゃんが取り出した銀の指輪の表側には、何の装飾もされて

いない。指輪の裏側には、キヨミさんが指輪を作成した日時と、ナンバーリングが掘り込まれている。

俺はキノちゃんの手にある、白い布の上に置かれた指輪を慎重に取り上げると、指輪の刻印を確認した。

『xx/x/2xxx T・Hoshino/No.70』と読み取れる。俺はニヤリとした。キノちゃんもニヤリとした。

「うむ。確かに。これが報酬だ！」

俺が折りたたんだ万札をキノちゃんに手渡すと、キノちゃんは勘定するときだけは真面目になって、ひいふうみい……と枚数をしっかり二度確かめる。きつとキヨミさんにきつく言い聞かせられてるんだろう。俺がキヨミさんでもそうするだろう。なんていうか、キノちゃんは、すぐうっかり騙されそうだからな。

「確かに受け取りました！ これは領収書がわりです！」

するするっとキノちゃんは後ろに下がり、足元のおぼつかないヒールでピョコピョコ跳ねながら、なんていうか、幼稚園のおゆうぎ会みたいなダンスを始めた。

「ぴょんぴょんぴょんぴょん、うさぎのダンス！ お買い上げ、ありがとうございまーす！」

クルクルっと回ると、右足を前に出し、左手を腰に当てて、右腕をパツと頭上に持っていていき、キノちゃんは俺にウィンクした。

俺は黙ってた。

キノちゃんの顔が、耳まで真っ赤になった。ウサミミがシボンとした。

「いや……別にいいよ。俺の時は、それ、やんなくても……」

「すみません……これやらないと、後で怒られるので……」

「そっか……じゃあ、仕方ないね……」

「はい……仕方ないんです……」

世の中には仕方ないことが、山のようにあるしな。

「そんじゃ、早速……」

「あつ、ちよつと待ってください!」

指輪をはめようとした俺を、キノちゃんが静止した。

「実はその指輪、他のと違ってちよつと特別なんですよ」

「え。どういうことなの?」

「清見さんが、いつも買ってくれるジョージだけに作った、特別製なんです。ジョージさんが指輪をはめてすぐに、誰かと手を繋いでください。その人とだけの限定ですけど、指輪のビジョンを共有できるんですよ!」

「おおっ! そいつは、スペシャルだな! キヨミさんに感謝だねっ!」

するといきなりキノちゃんが、俺にぐぐつと近づいてきた。俺はドキッとした。だって、バニースーツの胸元が大きく開いてるんだ

もん！

「私、そのビジョンまだ見たことないんです。星野哲郎、対、鰐淵武人！一緒に見てもいいですか！？」

「お、おお。もちろんだ！俺と一緒にテツローさんの熱き血潮を共有しようぜッ！」

「はいっ！共有しよう！」

「よっしゃ！それじゃあ、いくぜ！テツローアーカイブへ、レッツ・アクセス！」

俺は指輪をはめると、キノちゃんの手をギュッと握りしめた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2406n/>

魔女の夜

2011年6月21日19時20分発行